福岡空港西側整備に伴う埋蔵文化財調査報告

雀居(ささい)遺跡 3

福岡市埋蔵文化財調査報告書第407集

1995

福岡市教育委員会

雀居遺跡 3

福岡市埋蔵文化財調査報告書第407集

遺跡調査番号 9317
遺跡略号 SAS5

1995

福岡市教育委員会

序

福岡市は古来アジア大陸との交流を通じて発展し、今日の基礎を築いてきたのであります。昨今、国際化が叫ばれアジアに開かれた国際都市福岡を目指して努力し、文化、交通、経済の情報発信基地の地位を築いているところです。また福岡空港も国際化の波が訪れ、乗降客数、物流の著しい増加に伴いその機能が充分に発揮出来なくなろうとしています。そのため新たな海上空港の構想も検討されているところです。しかし当面の需要に対応するため空港西側地区の整備を進めているところです。

今回調査しました地区は自衛隊西部航空隊の移転に伴う埋蔵文化財調査であります。4次調査で縄文時代の終わりから弥生時代の後期にかけての農耕具を初めとする多くの木製品や大型掘立柱建物等貴重な文化財が出土しました。今回の調査は当初調査範囲に入っていなかった4次調査の東側地区の調査を実施いたしました。

雀居遺跡が位置する近くには初期水田遺跡の板付遺跡や甕棺墓地の金隈遺跡等の国指定史跡や那の津の官に比定される比恵遺跡群などがあり、さらには最古の二重環濠の那珂遺跡群等もあり弥生時代には奴国と呼ばれた地区にふさわしく遺跡の宝庫であります。

5次調査では縄文時代終わり頃の溝から最古の機織具や無文土器が出土し、当時の大陸文化との繋がりが窺え、さらには環濠集落が築かれ、大型掘立柱建物があり、環濠からは大型組合せ式机や木製短甲等あまり例を見ない木製品が出土し、当時の技術水準の高さを垣間見ることが出来ます。

最後になりましたが、調査の範囲拡大、長雨による期間延長など防衛施設局の方々には多大なご迷惑を懸けたことをお詫び申し上げます。また福岡空港関係者を初め発掘調査から整理、報告まで多くの皆様のご理解とご協力を得て、ここに報告書を刊行することが出来ました。皆様方に感謝の意を表するとともに、本書が文化財保護や普及、教育等に活用いただければ幸甚に存じます。

平成7年3月31日

福岡市教育委員会

教育長　尾花　剛

例　　言

(1) 本書は福岡空港西側整備に伴い発掘調査を実施した福岡市博多区雀居（福岡空港西側地区）に所在する雀居遺跡の５次調査の報告書である。

(2) 発掘調査は福岡市教育委員会が防衛施設局の委託を受け平成５年６月15日から同６年２月28日まで実施した。

(3) 発掘調査で検出した遺構はピットを除き001番からの通し番号とし、その頭に遺構の種類毎に記号を附し、甕棺をＫ、土壙をＳＫ、溝状遺構をＳＤ、掘立柱建物をＳＢ、竪穴住居跡をＳＣと表記した。またピットは別番号とし001番からの通し番号とし頭にＳＰの記号を附した。

(4) 本書に使用した遺構実測図の作成は調査担当者及び調査員が行い、遺物の実測図の作成には調査担当者の他に土器、土製品は小南裕一（明治大学）、濱石正子、撫養久美子、入江のり子、石器は小畑弘己（福岡市埋蔵文化財センター）、木製品は吉田扶希子、廣岩香、大丸陽子、田中昭子が行った。

(5) 本書に使用した図の製図は濱石正子、撫養久美子、入江のり子、藤村佳公恵が行った。

(6) 本書に使用した写真のうち遺構は松村、宮井善朗が撮影し、遺物は木製品の楯、及び短甲を二宮忠司、石器を小畑弘己（福岡市埋蔵文化財センター）にお願いし、他は松村が撮影した。

(7) 本書の執筆は石器を小畑弘己、木製品の漆の分析を本田光子（福岡市埋蔵文化財センター）にお願いし、その他は松村が執筆した。また紡織具に関する玉稿を布目順郎朗先生から戴いた。

(8) 本書に使用した方位はすべて磁北である。

(9) 本書に関する実測図、写真の記録あるいは遺物類は平成７年度に福岡市埋蔵文化財センターに収蔵する予定である。

(10) 本書に関するデーターは以下の通りである。

遺跡調査番号	９３１７			遺跡略号	ＳＡＳ－５
遺跡調査地籍	福岡市博多区雀居（福岡空港内）			分布地図番号	２３　雀居
開発面積	23,000㎡	調査対象面積	3,500㎡	調査面積	3,340㎡
調査期間	1993年（平成５年）６月15日～1994年２月28日				

本 文 目 次

本文頁

1．はじめに
1．調査に至る経過 ……1
2．調査の組織 ……1
2．遺跡の位置と環境 ……3
3．調査の記録
1．Ⅰ、Ⅱ区の調査 ……5
1）調査の概要 ……5
2）土層及び調査方法 ……6
3）甕棺墓 ……7
4）土　壙 ……8
5）竪穴住居跡 ……34
6）溝状遺構 ……39
7）掘立柱建物 ……64
8）環濠の調査 ……75
2．Ⅲ区の調査
1）土　層 ……117
2）検出した遺構 ……117
3．各区出土石器 ……119
4．まとめ ……131
4．付論
1．雀居遺跡出土の縄文晩期織具 ……133
2．雀居遺跡第5次調査出土漆製品の塗膜について ……136

目　次

Fig. 1　周辺遺跡分布図(1/50,000) ……3
Fig. 2　遺跡周辺地形測量図(1/4,000) ……4
Fig. 3　調査区土層実測図（1/80） ……6
Fig. 4　4・5次調査概略図（1/800） ……7
Fig. 5　K－179甕棺墓及び甕棺実測図（1/10・1/4） ……8
Fig. 6　SK－107・129実測図（1/40） ……9
Fig. 7　SK－107・129出土土器実測図（1/4） ……10
Fig. 8　SK－141・157実測図（1/40） ……11
Fig. 9　SK－141・157出土土器実測図（1/4） ……12
Fig.10　SK－159・161実測図（1/40） ……14
Fig.11　SK－159出土土器実測図(1)（1/4） ……15
Fig.12　SK－159出土土器実測図(2)（1/4・1/2） ……16
Fig.13　SK－159出土土器実測図(3)（1/4） ……17
Fig.14　SK－163・168・169実測図（1/40） ……18
Fig.15　SK－161・163・168・169出土遺物実測図（1/4・1/2） ……19
Fig.16　SK－175・176・178実測図（1/40） ……20
Fig.17　SK－175・176出土土器及び紡錘車実測図（1/4・1/2） ……22
Fig.18　SK－177・188実測図（1/40・1/30） ……23
Fig.19　SK－177・178出土土器実測図（1/4） ……24
Fig.20　SK－188出土土器実測図(1)（1/4） ……26
Fig.21　SK－188出土土器実測図(2)（1/4） ……27
Fig.22　SK－188出土土器実測図(3)（1/4・1/2） ……28
Fig.23　SK－205・209・226実測図（1/40・1/30） ……30
Fig.24　SK－205・209・226出土遺物実測図（1/4・1/8） ……31
Fig.25　SK－103実測図（1/40） ……32
Fig.26　SK－103出土土器実測図（1/4） ……33
Fig.27　SC－193実測図（1/80） ……34
Fig.28　SC－193出土土器実測図（1/4） ……35
Fig.29　SC－102・140・143・145出土遺物実測図（1/4・1/2・1/1） ……36
Fig.30　SC－102・106・115・218実測図（1/80） ……37
Fig.31　SC－140・143・145・219実測図（1/80） ……38
Fig.32　SD－003遺物出土状況実測図（1/80） ……40
Fig.33　SD－003上層出土土器実測図(1)（1/4） ……41
Fig.34　SD－003上層出土土器実測図(2)（1/4） ……42
Fig.35　SD－003上層出土土器実測図(3)（1/4） ……43
Fig.36　SD－003下層出土土器実測図(1)（1/4） ……45

Fig.37　SD－003下層出土土器実測図(2)（1/4）……46
Fig.38　SD－003下層出土土器実測図(3)（1/4）……47
Fig.39　SD－003下層出土土器実測図(4)（1/4）……48
Fig.40　SD－003下層出土土器実測図(5)（1/4）……49
Fig.41　SD－003出土遺物実測図（1/4・1/2）……50
Fig.42　SD－003出土木器実測図(1)（1/4）……52
Fig.43　SD－003出土木器実測図(2)（1/4）……53
Fig.44　SD－003出土木器実測図(3)（1/4）……54
Fig.45　SD－003出土木器実測図(4)（1/4）……55
Fig.46　SD－003出土木器実測図(5)（1/4）……56
Fig.47　SD－003出土木器実測図(6)（1/4）……57
Fig.48　SD－003出土木器実測図(7)（1/4）……58
Fig.49　SD－003出土木器実測図(8)（1/4）……59
Fig.50　SD－003出土木器実測図(9)（1/4・1/8）……60
Fig.51　SD－003出土木器，SD－104・174実測図（1/8・1/80）……61
Fig.52　SD－104・119・174出土遺物実測図（1/4）……62
Fig.53　SB－222実測図（1/80）……66
Fig.54　SB－225実測図（1/80）……67
Fig.55　SB－226実測図（1/80）……68
Fig.56　SB－227・231・232実測図（1/80）……69
Fig.57　掘立柱建物柱穴土層実測図（1/40）……70
Fig.58　掘立柱建物礎板実測図(1)（1/8）……71
Fig.59　掘立柱建物礎板実測図(2)（1/8）……72
Fig.60　掘立柱建物出土遺物実測図（1/4・1/2）……73
Fig.61　SD－002遺物出土状況実測図（1/80）……74
Fig.62　SD－002上層出土遺物実測図（1/4・1/2）……76
Fig.63　SD－002下層出土遺物実測図（1/4）……77
Fig.64　SD－002出土小型倣製鏡実測図（2/3）……78
Fig.65　SD－002出土木製短甲及び楯実測図（1/2）……79
Fig.66　SD－002出土杭実測図（1/4）……80
Fig.67　SD－002出土杭実測図（1/4）……81
Fig.68　SD－002出土木器実測図（1/4）……82
Fig.69　SD－002出土木器実測図（1/4）……83
Fig.70　SD－002出土木器実測図（1/4）……84
Fig.71　SD－002出土木器実測図（1/4）……85
Fig.72　SD－002出土木器実測図（1/4・1/8）……86
Fig.73　SD－221遺構全体実測図（1/80）……87
Fig.74　SD－221出土土器実測図(1)（1/4）……89
Fig.75　SD－221出土土器実測図(2)（1/4）……90
Fig.76　SD－221出土土器実測図(3)（1/4）……91

Fig.77　ＳＤ－221出土土器実測図(4)（1/4）……92
Fig.78　ＳＤ－221出土土器実測図(5)（1/4）……93
Fig.79　ＳＤ－221出土土器実測図(6)（1/4）……94
Fig.80　ＳＤ－221出土土器実測図(7)（1/4・1/3）……95
Fig.81　ＳＤ－221出土土器実測図(8)（1/4）……96
Fig.82　ＳＤ－221出土土器実測図(9)（1/4）……98
Fig.83　ＳＤ－221出土土器実測図(10)（1/4）……99
Fig.84　ＳＤ－221出土土器実測図(11)（1/4）……100
Fig.85　ＳＤ－221出土土器実測図(12)（1/4）……102
Fig.86　ＳＤ－221出土土器実測図(13)（1/4）……103
Fig.87　ＳＤ－221出土土器実測図(14)（1/4）……104
Fig.88　ＳＤ－221出土遺物実測図（1/4・1/1）……105
Fig.89　ＳＤ－221出土木器実測図(1)（1/4・1/2）……106
Fig.90　ＳＤ－221出土木器実測図(2)（1/4）……107
Fig.91　ＳＤ－221出土木器実測図(3)（1/4）……108
Fig.92　ＳＤ－221出土木器実測図(4)（1/4）……109
Fig.93　ＳＤ－221出土木器実測図(5)（1/4）……110
Fig.94　ＳＤ－221出土木器実測図(6)（1/4）……112
Fig.95　ＳＸ－101遺物出土状況実測図（1/40）……113
Fig.96　ＳＸ－101出土木器実測図（1/4）……114
Fig.97　ＳＸ－101・ピット出土木器実測図（1/4・1/8）……115
Fig.98　Ⅲ区全体測量図（1/200・1/80）……116
Fig.99　杭列、出土遺物実測図（1/100・1/4・1/3）……118
Fig.100　各区出土石器実測図(1)（2/3）……120
Fig.101　各区出土石器実測図(2)（2/3）……121
Fig.102　各区出土石器実測図(3)（1/2）……122
Fig.103　各区出土石器実測図(4)（1/2）……123
Fig.104　各区出土石器実測図(5)（1/2）……124
Fig.105　各区出土石器実測図(6)（1/2）……125
Fig.106　各区出土石器実測図(7)（1/2）……126
Fig.107　各区出土石器実測図(8)（1/2）……127
Fig.108　各区出土石器実測図(9)（2/3）……128

図 版 目 次

PL. 1 （1）ＳＤ－002出土木製短甲（表）
（2）ＳＤ－002出土木製短甲（裏）
PL. 2 （1）ＳＤ－002出土木製短甲（細部）
（2）ＳＤ－002出土木製短甲（細部）
（3）ＳＤ－002出土木製楯（裏）
（4）ＳＤ－002出土木製楯（表）
PL. 3 （1）ＳＤ－002出土木製楯（裏）
（2）ＳＤ－002出土木製楯（表）
（3）ＳＤ－003出土無文土器
（4）ＳＤ－003出土外来系土器
PL. 4 （1）ＳＤ－003出土土器
（2）溝、掘立柱建物出土青銅器
PL. 5 （1）Ｉ区調査区全景（南から）
（2）II区調査区全景（南から）
PL. 6 （1）甕棺出土状況
（2）ＳＫ－107（西から）
PL. 7 （1）ＳＫ－159（東から）
（2）ＳＫ－159遺物出土状況
PL. 8 （1）ＳＤ－174、ＳＫ－175（北から）
（2）ＳＫ－175遺物出土状況
PL. 9 （1）ＳＫ－177（西から）
（2）ＳＫ－188（南から）
PL.10 （1）ＳＫ－209（西から）
（2）ＳＤ－003下層木器出土状況（南から）
PL.11 （1）ＳＤ－003木器出土状況
（2）ＳＤ－104（北西から）
PL.12 （1）ＳＤ－104木器出土状況
（2）住居跡群（南東から）
PL.13 （1）ＳＣ－193（北から）
（2）ＳＢ－222（南西から）
PL.14 （1）ＳＢ－225（西から）
（2）ＳＢ－226（西から）
PL.15 （1）ＳＢ－232（東から）
（2）ＳＤ－002全景（東から）
PL.16 掘立柱建物礎板（ＳＢ－222）
PL.17 掘立柱建物礎板（ＳＢ－225,226,232）
PL.18 （1）ＳＤ－002完掘状況（東から）
（2）ＳＤ－002木器出土状況（東から）
PL.19 （1）ＳＤ－002木製短甲出土状況
（2）ＳＤ－002中央土層（東から）
PL.20 （1）ＳＤ－221全景（西から）
（2）ＳＤ－221土層（東から）
PL.21 （1）ＳＤ－221木器出土状況
（2）III区全景（西から）
PL.22 （1）III区杭列全景（西から）
（2）III区Ａ杭列断面（西から）
PL.23 Ｋ－179甕棺下、ＳＫ－107、159出土土器
PL.24 ＳＫ－159出土土器
PL.25 ＳＫ－159、175、177出土土器
PL.26 ＳＫ－178、188号出土土器
PL.27 ＳＫ－188出土土器
PL.28 ＳＤ－003出土土器
PL.29 ＳＤ－003出土土器
PL.30 ＳＤ－003出土土器
PL.31 ＳＤ－221出土土器
PL.32 ＳＤ－221出土土器
PL.33 ＳＤ－221出土土器
PL.34 ＳＤ－221出土土器
PL.35 ＳＤ－221出土土器

PL.36　ＳＤ－002、221出土土器、土製品
PL.37　ＳＤ－002、ＳＫ－104、ＳＢ－222、ＳＣ－140、145出土土器
PL.38　ＳＤ－003出土木製品
PL.39　ＳＤ－003出土木製品
PL.40　ＳＤ－003、104出土木製品
PL.41　掘立柱建物礎板
PL.42　ＳＢ－225出土柱、ＳＤ－002出土木製品
PL.43　ＳＤ－002出土木製品
PL.44　ＳＤ－002、221出土木製品
PL.45　ＳＤ－221出土木製品
PL.46　ＳＤ－221出土木製品
PL.47　ＳＤ－221、ＳＸ－101、ピット出土木製品
PL.48　各遺構、及び包含層出土石器（１）
PL.49　各遺構、及び包含層出土石器（２）
PL.50　各遺構、及び包含層出土石器（３）

1　はじめに

1．調査に至る経過

近年、国際化が進み、航空機需要は急速に高まりをみせ福岡空港の機能も飽和状態となりつつある。その解消のため米軍キャンプ跡の空港西側地区の整備を行いその需要に応えようとしている。西側地区の整備に伴い自衛隊の諸施設が北側から南側への移転を余儀なくされた。空港が建設されたのは戦時中ということもあり文化財について云々するような時代では無かった。高度成長期になり埋蔵文化財に対する機運が高まり、発掘調査が盛んになり、開発側との調整等周知化の一助からも埋蔵文化財分布地図が作成されたが空港用地と言うこともありこれまで遺跡の空白地帯となっていた。空港西側地区が整備されることになり関係部局と協議を行い当該地の埋蔵文化財の試掘調査を平成３年度に実施した。その結果三地点から弥生時代集落、古代の集落、水田跡を確認でき、本調査を実施することとなった。今回調査した地点は試掘調査では弥生時代から古墳時代に至る小規模な包含層あるいは集落との予想で平成４年度に調査（４次調査）に着手したが、調査が進むに従い環濠、大型掘立柱建物が検出され、小型の組合せ式机、農具、漆塗り木製品など多くの注目すべき遺物が出土し報道機関に大きく取り上げられるほどの重要で大規模の遺跡と認識されるようになった。４次調査は防衛施設局との協議の結果、当初の期間を年度末の３月31日まで延期し実施したが、調査範囲内では遺跡の範囲は収まらなく、さらに東側（滑走路側）に遺跡が拡大することは確実となり、再度関係機関と協議を行い５次調査を実施する運びとなった。調査は平成５年６月15日から10月31日までの予定であったが夏期の長雨の影響で調査が遅延し翌平成６年２月28日まで変更契約して実施した。

2．調査の組織

調査委託　防衛庁施設局

調査主体　福岡市教育委員会　教育長　尾花　剛

調査総括　文化財部長　後藤　直
埋蔵文化財課長　折尾　学
主席文化財主事　塩屋勝利
埋蔵文化財課第二係長　山崎純男

調査庶務　埋蔵文化財課第一係　入江幸男

調査担当　主任文化財主事　松村道博
埋蔵文化財課第二係　宮井善朗　白井克也　加藤隆也

試掘調査　主任文化財主事　井澤洋一
埋蔵文化財課第二係　長家伸　常松幹夫

調 査 員　濱石正子　舘葉久美子　入江のり子　小南裕一

調査作業　広田熊雄　別府俊美　蒲池雅憲　徳永栄彦　安高清一　野中辰雄　山口守人　小川博
藤川健　村本義雄　井上義也　川野博之　尾中貞夫　原田清次　富永利幸　渡辺純男
氷川カッエ　内山和子　奥田弘子　鳴ヒサ子　本多ナツ子　村上エミ子　安高久子
平田百合子　草場里恵　黒木佐知子　岸原昭子　濱フミコ　入江清治　是出敦
黒木佐千子　堤正子　今泉博子　平田こずえ

整理作業　牟田恵子　飯田千恵子　前原真理　白水貴子　和田麗子　斎藤和子　福地麻子
大神信　江田のり子

なお以下の方々を初めとして多くの方々に調査中に来訪を受け指導、助言を戴いた。

宮本長二郎（東京国立文化財研究所）設楽博己（国立歴史民族博物館）　小澤毅　浅川滋男　深澤芳樹（奈良国立文化財研究所）車崎正彦（早稲田大学）若林弘子　鳥越憲三郎（日本生活文史学会）

金邱軍（湖厳美術館）永島暉臣慎（大坂市文化財協会）柳本照男（豊中市教育委員会）大野晉（学習員大学）佐藤攻（東京都教育庁）鳥恩　謝瑞据　殷緯璋　王巍　安志敏（中国社会科学院考古研究所）禰宣田佳男（大阪府立弥生文化博物館）　申大坤（国立中央博物館）藤田憲司（大阪府埋蔵文化財協会）麻生優（千葉大学教授）　森貞次郎　坪井清足（大阪埋蔵文化財センター）　春成秀爾（国立歴史民族博物館）　岡村道雄（文化庁記念物課）　高島忠平（佐賀県教育委員会）

また、出土した木製短甲、楯の保存処理及び鑑定については以下の方々の指導を得た他福岡市埋蔵文化財センターの全面的な協力に依るものである。

遺物（漆製品）の鑑定

工楽　善通　（奈良国立文化財研究所　飛鳥資料館集落遺跡研究室　室長）

材質（樹種）の鑑定

光谷　拓実　（奈良国立文化財研究所　埋蔵文化財センター　保存工学研究室主任研究官）

材質（漆塗膜）の分析調査

岡田　文男　（(財) 京都市埋蔵文化財研究所　調査部　資料課第2資料係主任）

材質（顔料）の分析調査

成瀬　正和　（宮内庁正倉院事務所保存課保存科学室長）

遺物（漆、木製品）の保存処理

横田　義章　九州歴史資料館

中川　正人　（財）滋賀県文化財保護協会　調査整備課

2．遺跡の位置と環境

雀居遺跡は福岡空港西側整備に伴い、事前に試掘調査により遺跡の存在を確認し今年度で8次にわたり発掘調査を実施している。平成4年度に「雀居遺跡1」を刊行し、さらに今年度「雀居遺跡2」も刊行するので重複を避けるため、最近の調査を中心に簡略に位置と環境について述べる。雀居遺跡は御笠川の東岸にあたり標高5m前後を測る沖積地に位置する。諸岡丘陵と月隈丘陵に挟まれた低湿地の水田地帯であったが、現在ではほとんどが宅地化されている。調査地点は宅地化が進み密集化している中で広大な空間を造りだす福岡空港の南西端、空港内の外周道路と滑走路の間、大部分が米軍接収時代の築堤の下にあたる。空港の建築で現在では平坦に造成されているが、それ以前の地図によると水田の中に微高地の存在が窺われ、そこに幾つかの集落が展開している。戦時中に空港工事に携わった人々の伝聞によれば甕棺や土器が出土したとの事であり、遺跡の存在が予想されていた。

比恵台地から月隈丘陵に囲まれた地帯には多くの遺跡が立地している。月隈丘陵は空港の東側に展開する低い丘陵で弥生時代から古代、中世に至る多くの遺跡が存在する。その中で空港に隣接するだけでも学校、公園、道路建設等に伴い席田遺跡群、大神森遺跡、下月隈遺跡等が調査されている。宝満尾遺跡では弥生時代前期の貯蔵穴や甕棺を検出し、甕棺から日光鏡が出土している。また久保園遺跡では弥生時代の5間×8間の大規模な掘立柱建物が調査され、赤穂ノ浦遺跡では小銅鐸の鋳型が発見されている。空港の南東隅から150m東の丘陵裾の天神森遺跡3次調査では丘陵の裾部に弥生時代前

1．雀居遺跡 4．那珂深ヲサ、君休遺跡 7．席田久保園遺跡 10．宝満尾遺跡 13．下月隈宮ノ後遺跡 16．堅粕遺跡
2．板付遺跡 5．那珂遺跡群 8．席田大谷遺跡 11．宝満尾東遺跡 14．金隈遺跡 17．吉塚遺跡群
3．諸岡遺跡 6．比恵遺跡群 9．席田赤穂ノ浦遺跡 12．下月隈天神森遺跡 15．博多遺跡群

Fig. 1 周辺遺跡分布図(1/50,000)

期の木棺墓が出土している。20数基が二列に埋葬され、棺外には副葬の小壺が見られた。空港南側縁地の試掘調査では中世？の水田が全面に拡がりその下から弥生時代の集落が点在し発されている。さらにその南には金隈遺跡がある。弥生時代全期にわたる甕棺墓地で大規模の遺跡ではあるが副葬品は貧弱でゴホウラ製の腕輪があるに過ぎない。雀居７次調査地点は空港内で今回調査地の北約300mに位置し、微高地の先端部に弥生時代前期の土壙墓６基、甕棺墓８基があり大部分に人骨が遺存していた。全体の骨格が判り、指の骨まで遺存する残りの良好なものや、頭蓋骨だけの土壙も見られその葬法を考えさせられる例もある。この微高地を囲む縁に古墳時代前期の土器を大量に投棄した環濠状遺構があり、その内部から井戸５基を検出している。その下からは弥生時代初頭の土壙が多く点在しており、飛行場内の微高地上には弥生時代初頭から古墳時代前期に及ぶ小規模な遺跡が点在するものと考えられる。

水田跡は検出出来ていないが、おそらく集落の周辺に水田が展開し、小高い地点には墓地が営まれていたものであろう。

御笠川西岸には大規模な遺跡が数多く展開している。南1.5kmの初期水田跡と環濠で知られ板付遺跡や、そのさらに西の諸岡丘陵の遺跡群が拡がり、旧石器時代以降の生活の跡が知られてる。無文土器等も出土して、大陸との交流を窺わせる。那珂、比恵遺跡群は宅地化が進み旧地形を残す地点は少なく、細切れの調査が多いが弥生時代から古墳時代に至る良好な遺跡が多い。那珂37次調査では縄文時代晩期の二重環濠が検出され、20次、23次調査では弥生時代中期後半の環濠が調査されている。大型掘立柱建物も多く検出されており、奴国にふさわしい遺跡の宝庫と言える。

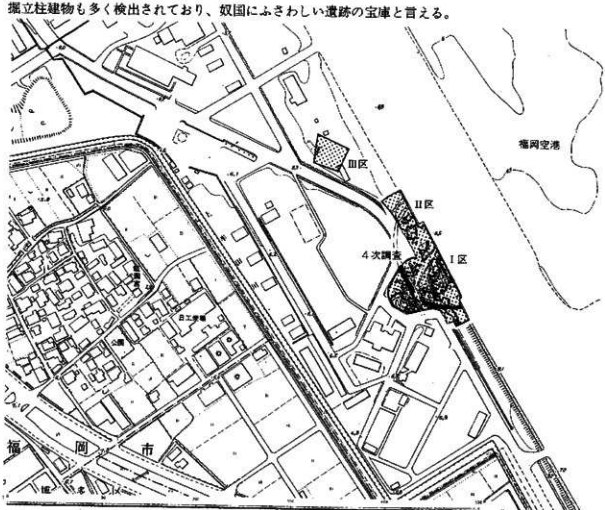


Fig. 2　遺跡周辺地形測量図(1/4,000)

3．調査の記録

1．Ⅰ、Ⅱ区の調査

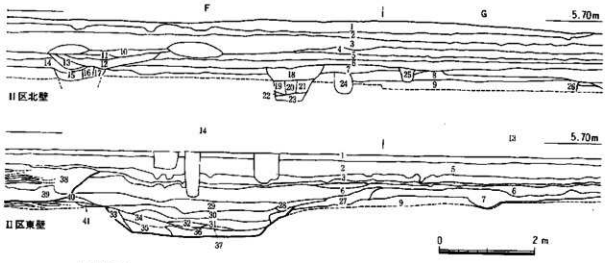
1）調査の概要

検出遺構

4次調査で試掘調査の結果と大きく異なり遺構、遺物の遺存状態が良好で特に縄文時代晩期から弥生時代に至る多量の木製品、及び同後期の環濠、大型建物を初めとする各種の遺構、遺物が発見されその重要性が再認識された。今回調査の主要な目的は縄文時代晩期溝の確認、弥生時代後期溝及び大型建物の時期の確定、性格及び全体像の把握であった。

縄文時代晩期から弥生時代前期の遺構は4次調査で確認された溝(SD-003)の続きと径4～5mを測る不整形の土壙、貯蔵穴、溝状遺構等があるが住居跡の検出までには至らなかった。SD-003は4次調査区では弥生時代後期の溝(SD-002)とほぼ重なりあいながら東へ延びていたが5次調査区になると方向を大きく変え南へ屈曲し台地縁を蛇行している自然流路の状況を示す。床面は部分的に深くなり特に調査区の南端部は深くなりそこに木製品や土器等の遺物が多く出土した。木製品には諸手鍬の未製品、建築材、丸木を刳抜いた容器や漆塗りの椀、石斧柄の製品、未製品等がある。他に注目すべきものとして機織具があげられる。詳細については後述するが幅6cm弱の板状で両端に把手部を持つ。土壙は径4～5mを測り平面は不整形で深さも5～10cmと浅く中からは土器の破片とともに猪の頭骨を初めとして多くの獣骨や鳥の骨が出土している。ピットもほとんどなく住居跡とは考えられなく廃棄用の土壙であろう。前期の貯蔵穴は3基ある。中期の遺構は土壙が1基、小児用甕棺が1基と希薄になる。弥生時代後期になると環濠(SD-002、SD-221)が巡らされ大型掘立柱建物(SB-222)が現れる。環濠全体は調査出来なく、全体の規模、形態は明らかではないが現状から推測すると東西に長い楕円形を呈するもので約200m×130mの規模であろう。今回の調査はその西端部分にあたり、現状では南北115m、東西約40mを測り全体の1/6程度の調査と考えられる。環濠からの遺物の出土状況は地点により大きく異なり4次調査の東半分は上層から土器が集中して出土し、その下から大量の木製品が発見されている。今回調査の南端すなわち4次調査の東側では上層には遺物をあまり含まず中層から加工の無い流木や木製短甲や楯、机を初めとする木製品が多く出土している。さらに北の環濠(SD-221)では上層から中層に大量の土器が投棄され下層から少量の木製品が出土し、環濠集落の場所により機能、用途の変化を窺うことができる。大型掘立柱建物は4次調査で一棟、今回の調査で一棟(SB-222)、それと同じ規模の柱穴掘方を持つ倉庫と考えられる建物が3棟(SB-225、226、232)検出された。SB-222は北環濠の内側20mほどの位置にあり、梁行4間、桁行6間を測る規模である。中央部には棟持ち柱と考えられる大型ピットが見られる。柱穴の掘方は大きく二段に掘り込まれ床には1枚から3枚の礎板を敷いている。これらの礎板は他の加工痕がないことから建築材の転用ではなく当初から礎板として造られたものであろう。柱はその柱痕から30～40cm位の柱を使用していたと推定できる。

古墳時代の遺構では前期の住居跡が数棟、土壙が2基検出された。これは遺跡の立地する土壌が黒色土で遺構を確認出来なかったためこの土層を除去してから調査を実施したためで本来多くの住居が営まれていたもので深い遺構のみが結果的に遺存しているのであろう。調査する面まで掘り下げる途中多くの上器が出土していることからも理解できる。住居跡は一辺が4～5mの長方形であるが詳細については残りが悪く明らかにする事が出来なかった。



1. 明黄褐色土
2. 灰褐色砂質土
3. 黄白褐色土
4. 淡灰色土
5. 淡灰褐色土
6. 暗褐色土（黒）
7. 暗～黒褐色粘質土（6より締りあり）
8. 暗褐色砂質土
9. 灰色砂
10. 青灰色土
11. 灰色土
12. 淡灰色砂質土
13. 暗褐色砂質土
14. 暗褐色土（6と同じ）
15. 暗褐色土（砂質土混り）
16. 暗褐色土（径炭・赤色粒子混り）
17. 暗褐色土（15と同じ）
18. 暗褐色土（やや粗く、粒子荒り）
19. 暗褐色土（15と同じ）
20. 暗褐色土（径炭・赤色粒子混り）
21. 暗褐色土（15と同じ）
22. 暗褐色土（粘土ブロックあり）
23. 暗褐色土（径炭あり）
24. 暗褐色土
25. 暗灰色土
26. 暗褐色砂質土
27. 暗青灰色粘質土
28. 青灰褐色粘質土
29. 灰褐色粘質土（植物遺り）
30. 灰褐色粘質土
31. 灰褐色粘質土（植砂遺り）
32. 灰褐色粗砂
33. 黒灰色粘質土
34. 黒灰色粘質土
35. 黒灰色粘質土（34より粘性強い）
36. 淡灰色粗砂
37. 暗褐色粘質土
38. 黄褐色土（砂遺り）
39. 暗褐色土
40. 黒褐色粘質土
41. 黒褐色粘質土

Fig. 3 調査区土層実測図（1/80）

2）土層及び調査方法

土層

土層の標準的な堆積層序は以下の通りである。場所により多少異なる。1、2層－明黄褐色土ないし灰褐色砂質土。飛行場建設時の盛り土である。3層－黄白褐色土。東端では20cmほどの厚さであるが、西に行くに従い厚さを増し約50cmの厚さとなる。平坦な地形はこの時期に形成されたもと考えられる。4層－淡灰～青灰色土層。台地中央の高い部分を中心に調査区中央部まで拡がるが西側では消滅している。グライ土壌化した土層で遺物は含まない。5層－淡い暗褐色土。この層がIII区の水田面と思われ、当時（中世？）の生活面となる。生活遺物はこの層以下から出土する。6層－濃い暗褐色土。表土掘削時に土師器を採集している。土層面にも希薄であるがピットが幾つか見られ一時期の生活面であることが判る。7層－暗～黒褐色粘質土。水分を多く含むと粘質が著しくなる。この層の下層から古墳時代の土器がまとまりをもって出土する個所もあり、調査を行ったが部分的に遺構のラインを確認できるが全体を把握するまでには至らなかった。8層－黒～暗褐色砂質土。無遺物層で、この面で遺構を確認し調査を実施した。I区の東半分では7層との間に青灰色のシルト層が挟まれる。その分だけ東部が僅かに高くなっている。9層－灰色砂層。遺跡全体を覆うもので御笠川の氾濫により形成されたものであろう。

調査の方法

今回の調査の主眼は前回の調査で確認した大型掘立柱建物を巡る溝が環濠になるのか否かと縄文時代晩期の溝の範囲確認及び大型掘立柱建物の時期を明確にすることであった。4次調査で弥生時代か

ら古墳時代にかけての包含層が確認されていたので6層の上部まで重機により除去し、その面で遺構確認を実施した。しかしながら小さなピットを数個確認できただけであった。遺物も少量しか出土していなく、さらに調査開始から8月の初旬まで長雨が続くなどもあり工事との関係もあり、7層まで重機で除去し調査を実施した。6、7層から遺物が出土するのでその取上げ等のため10mの方眼を設定した。その後の工事で4次調査の杭が1本も残っていなかったので4次調査のグリットに合うように任意に設定した。グリットの呼び名は調査区の南西隅をG－1とし東西をアルファベットで南北を算用数字で表した。例言で述べたように遺構の呼び名はピットを除き001からの通し番号とし、その頭に種類ごとにアルファベットで表記した。ピットは別番号とし001番からの通し番号とした。なお、4次調査と明らかに続くSD-001から003はそのまま使用したが環濠の北側部分は別番号とした。

3）甕棺墓

I区の南よりの地点で1基だけが出土した。甕棺は本来群を形成することが通例であるが、この甕棺は単独あるいは数基の小規模のものである。

K－179甕棺墓（Fig.5, PL.6,23）

H－4区から検出した小児用の甕棺である。6層で甕の一部を確認できたが掘り方が不明であった。上甕は大部分が削平された甕と甕の組合せの甕棺である。主軸はN-80°-Eをとり、埋置角度は40°である。

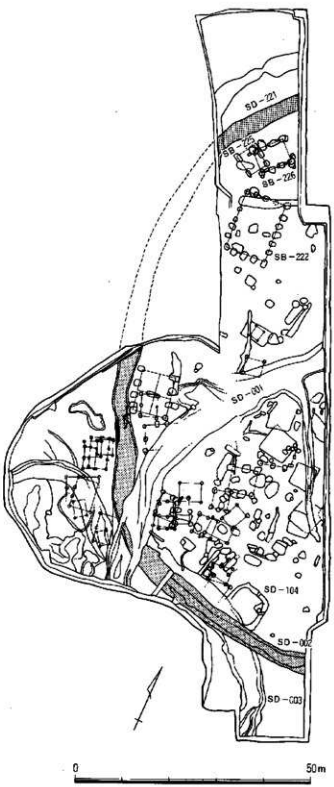


Fig. 4　4・5次調査概略図（1/800）

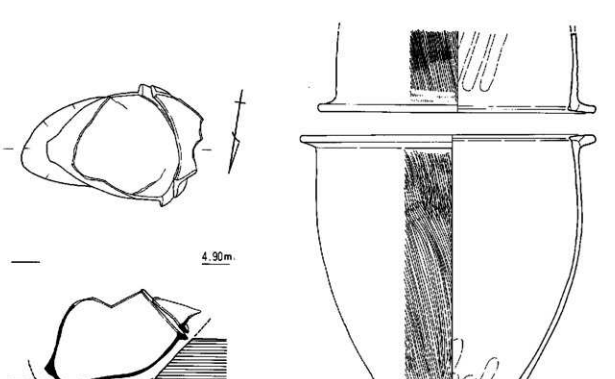


Fig. 5　K－179甕棺墓及び甕棺実測図（1/10・1/4）

掘り方は甕棺ぎりぎりに掘られ、平面形は楕円形である。

上甕　口縁部から胴部にかけて遺存し、胴部下半から底部にかけて欠損する。口縁部に最大径をもつ逆L字状の口縁で、膨らみのない胴部となる。口縁部上面は平坦で内傾し、内面への張り出しはほとんどない。口縁部はヨコナデ、胴部外面は縦方向の刷毛目調整、内面はナデである。

下甕　口縁部から胴部の一部を欠損するがほぼ復元完形で口径31cm、器高35.1cmを測る。厚く丸みのある逆L字状の口縁から膨らみのない胴部となり、上げ底の底部となる。胎土には砂粒を多く含むが良好で焼成も良く赤褐色ないし茶褐色を呈する。口縁部はヨコナデ、胴部外面は縦方向の刷毛目調整、内面はナデで底部から胴部に掻き上げた指跡が残る。中期前半の甕棺である。

4）土壙

縄文時代晩期から古墳時代前期前半にかけての土壙がある。用途不明の土壙が多いがＳＫ－178、188等弥生時代の貯蔵穴等であろう。突帯文土器を出土する土壙は鳥、獣骨なども出土し廃棄用の土壙であるが本来的には別の用途の壙を再利用した可能性もある。

ＳＫ－107（Fig.6, ＰＬ.6）

Ｇ－４区、４次調査区に接して検出した大型の土壙である。主軸はほぼ東西にとる隅丸長方形の土壙である。各辺とも直線的ではなく蛇行する。西側は二段に掘り込まれ、深さ15cmで床面は平坦。二段目の壁面はなだらかに傾斜し床面は東が深くなり60cmを測る。規模は長軸3.7m、短軸1.85mを測る。土層は自然堆積状況を示し、１層－軟質の淡い暗茶褐色土、２層－暗茶褐色土で締まりがあり、少し

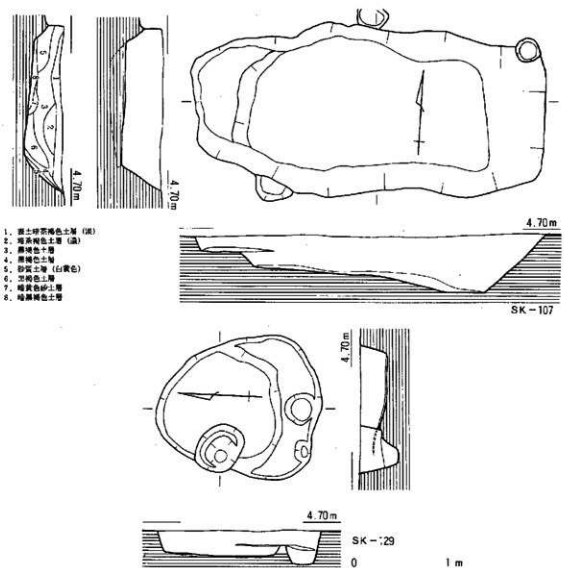


Fig. 6　ＳＫ－107・129実測図（1/40）

濃色を呈する。３層－黒褐色土、軟質で締まりがなく少し粘質がある。４層－黒褐色土。３層に比べ黒味、粘性も強い。５層－漆黒～黒褐色土。６層－暗黄灰色砂質土。基盤層の砂質土に覆土の一部が混入した土層である。

出土土器（Fig.7－1～8，ＰＬ.23）

１～６は甕形土器である。１、２は甕形土器の口縁部から胴部にかけての破片である。１は断面三角を呈する口縁部で胴部にも小さな三角突帯を貼付る。胴部は丸味をもち口縁部にかけて内傾する。口縁部は内外面ともヨコナデ、胴部の突帯以下は縦方向の細かい刷毛目調整である。２は台形に近い粘土帯を貼り付け上面を丸くし外端に棒状工具の押圧により斜めの刻み目をもつ。口縁部はヨコナデで胴部外面の刷毛目調整との境が段状に窪む。いずれも胎土に２から３㎜の砂粒を含み、焼成良好で外面は淡橙色、内面は淡灰色である。３～６は甕形土器の上げ底の底部破片である。底部の畳付きが平坦なものや丸味をもつのもある。外面は刷毛目調整で内面はナデで指跡が残るのもある。７、８は小型の器台である。７は口径5.9cm、底径7cm、器高11.8cmを測る。中空ではなく上、下から4cmほどを円錐状に抉る。口縁部の一端にＵ字状に窪ませる。７は1/2しか残っていないが８では相対する位置にＵ字状の窪みが一対認められる。外面には整形時の指跡が残りその上から研磨状の丁寧な縦方向のナ

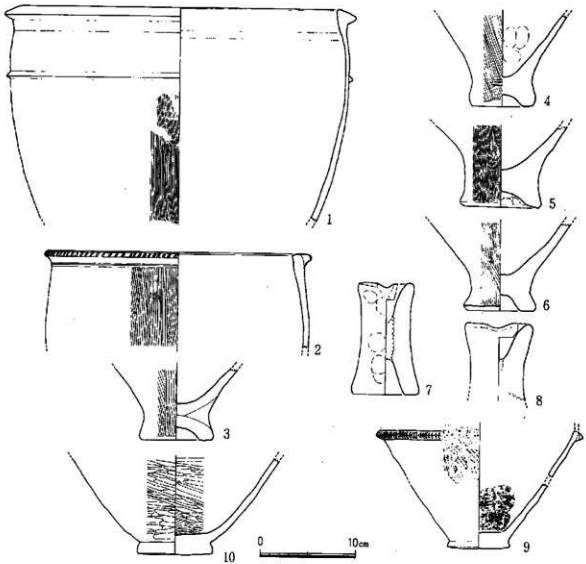


Fig. 7　SK－107・129出土土器実測図（1/4）

デを施す。以上から中期初頭の土壙であろう。

SK－129（Fig.6）

H－4区、SK－107の東約8mに位置する夜臼式単純期の不整円形の浅い土壙である。覆土は暗褐色の軟質土で床面近くに基盤層の灰色砂層を含んでいる。西側で後世のピットに切られ、南側には二個のピットがある。南側は弧状に二段に掘り込まれ、北側が一段深くなる。床面はほぼ平坦で、壁面は垂直近く立ち上がる。遺物は北西部より少量出土しただけである。

出土土器（Fig.7－9、10）

9は甕形土器の胴部から底部にかけての破片である。胴部で屈曲し偽口縁を呈し外面に刻み目突帯を巡らす。底部は上げ底で外への張り出しは少ない。粗雑な造りで内面は底部近くは条痕、他は横方向のナデ、外面は条痕調整である。10は鉢形土器の胴部から底部にかけての破片。胎土には砂粒を含むが精良で焼成堅緻で暗褐色を呈する。内外面とも横方向の丁寧な篦研磨を施す。

SK－141（Fig.8）

G－6区の南東隅に位置する大型の土壙である。調査時は西側にあるSK－159を切ると考えたが、

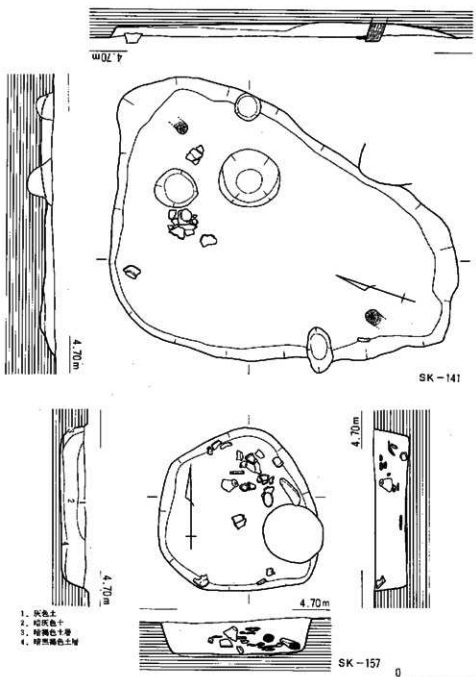


Fig. 8　SK－141・157実測図（1/40）

出土遺物からすると逆に切られていたものであろう。北側のSK－161と接する。西辺と北辺は直角近く、東辺は斜めになり平面形は隅丸の直角三角形状を呈する。各辺は外側に丸味をもち凹凸で直線的とはならない。壁面はなだらかな傾斜を示し、床面は多少の凹凸はあるがほぼ平坦で、踏み固めている状況ではない。北と南隅に10～15cmの柱があるがこの土壙に伴うか否か明確に出来なかった。覆土は暗褐色から黒灰色土で炭化物を多く含む。窪んでいる所は黒褐色粘質土となる。

出土土器（Fig.9－1～7）

1、2は口縁部外面に刻み目突帯を巡らす甕形土器である。1の突帯は低く、棒状工具による幅広の刻み目をもち、口縁に接するか、部分的に口縁下となる。内面は条痕をナデ消し、外面の突帯近く

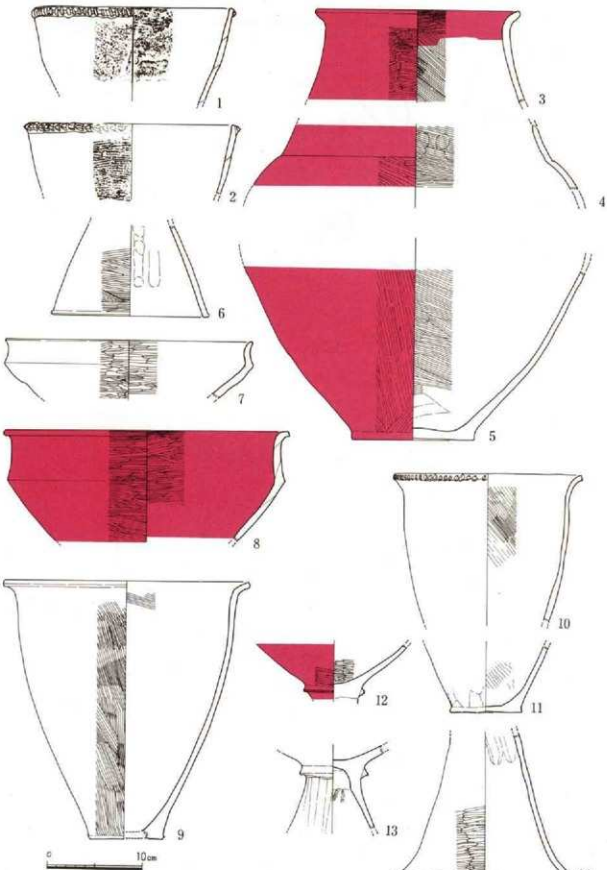


Fig. 9　SK−141・157出土土器実測図（1/4）

は横、それ以外は斜め方向に板状工具によるナデをおこなう。胎土には石英粒を多く含み、焼成は良好で淡橙色である。外面には煤が付着する。2も同様の甕形土器で断面三角形で左回りの器面調整具による刻み目を施す。外面は横ないし斜めの条痕、内面はナデ調整である。3～5は同一個体と思われるが接合しなかった壺形土器である。口縁部内側から外面全体に丹塗研磨を施す。底部は僅かな上げ底となり、肩部に緩やかな段をもつ。頸部は内傾して立上り肥厚気味の口縁部が外反する。口縁部外面はヨコナデ、頸部から胴部は横、斜め、胴部下半は縦の篦研磨、内面の頸部から下は刷毛目調整を行う。6は「ハ」の字に開く脚部で高坏形土器であろう。裾端は底面を平坦に撫でた結果肥厚気味となる。外面は篦研磨、内面は指ナデの上から板状工具による斜めのナデである。7、8は鉢形土器。7は体部上半で屈曲し、内傾して立上り口縁部が外反する。内外面とも篦研磨を施し胎土は精良で、内面は黒褐色、外面は茶褐色である。8は内外面とも丹塗研磨で、体部中央で屈曲し直線的に立上り口縁部は大きく外反する。夜臼単純期にあたろう。

ＳＫ－157（Fig.8）

Ｈ－６区の南西端に位置するやや角張る不正円形の小型の土壙である。直径1.6m弱、深さ30cmの浅い掘り込みである。南東部はピットに切られ、北東部ではピットを切る。床面はほぼ平らで、壁面は垂直に近い。覆土は上層が粘性を帯びた暗灰色土、下層に行くに従い粘性を増した黒褐色土となる。遺物は土壙の北側で床面近くからまとまって出土している。

出土土器（Fig.9－9～14）

9から11は甕形土器である。9は全体の1/3程の遺存であるが口縁部から底部まである復元完形品で口径26cm、器高27.3cmで底径8.1cmを測る。内湾気味に立ち上がる胴部から、頸部がすぼまり口縁部が大きく外反する。口縁下から底部にかけ刷毛目調整、口縁部は内外ともヨコナデで内面には僅かに刷毛目調整痕が残る。胎土には砂粒を少し含み、焼成も良く淡灰色ないし橙褐色である。10は小型の甕形土器で口縁部外端に棒状工具による刻み目をもつ。口縁部はヨコナデ、外面は丁寧なナデ、内面は斜め方向の刷毛目調整である。11は底部で外面には篦ナデが一部残り、端部は僅かに外側に張り出す。内面には刷毛目が残る。12から14は高坏形土器である。12、13は脚部から坏部にかけての破片でその境に突帯をもつ。12は突帯に刻み目をもち坏部の内外面とも篦研磨を施し外面のみ丹塗している。14は脚部で筒部から外反して裾が拡がる。外面は篦研磨、内面はナデ調整である。この土壙は出土遺物から板付Ⅰ式の時期である。

ＳＫ－159（Fig.10，ＰＬ.7）

Ｇ－６区にありＳＫ－141、161土壙と重複し、北側では掘立柱建物に切られる大型の土壙である。各辺は波状を呈し南西－北東に長軸をもつ不整楕円形の平面形を示す。床面も中央部が最も深く歪な形態をとる。壁面はなだらかで床面はほぼ平坦、断面は皿状を呈する。土壙の中で最も遺物が多く出土した土壙で土器類と混在して鳥、獣骨も見られ住居に隣接する廃棄用の土壙であろうか。土壙の埋没状況は単純な層序を示し、上層が黒灰色粘質土層、中層が黒灰色砂質土層、下層は有機物が水平に堆積する黒褐色粘質土層で、この中、下層に遺物は多く含まれる。

出土土器（Fig.11～13ＰＬ.23～25）

1～19は夜臼式の甕形土器である。ほとんどが口縁部直下に棒状工具あるいは篦による刻み目突帯をもち胴部から底部に至るものと胴部上半で屈曲するタイプの二種類がある。1は口縁部が僅かに内湾し、口縁直下に棒状工具の押捺により刻み目突帯を巡らす。突帯が貼付ていない部分には壁面に直接刻みを施す。また刻み目が深いところは突帯の下の壁面にも刻みが達する。整形は粗雑で内面には粘土紐の接合痕が残り口縁部近くを擦痕様のナデ、外面は斜めの条痕調整である。2も内湾気味の口

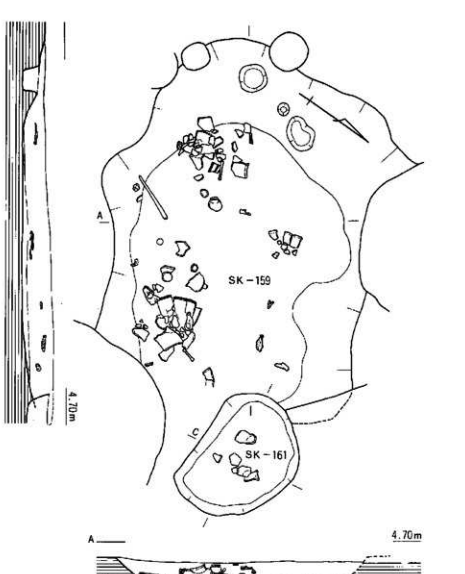


Fig.10　SK－159・161実測図（1/40）

縁で内外面とも条痕調整で内面の下半はナデ消し、口縁部の上端から内面にかけてヨコナデである。3は突帯の断面が蒲鉾型で器面調整具による刻み目を施す。外面は斜めの条痕、内面は板状工具のナデ調整である。4、5は口縁部から直線的に底部となる形態で刻み目は棒状工具による押捺、内面は条痕の後ナデ調整を行う。5の刻み目は間隔が粗で浅い。9も同様な形態であるが、突帯は低く口唇部上端と接し、刻み目は幅広く深いので器壁まで達している。11は突帯の下端と器壁との接合面をヨコナデしている。6は胴部上半で「く」の字に屈曲する甕形土器で刻み目は篦で刻む。胴部突帯からほぼ垂直に外反して立上り、口縁直下に同様な刻み目突帯を巡らす。底部は欠損する。外面は口縁部から屈曲部まで横、それ以下は斜めの条痕調整、内面の胴部下半には条痕が残り、屈曲部より上は板

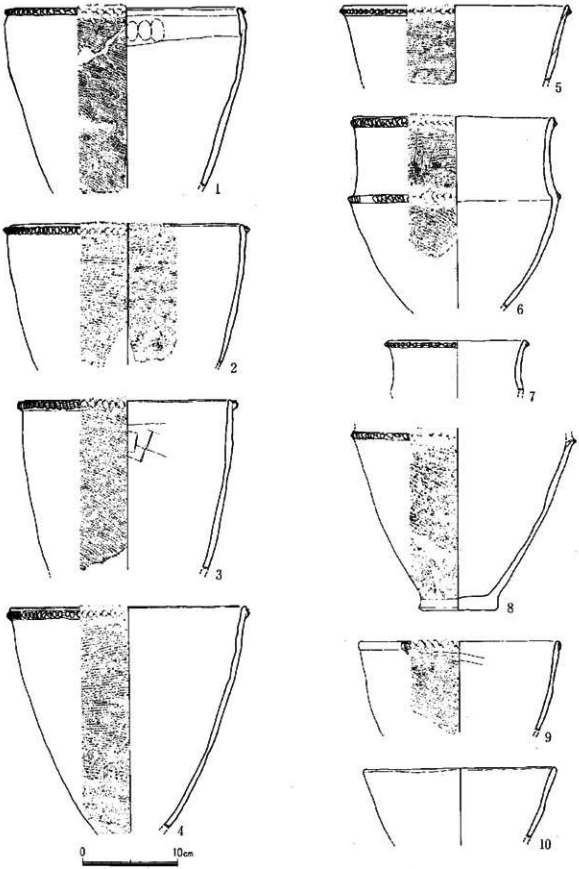


Fig.11　SK－159出土土器実測図(1)（1/4）

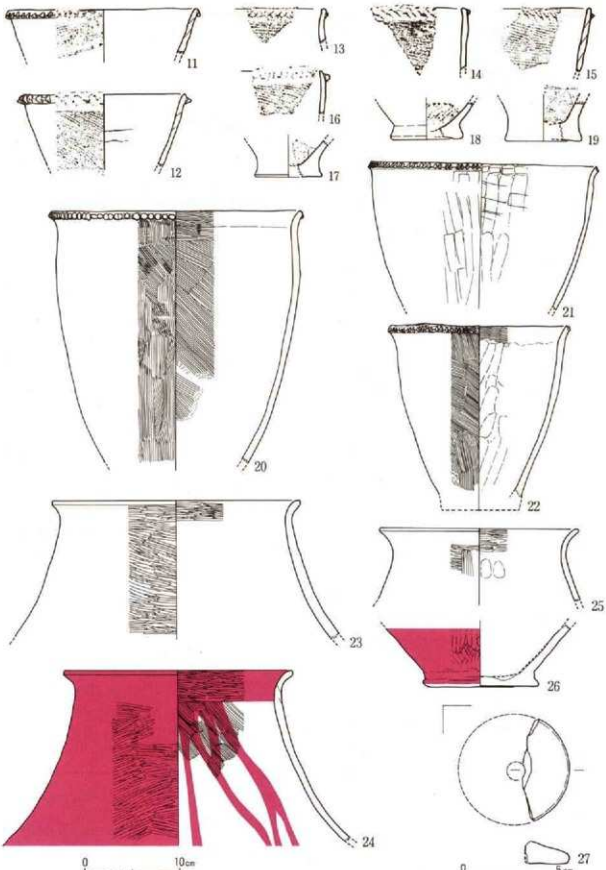


Fig.12　SK−159出土土器実測図(2)（1/4・1/2）

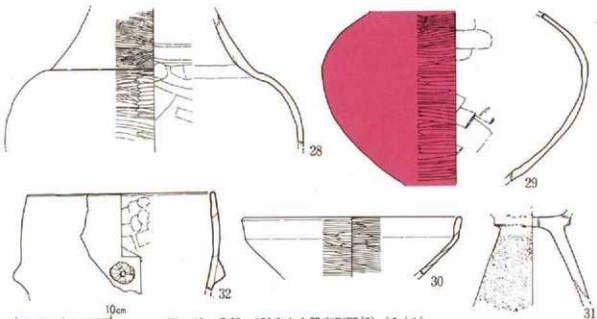


Fig.13　SK−159出土土器実測図(3)（1/4）

状工具によるナデ調整を行う。7、8、13も同様な形態をとるものである。10は突帯をもたない甕形土器で口縁部から直線的に底部になるものであろう。20〜22は口縁部が緩やかに外反する甕形土器で口唇部外端に棒状工具による刻み目をもつ。20は外反する内面には稜線が残り、外面の胴下半部は器面が剥離している部分もあるが全体に縦、斜め方向の刷毛目調整である。口径26.5cm、推定器高32.8cmを測る。口縁下3.5cmから下には全面に煤が付着する。21もほぼ同じ大きさで調整は板ナデ調整。内面には指押さえの跡が明瞭に残る。口縁部の刻みは棒状工具によるもので口唇部の上端まで達する。外面には口縁下まで煤が付着する。22は小型で器壁が厚い甕形土器で底部を除きほぼ遺存する。口径19.2cm、推定器高19cmを測る。口縁部内面には横の刷毛目調整、胴部には指押さえの跡が残る。口唇部には箆による浅い刻み目を施す。17から19は甕形土器の底部破片である。18は断面台形の底部で外面に条痕調整を施す。17、19は胴部から内湾して広がり厚い底部となる。外面は条痕調整。23〜26、28、29は壺形土器である。23、24は大型壺の口縁部から頸部の破片である。内傾してすぼまる頸部から外反する口縁部となる。口縁部内側から外面全体に箆研磨。24は頸部内面に下から掻き上げた刷毛目調整を施し箆研磨部に丹塗し内面は肩部まで垂れる。28、29は中型の胴部破片である。28は頸部に沈線状の段をもち全面丁寧な箆研磨。内面は胴部が擦痕調整、肩部に指の圧痕が残り、その上はナデ調整である。29の外面は丹塗研磨している。30は鉢形土器の体部から口縁部にかけての破片である。体部上半で緩やかに屈曲し内湾気味にほぼ真っすぐ立上り口縁部となる。内外面とも箆研磨。31は高坏形土器の脚部破片で坏部との境に刻み目突帯を貼付る。外面は条痕調整、内面はナデである。32は無文土器である。胴部から緩やかに内湾して口縁部となる破片で、胴部に小さな突起をもつ。整形は粗雑で内外面に指の圧痕が残る。特に口縁部には縦方向に連続し、上面は波打つ。内外面とも板状工具による擦痕調整でその上から軽くナデている。

SK−161（Fig.10）

SK−159と重複して、その東端に位置する小型の土壙である。東西に長い土壙で南側は直線的となり、北側へ角張る半円形を呈する不整楕円形である。覆土は灰褐色から暗褐色土の粘性を帯びた土である。床面は平坦で整面はなだらかな状態を示す。遺物は床より少し浮いた状態で出土している。

出土遺物（Fig.15−1〜3）

1は甕形土器の復元完形品で如意状口縁を呈する。刷毛目工具による刻みを施し上端をナデる。外

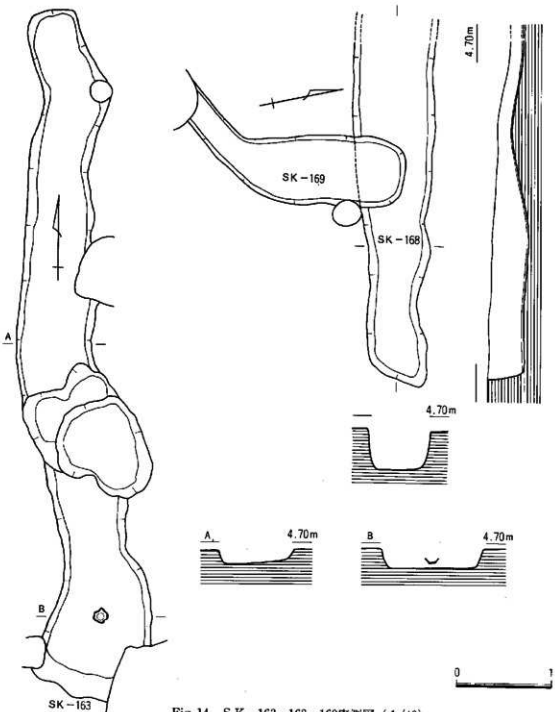


Fig.14　SK－163・168・169実測図（1/40）

面は条痕様の荒い刷毛目調整を底部から口縁部に斜めに施し、その後胴部上半には横方向の刷毛目調整、口縁部はヨコナデ調整、口縁部内面も刷毛目調整の後ナデ消す。口径22.4cm、器高25.3cmを測る。2は壺形土器の底部で外面には底部近くまでに丹塗研磨、内面は刷毛目調整の後ナデている。3は高坏形土器の体部から口縁にかけての破片で、内外面とも筮研磨を施している。口縁部は黒変している。板付Ⅱ式の古い時期の土壙である。

SK－163（Fig.14）

G－5区の東端に位置する南北に細長い溝状土壙である。南側が幅広く幅を狭めながら北へ延び大

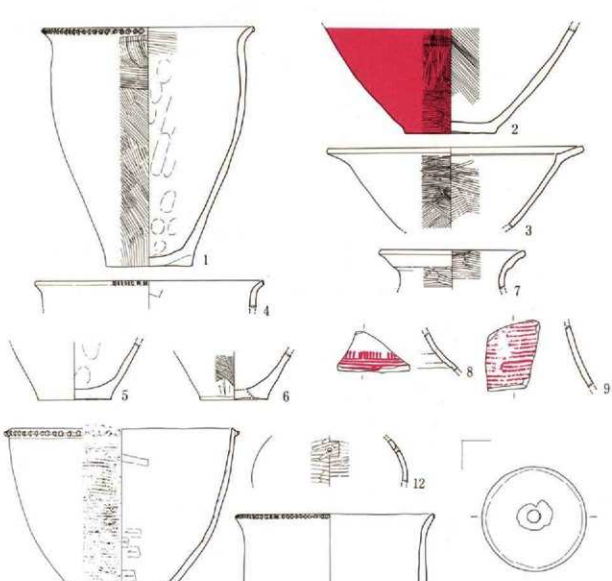


Fig.15　SK－161・163・168・169出土遺物実測図（1/4・1/2）

きく屈曲して終結する。幾つかの土壙の切り合いかとも考えられるが覆土が暗褐色ないし灰褐色土で同一であるのと床面がほぼ平坦であることなどから一つの遺構とした。最大幅0.8m、長さ7.3m、深さ20cmから25cmを測る遺構で溝状遺構とした方が適当であるかもしれない。壁面は垂直に近く床面は平坦である。

出土遺物（Fig.15－4～10）

4は甕形土器の口縁部小破片である。如意状口縁で端部に小さな刻み目をもち、ヨコナデ調整を行う。5、6は同底部破片。6には外面に刷毛目調整が残り、その下を篦調整している。7は壺形土器の口縁部。口縁部を肥厚させ、頸部との境に明瞭な段をもち、その上に一部横方向の刷毛目調整が残りそ

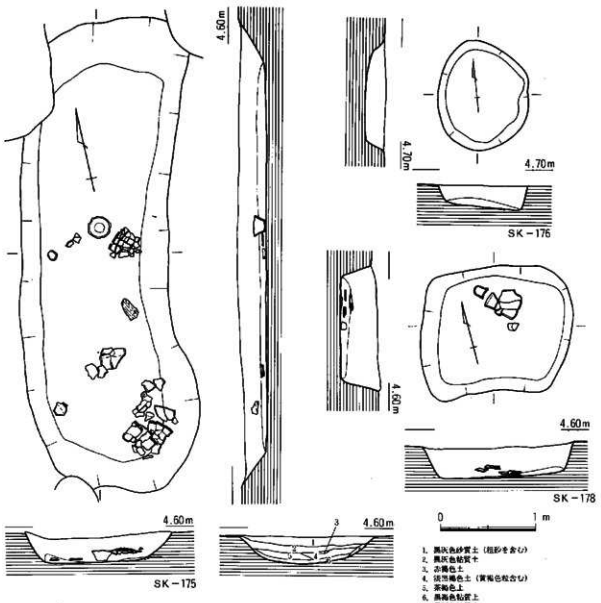


Fig.16　SK－175・176・178実測図（1/40）

の上を研磨する。8、9は壺形土器の肩部から頸部に赤色顔料で彩文をもつ。8は肩部に緩やかな稜をもちその上に二条の横線を入れ、長さ1cmの縦線約8本単位で横様を描く。9は3本の平行線の上にU字状文様を横にし、その中に横線を入れたのを一つの単位として彩文する。胎土には微砂を含むが精良で焼成堅緻、淡褐色を呈する。10は土製の紡錘車で径5.4cm、中央部での厚さ1.1cmを計り、焼成前に穿孔する。板付Ⅰ式からⅡ式にあたろう。

SK－168（Fig.14）

G－7区の北端に位置しSK－169と重複し、西側はSD－001に切られる。覆土は暗褐色土で粘性が強い。南東から北西方向に直線的に延び、徐々に幅を広げ北側での最大幅は0.85m、長さ3.5m以上、深さ0.25から0.4mを測り、全体に細長く溝状を呈する。遺物は少なく図示出来たのは2点のみで板付Ⅰ式期の土壙であろう。

出土土器（Fig.15－11、12）

11は復元完形品で口径24.8cm、器高20.5cm、底径7.6cmを計る刻み目突帯の甕形土器である。突帯を

貼付た後ヨコナデし、刻み目は棒状工具で施す。外面は横方向の条痕調整、底部は篦で仕上げ底の部分にも条痕調整を行う。内面は丁寧にナデ調整であるが粘土接合部に指跡が残る。12は壺形土器の胴部破片で焼成後の穿孔を行う。

ＳＫ－169 (Fig.14)

ＳＫ－168の南西部に重複して位置する溝状の浅い土壙である。中央部で屈曲し「く」の字状を呈する。北側がもっとも幅広く75cmを測り、南端では30cmとなり後世のピットに切られ現存長は約1.8mである。覆土は暗褐色粘質土でＳＫ－168と同様の土壙であり、その切り合いは明らかではなかったが出土土器からも大きな時期差は無いものといえよう。

出土土器 (Fig.15－13)

実測出来たのは図示した甕形土器１点のみである。口唇部に篦による刻み目をもち、頸部が緩やかに湾曲する。外面は丁寧にナデられ一部に刷毛目が残る。内面の口縁部もナデにより仕上げられるが指跡が残り胴部に板状擦痕が認められる。

ＳＫ－175 (Fig.16,ＰＬ.8)

Ｉ区の北東部、Ｈ－９、10区に位置し、ＳＤ－174の西に平行する狭長な土壙である。北側でＳＫ－176、177に切られる。長軸を南北にとり、中央部での幅1.55m、長さ4.96m、深さ0.3m弱を測る。いくぶん弧を描き東辺は内側へ、西側は外へ湾曲し、南北端は丸味をもつ。断面は皿状で壁面は緩やかな傾斜である。土層は１層－黒灰色砂質土で粗砂を少し含む。２層－黒灰色粘質土。３層－赤～茶褐色土。４層－淡黒褐色土で黄褐色粒を含む。この層と５層から多くの土器が出土した。５層－茶褐色土。６層－黒褐色粘質土。床面全体を覆い、軟質である。７層－壁面の一部に見られ、黒灰色粘質を帯びる。土器は中央より南側で完形に近いものが押し潰された状態で出土している。

出土土器 (Fig.17－1～12,ＰＬ.25)

１から３は胴部上半で屈曲し、外反して口縁部となる甕形土器である。１は口縁部の内傾が大きい大型の甕で口径28.4cm、器高35cm、底径10.6cmを計る。胴部の屈曲部と口縁直下に断面三角形の細い粘土紐を貼り付け、その下を指でナデている。刻み目は幅広の押圧文を全面に施す。外面は横方向の条痕調整、底部はナデで外底部は条痕の後篦ナデしている。内面は丁寧なナデで底部近くに擦痕が残る。胎土には石英粒を多く含み焼成は良好で暗黄褐色をなす。２は底部の一部を欠損するがほぼ完形品で口径21cm、器高23.3cm、底径10.2cmを計る。口縁部は胴部から外反して立上り胴部の大きさと同一径をとる。胴部の屈曲部には突帯を貼付するが口縁部には直接施文している。外面は横、斜めの条痕調整で、その後粗い板目調整を行うが、口縁部と突帯の間の半分は条痕を消している。３は胴部と口縁下に刻み目突帯を貼り付け、口縁部は外反して直立する。４から６は口縁部及び直下に突帯を貼付る甕形土器の一群である。４は底部を欠損する。口径21cm、推定器高22.8cmを計る。口縁端部は角張り、その直下に器面調整器具による刻み目を施す。口縁部から少し丸味をもち直線的に底部に至る。外面は底部近くは斜め、他は横方向の条痕調整、内面は条痕を粗くナデ消す。６もほぼ同様の器形で口縁部、胴部の一部を欠損するが完形品で口径15cm、器高14.2cm、底径7.6cmを計る。突帯は小さく断面三角形で棒状工具により刻み目をもつ。口縁部から直線的に底部に至り、底部は外へ拡がる。外底部は上げ底状で条痕調整。５は口縁上端に突帯を貼り付けた後篦による刻みを施す。突帯の下は僅かにヨコナデする。外面は条痕、内面はナデである。７は甕形土器の胴部から底部の破片で調整は条痕、ナデである。８、９は壺形土器の口縁部と底部である。８は内傾する頸部から強く外反する口縁部となる。頸部と胴部の境には沈線を巡らし、内面には粘土の接合痕が明瞭に残る。内外面とも横方向の篦研磨である。10は鉢形土器の口縁部。体部上半で屈曲し、外反して口縁部となる。内外面とも粗い

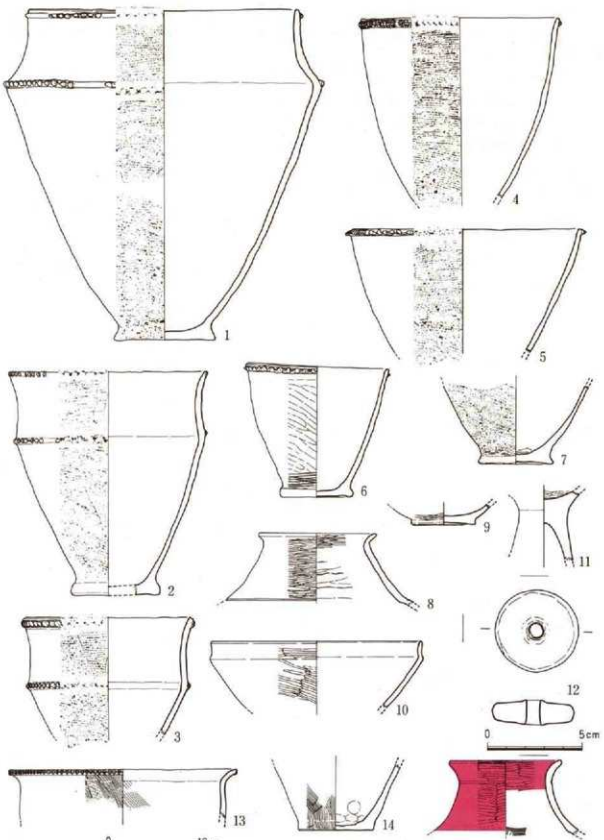


Fig.17　SK−175・176出土土器及び紡錘車実測図（1/4・1/2）

篦磨きである。11は高坏の脚部～坏部の破片で坏底部は篦研磨であるが他は器面が摩耗して不明。12は紡錘車である。径4.3cm、厚さ1.3cmで中央に0.7cmの焼成前の孔をもつ。刻み目突帯の土器しか出土していないので板付Ⅰ式直前の土壙であろうか。

ＳＫ－176（Fig.16）

ＳＫ－175の北東隅に位置する小型の土壙で不整な楕円形を呈する。ほぼ南北に主軸をとり長径1.28m、短径0.95m、深さ0.2mを測る。覆土は暗褐色から灰褐色土層である。壁面は緩やかに立ち上がり、床面は平坦である。ＳＫ－175に後続する板付Ⅰ式期の土壙であろう。

出土土器（Fig.17－13～15）

13、14は甕形土器の口縁部と底部である。13は口縁部を如意状に屈曲させ、口唇部に刻み目をもつ。口唇部のナデにより下端は肥厚し、突帯のような感じを受ける。刻みは器面調整具を用いるためか中央部が沈線状となる。外面は細かい刷毛目調整、内面はナデ調整である。14は底部で内底面に指跡が残る。15は壺の口縁部で肥厚させる代わりに沈線を巡らす。内外面とも丹塗研磨である。

ＳＫ－177（Fig.18，ＰＬ.9）

ＳＫ－175の北西隅に位置する小型の土壙で歪な長方形を呈する。ほぼ南北に主軸をとり長径2.0m、短径1.01m、深さ0.25mを測る。覆土はＳＫ－175、176とほぼ同様で１層－黒褐色砂質土で粗砂を多く含んでいる。２層－黒褐色粘質土。３層－黒褐色粘質土で炭化物を多く含む。遺物は大部分この層から出土している。４層－３層とほぼ同じであるが淡い青灰色粘質土を含んでいる。東、西、北の各辺は外側にいくぶん膨らみをもち直線的に近くなるが南側は丸くなる。床面は中央部が深くなるがほぼ平坦、壁面は直に立ち上がる。ＳＫ－176に後続する板付Ⅰ～Ⅱ式期の土壙である。

出土土器（Fig.19－1～12，ＰＬ.25）

１から６は甕形土器である。口縁部は如意状に屈曲し口唇部に篦による刻み目をもつ。胴部は少し膨らみ直線的に底部に至る。底部は平底で１は口径15.2cm、残存高15.2cmを測り胴部下半から底部を

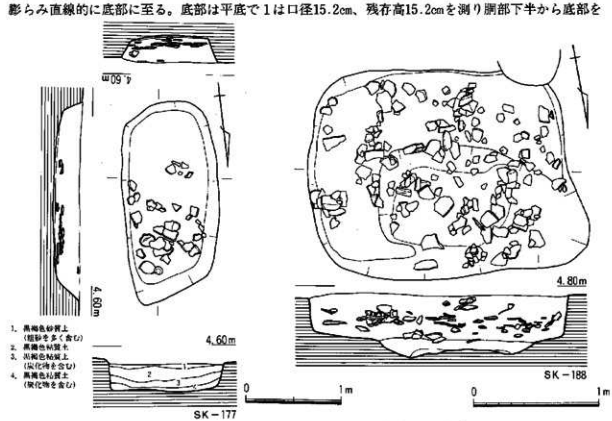


Fig.18　ＳＫ－177・188実測図（1/40・1/30）

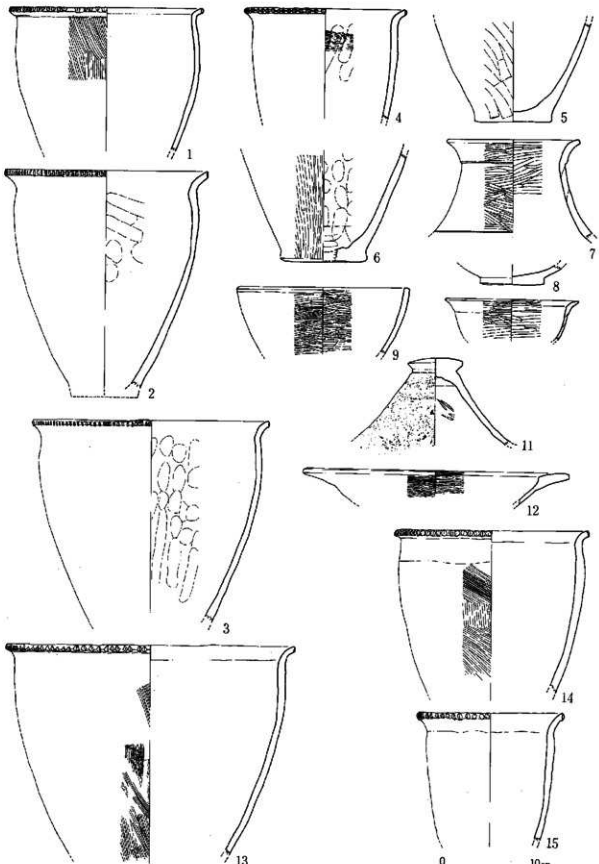


Fig.19　SK－177・178出土土器実測図（1/4）

欠損する。刻み目は口唇部全面に及び胴部外面には細かい刷毛目調整をおこなう。胴部下半は器面が剝離し調整は不明であるが刷毛目調整であろう。内面はナデ調整で胴部上半から頸部にかけ縦方向に口縁部を折り曲げたときの指跡が残る。胎土には石英粒を多く含み焼成は良くなく灰褐色を呈し外面は煤に覆われる。4の胴部外面は刷毛目の上から篦ナデを行い刷毛目をほとんど消している。2は胴部に刷毛目調整が残らず丁寧な篦ナデ、ナデ調整を行う。口唇部の刻みは1と同じく全面に施文し、ヨコナデをおこなう。内面には下から掻き上げた指跡や粘土接合時の圧痕も認められる。3の口唇部の刻みは下端を中心に施文し、上端まで達しない。口縁部は屈曲部の下まで板ナデ、ヨコナデしている。内面には粘土接合時の指ナデの痕跡が残る。7は壺形土器の口縁部から頸部の破片である。口唇部を肥厚させ頸部との境に明瞭な段をもつ。外面は丁寧な篦研磨、内面は口縁部は篦研磨、それ以下は擦痕状ナデである。8は小型の壺で円盤状底部。器面調整は摩耗し不明。9は鉢形土器で口縁部が僅かに肥厚する。内外面とも粗い篦研磨で条痕？の痕跡が残る。10は小型の鉢形土器で、口縁部外面を壺のように肥厚させ段を設ける。器壁は薄く、丁寧な篦研磨調整をしている。11は壺形土器で裾部を欠損する。摘みの上面は丸味をもち体部との接合面には指跡を明瞭に残し粗い調整である。体部は内外面とも条痕調整で、摘み部との間は縦方向のナデである。12は高坏形土器の口縁部破片、全体に篦研磨を施す。

ＳＫ－178 (Fig.16)

Ｇ－10区に位置しＳＫ－175の西4mに位置する隅丸方形の土壙である。この土壙とＳＫ－188あるいはＳＫ－177も貯蔵穴と考えられるがこの項で述べる。南辺を除き各辺は外側に僅かに膨らみ、南側は内側へ張り出す。東西に少し長くなり1.62m、南北は1.32m、深さ0.32mを計り、床面はほぼ平坦である。覆土はＳＫ－177と同様な暗～黒褐色粘質土である。土器は床面近くから出土している。

出土土器 (Fig.19－13～15，ＰＬ.26)

壺形土器3点が出土している。口縁部は如意状に屈曲し口唇部に篦による刻み目をもつ。胴部は少し膨らみ直線的に底部に至る。13は大型品で口径30.2cm、残存高22.1cmを測る。刻み目は口唇部下端を中心に施文する。口縁部はヨコナデ、胴部は縦、斜めの刷毛目調整、内面はナデ、口縁部近くは指ナデをおこなう。外面は口縁近くまで煤に覆われる。14、15は中、小型品で調整は同じ。

ＳＫ－188 (Fig.18，ＰＬ.9)

Ｇ－10区に位置し、大型掘立柱建物ＳＢ－222の南西4mに位置する東西に少し長い隅丸方形の土壙である。北西隅が少し膨らむが全体に壇正な平面形である。ＳＫ－178と同様貯蔵穴であろう。東西に少し長くなり2.06m、南北は1.65m、深さ0.35mを測り、床面はほぼ平坦であるが北西部は更に一段深く掘り込まれ、最も深いところは0.5mを測る。覆土は暗褐色から黒褐色土層で粘性を帯びる。遺物は上層から下層にかけ、遺構全体に拡がり多く出土している。

出土土器 (Fig.20～22，ＰＬ.26,27)

1～24は甕形土器である。口縁部は緩やかに屈曲するものと屈曲が大きいもの二種がある。刻み目は口唇部全面に及ぶもの、下端の角張るところに刻むもの、あるいは上、下端部に刻むものがある。調整は外面から口縁部内側に刷毛目調整を行い、その後ナデ調整をした結果、刷毛目が完全に見られないのもある。口縁部はヨコナデし内面の屈曲部に指跡が残るものが多い。14は口縁から底部まで遺存する。口径27.9cm、器高26.6cmを測る。口縁部の屈曲はゆるく、外反する。口唇部の下端には器面調整具による刻み目をもつ。胴部はほとんど膨らまず直線的に底部に至る。外面は口縁部はヨコナデ、胴部から底部はナデ、内面は口縁部が刷毛目の後ナデ、その下の胴部には指跡が残る。胎土には砂粒を多く含み、焼成良好で煤が全面に付き黒褐色を呈する。1から4も中型品の甕形土器で同様な器形

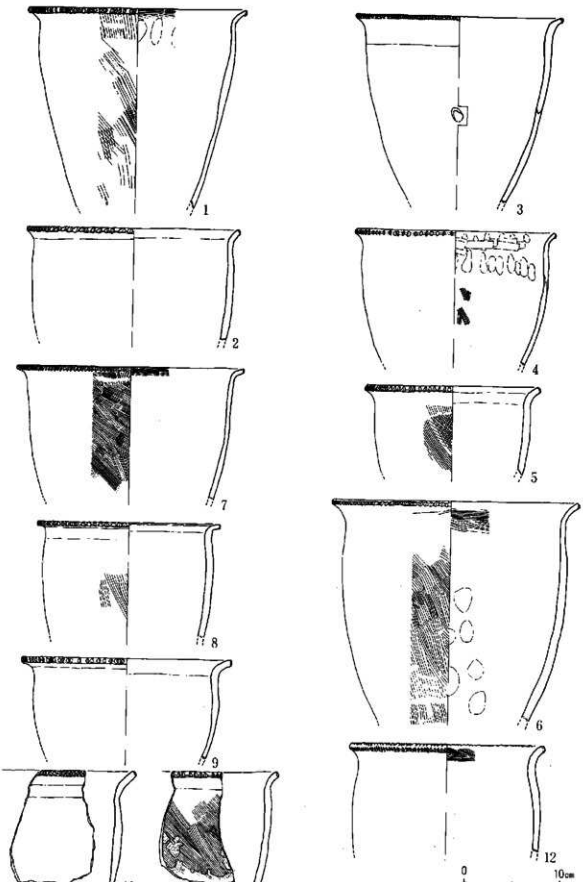


Fig.20　SK−188出土土器実測図(1)（1/4）

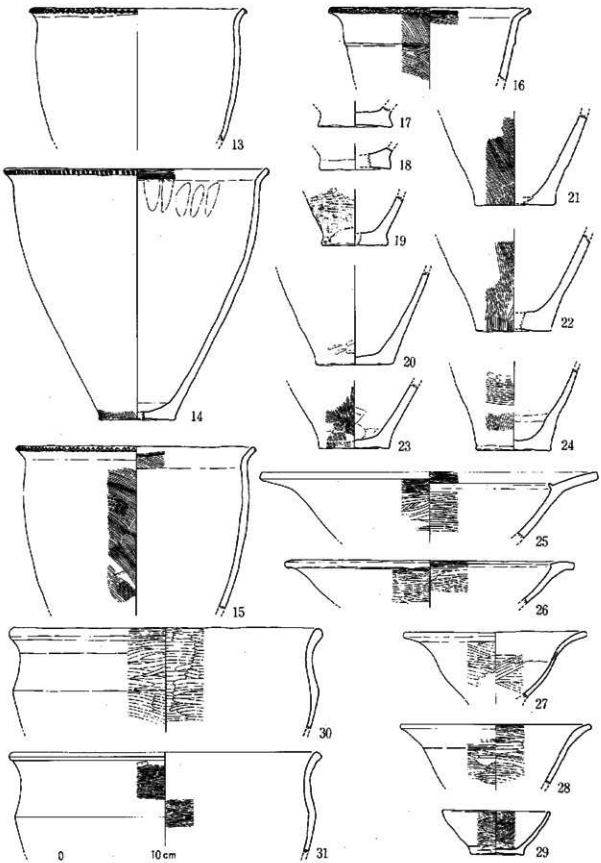


Fig.21　SK−188出土土器実測図(2)（1/4）

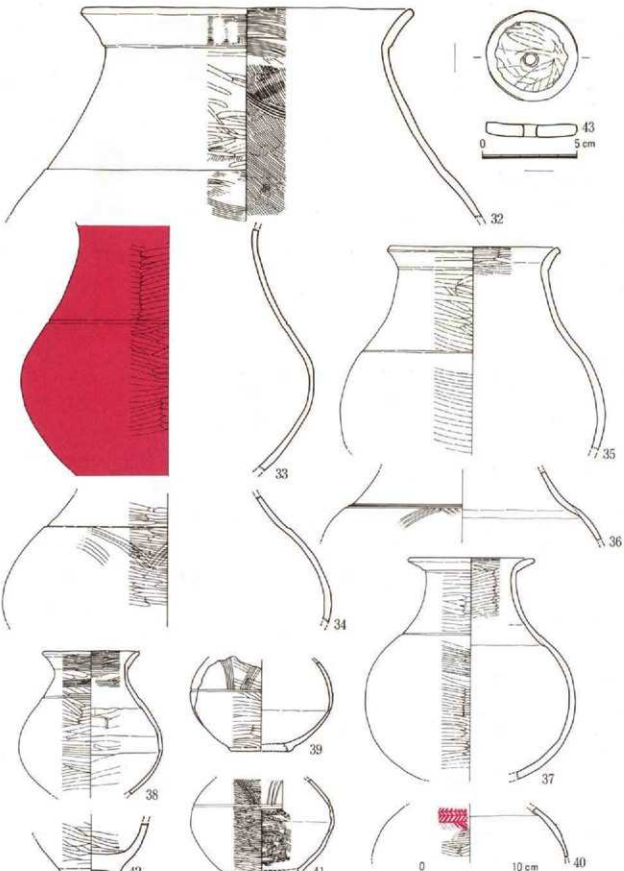


Fig. 22　SK－188出土土器実測図(3)（1/4・1/2）

である。外面の口縁下は粗い縦方向の刷毛目調整し、口縁のみヨコナデ、胴部は斜めの刷毛目をナデ消している。7から9は口縁部の折り返しが強くなる。7の調整は1と同じであるが細かい刷毛目調整である。内面は丁寧なナデ調整で指跡は残らない。12の口縁部の刻み目は口唇部の上、下端部に各々刻まれ二列の文様となる。屈曲部の下までヨコナデし、その下は丁寧なナデ調整である。16は胴部上半に段をもつ壺形土器。段の下を帯状に板状工具によるナデ、その他は粗い刷毛目調整である。25から28は高坏形土器である。25は大型品で口径35.4cmを測る。坏部は直線的に開き外反する口縁部となり内面のその境には突帯状に張り出しをもつ。内外面とも丁寧な篦研磨で外面に赤色顔料を塗布しているようであるが定かではない。26は平坦な口縁部をもち上面を丸くしている。27、28は内湾する坏部から強く外反する口縁部となる。内外面は篦研磨。29は小型の鉢で平底。口縁部は僅かに波状を呈し粗雑な造りである。内外面とも篦研磨である。胎土には砂粒を少量含むが良好で焼成堅緻、明橙色を呈する。30、31は胴部上半で屈曲し外反しながら真直に立上り口縁部となる深鉢形土器である。30の口唇部は肥厚気味となり丸く、31は角張る。32～42は壺形土器である。32は大型品の口縁部から肩部の破片で口縁部は肥厚し頸部との境に段を有し頸部と肩部の境には不明瞭な段をもつ。内外面とも刷毛目調整をおこない、その後胴部外面から口縁部の内側まで篦による研磨をするが研磨が粗く刷毛目が残る。33～37は中型の壺。33、34は頸部と肩部との境に不明瞭な段をもつ。外面は篦研磨、内面はナデ調整で、34の肩部には篦による重弧文を描く。線は細く浅い擦り込みで四重に二段に巡る。36は肩部に三重の沈線を巡らし、その下に重弧文を描く。35は口縁部から胴部まで残る。口縁部は少し肥厚し、段も低い。肩部との境の段も痕跡的となる。外面から口縁部の内側にかけて篦研磨し、一部に赤色顔料が見られ、全面に塗布していたものであろう。37は口縁部が肥厚し頸部との境に段をもち、肩部との境には沈線をめぐらす。外面から内面の胴部上半にかけて篦研磨、口縁部のの一部に赤色顔料が見られ、全面に塗布していたものであろう。38～42は小型の壺形土器である。38は肥厚する口縁部下に段をもち、肩部に沈線を巡らす。外面から口縁部内側にかけ篦研磨。39、41は胴部上半に沈線を巡らしその上に重弧文を篦描きしている。40は有軸羽状文を刻む。43は扁平な紡錘車である。径4.8cm、厚さ0.7cm、孔径0.7cmを測る。全体に丁寧な造りで篦ナデをし、表面は縁を環状に残し中心部のみ篦研磨する。胎土には砂粒を含まず精良で焼成も良く灰黒色から淡灰褐色である。板付Ⅱ式期の貯蔵穴である。

ＳＫ－205（Fig.23）

Ｇ－５区の北東端、ＳＫ－141の南東２mにあたる。歪な台形様の平面形で長軸1.6m、短軸1.1m、深さ約0.2mを測り、床面は北側が浅くなる。壁面は緩やかな傾斜を示し、中央部に径15～20cmの小さなピットが掘り込まれる。東側には丸木を二本並べ礎板とした柱穴が重複する。

出土遺物（Fig.24－1～3）

１は壺形土器の口縁部破片である。丹塗研磨土器で口縁部は僅かに肥厚する。２は高坏の脚部であろう。外面は条痕が残り、その上を縦方向に篦ナデ、内面は条痕調整の後ナデ調整を加える。３は甕形土器の底部破片。内面に条痕が残る。

ＳＫ－209（Fig.23，ＰＬ.10）

Ｉ区の南東端、Ｈ－１区に位置し大部分は調査区外へ拡がる大きな溜り状の土壙である。南北はほぼ調査区で収まり東側へ大きく拡がる。北側は直線的、西側は中央部で膨らみをもち緩やかな曲線を描く。南側は丸味をもつ。隅丸長方形の平面形をなし長さ5.6m、現存幅約２m、最も深い部分は0.7mを測る。壁面はなだらかな傾斜をなし、調査区の際が最も深い。覆土は上層が灰褐色から暗褐色粘質土で粗砂を部分的に含む。中層は植物遺体を多く含み土器もこの層から下層で出土している。下層

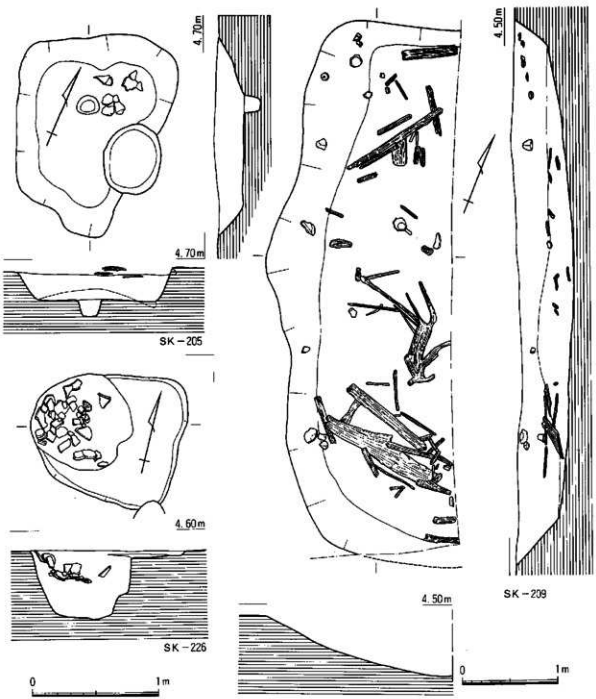


Fig.23　SK－205・209・226実測図（1/40・1/30）

は灰色の細砂層で覆われる。この地点では基盤層の下層が砂層であり壁面からの崩落したものであろう。出土した木製品は1点のみで、他は割材を含むが大部分は未加工の自然遺物である。

出土遺物（Fig.24－4～19）

4から9は褄形土器である。4は口縁直下に刻み目突帯をもつ破片である。突帯は低く幅広で爪で大きな刻み目を刻む。5、6は底部で5の内外面に条痕調整が残り、6の外底面には木の葉文を箆描きする。粘土の接合部で剝離し接合状態が判る。8は口縁部が強く外反し胴部に小さな突帯を巡らす。刻み目は小さく間隔を空けている。胎土には砂粒を含み、焼成堅緻、灰褐色ないし黒褐色をなす。9は口縁部を緩やかに外反させ、口唇部に小さな刻み目を施す。外面は細かい刷毛目、内面はナデ調整

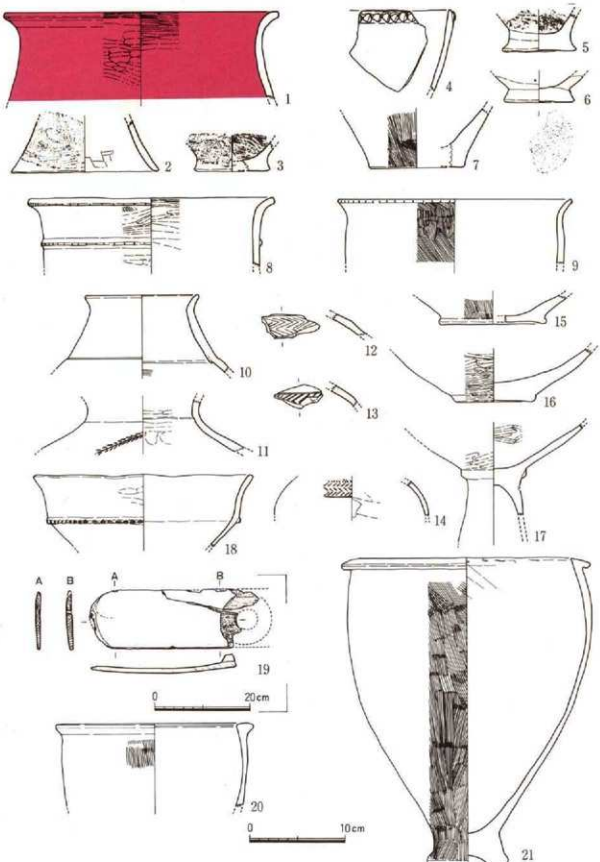


Fig.24　SK－205・209・226出土遺物実測図（1/4・1/8）

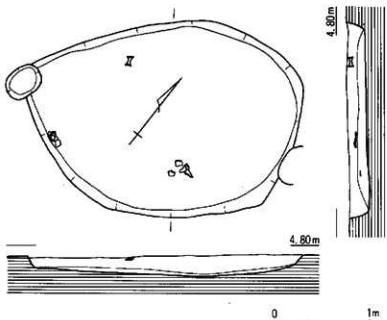


Fig.25　SK－103実測図（1/40）

をおこなう。10から16は壺形土器である。10は内傾する頸部から短く口縁部が外反し肩部と頸部の境に沈線を巡らす。内面には接合の段が残る。11の肩部には斜めに有軸羽状文、12から14にも篦描き文を描く。17は高坏形土器で坏と脚部の境に突帯を巡らす。18は深鉢形土器で、胴部中央で屈曲しその部位に刻み目突帯を設け、外反して口縁部が開く。刻み目は刷毛目状工具を用いている。胎土には砂粒を含まず焼成堅緻である。器表面が摩耗しているため詳細は不明であるが、口縁部の内外面に黒色顔料を塗布しているようである。19は木製品で諸手鍬である。柄孔隆起部から折損し半分の遺存である。幅12.4cm、現存長36cm、厚さ1.2cmを測る。刃部は丸くなり、身は内傾へ緩やかに反る。くぬぎ材である。板付II式の時期の溜りであろう。

ＳＫ－226（Fig.23）

Ｇ－12区、大型掘立柱建物の内側から検出した中期初頭の土壙である。。二段に掘り込まれ、東側は浅く平坦面をもち、中央から西壁にかけ円形に深く掘り込まれる。深い掘り込みは径0.8m前後、深さ0.55mを測り床面は中央部が丸くなる。壁面は急傾に立ち上がる。土器は土壙の中ほどでまとまって出土した。中期初頭に位置付けられる。

出土遺物（Fig.24－20、21）

甕形土器２点が出土した。21は復元完形品で口径26.2cm、器高33cmを測る。上げ底の分厚い底部から開きながら膨らみをもつ胴部となり口縁部はすぼまり外面に突帯を貼り付け上面を外形させ平坦にする。外面の胴部との貼付る部分を窪ませ三角突帯とはならない。外面は口縁部はヨコナデ、その下から底部まで刷毛目、内面はナデ調整である。胎土には砂粒を多く含み、焼成良好で淡灰褐色である。20は小型品で口縁部が断面三角形を呈する。上面は丸くナデられ胴部外面には刷毛目調整している。

ＳＫ－103（Fig.25）

Ｇ－３区、ＳＤ－104と東側で重複する不整楕円形の土壙である。小さなピットに切られるがほぼ全体が遺存しその規模は長軸2.8m、短軸2.1m、深さ0.22mの断面皿状の浅い掘り込みである。遺物は土器だけでほぼ床面から出土している。覆土は茶褐色～暗褐色土であまり粘質を帯びない。

出土遺物（Fig.26）

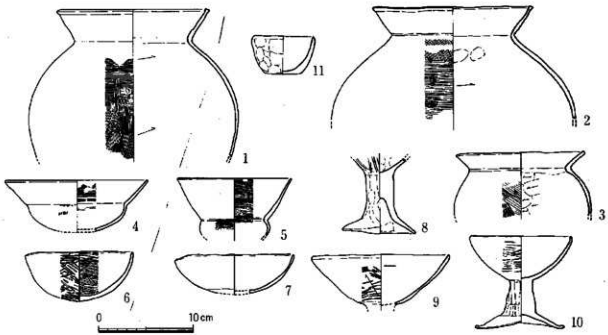


Fig.26　SK－103出土土器実測図（1/4）

1、2は球形の胴部に内湾気味に立上り口唇部を肥厚させる布留系の甕形土器である。口縁部は内外面ともヨコナデし胴部上半まで及び、胴部中位から下は縦、斜めの刷毛目、胴部上半は横の刷毛目調整である。胴部内面は篦削りにより器壁を薄く仕上げている。外面には煤が付着する。2は少し大型であるが器形、技法の特徴は同様である。口縁部近くの胴部にはヨコナデが不充分で縦の刷毛目調整が残り、内面には頸部の接合時の指跡が明瞭に遺存する。3は小型の甕形土器で外面は口縁部近くまで粗い刷毛目調整である。4、5は小型丸底壺である。5は体部が小さく口縁部が長く大きく開く。外面は口縁部の屈曲部に刷毛目が残るが他は篦ナデ状の研磨、内面は刷毛目の上から粗い篦ナデ調整である。8、10は手捏土器で脚付きの椀形土器であろう。10は全体に歪で指跡が残り脚裾は波状となり椀部との境は縦に篦調整をし、8は坏部は粗い刷毛目調整である。6、7は椀、11は小型の手捏土器で篦削りにより平底にする。手捏土器が多いことから古墳時代前期前半の祭祀用土壙の可能性がある。

5）竪穴住居跡

今回の調査では弥生時代の住居跡１棟、古墳時代の住居跡８棟の計９棟を検出した。表土掘削時に７層で土師器が部分的に集中する個所が認められたが遺構の覆土と似通った土壌であり遺構検出が困難で、その下の８層まで掘り下げて調査を実施した結果、住居跡の遺存は極めて悪く床面近くで平面形を把握したので土器類の出土は少ない。

ＳＣ－193 (Fig.27, ＰＬ.13)

Ｇ－９区、現代の大溝ＳＤ－001の北側に位置する隅丸長方形の竪穴住居跡である。主軸をほぼ東西にとり北東部で弥生時代前期の土壙ＳＫ－172と重複する。規模は南辺5.4m、西辺3.5m、深さ0.1mを測る。各辺とも緩やかに蛇行し、北辺が長く台形に近くなる。床面は平坦で、住居跡検出時より４本の柱が検出され、主軸がずれているのでこの住居跡に伴うかどうか明らかではないが他に主柱穴と考えられるピットが無いのでその可能性が強い。もしこの住居跡とは別のものとすれば１間×１間の掘立柱建物であろう。柱は径５cmで下端を切断するだけで他に加工は施していない。柱間距離は南辺が1.05m、北辺が2.2m、東、西辺が2.3mである。出土土器の中には土師器の小破片が２点あるがその他は図示した時期の遺物であり弥生時代中期前半の住居跡であろう。

出土土器 (Fig.28)

出土したのは小破片だけで、図示したのは甕形土器の口縁部と底部１点である。１は逆Ｌ字状口縁で口唇部に刻み目を巡らし、口縁部の下に小さな三角突帯を貼付る。胴部外面は粗い縦刷毛目調整の後、突帯を貼り付けその上、下をヨコナデ調整する。２は断面三角形の口縁部で上面は外傾しヨコナデ、胴部外面は口縁部の下まで縦の刷毛目調整、内面はナデ調整である。３、４は逆Ｌ字状口縁で上面の平坦面の中央部を窪ませ内側へ僅かに張り出す。４は口縁部を内傾させ胴部が少し膨らむ。外面は刷毛目調整。５は底部で上げ底である。端部まで縦方向の丁寧な刷毛目調整を施す。

ＳＣ－102 (Fig.30, ＰＬ.12)

Ｈ－２区に位置する４棟重複する住居跡の一つである。北東隅を現代の溝ＳＤ－105に切られるがほぼ全体の形態、規模は知ることが出来る。多少歪ではあるが隅丸方形で南辺4.5m、西辺4.4m、深さ0.1mを測る。床面は平坦で主柱穴はＰ－１～４が考えられ４本柱であろう。ピットの深さは50cm前後と比較的深い。

出土遺物 (Fig.29－1～9)

１から３は甕形土器の口縁部から胴部にかけての破片である。卵形の長胴に直線的に開く短い口縁部がつく。口縁部外面は少し膨らみをもち、端部は丸味をもたせる。胴部内面は丁寧な横の篦ケズリであるが器壁は厚い。胴部下半は縦、上半は横から斜めの刷毛目調整、口縁部はヨコナデ調整である。胎土には砂粒を多く含み焼成はよくなく軟質、外面には煤が付着して

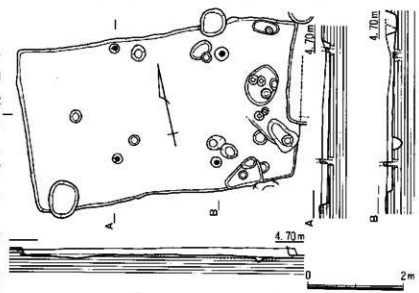


Fig.27　ＳＣ－193実測図（1/80）

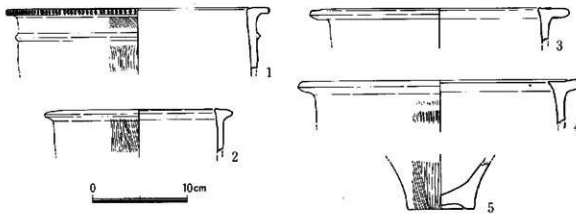


Fig.28　ＳＣ－193出土土器実測図（1/4）

いる。2は口縁の立上りが強く、口縁上面をナデて内側へ膨らませている。口縁部の内面はナデ調整をしているが刷毛目調整跡が微かに残る。3は胴部から頸部にかけての破片。器壁は内面の篦ケズリにより薄く造られ、外面には横方向の刷毛目調整の上から篦による波状文を巡らす。この土器だけが胎土に砂粒を含まず精良で焼成堅緻で灰褐色を呈する。4、5は小型の甕形土器である。4は頸部が締まり直立気味に口縁部が立ち上がる。5の外面には吹きこぼれの跡が筋状に付着する。6は小型の壺形土器である。粗い造りで底部は刷毛目調整、胴部は粗雑なナデ、頸部近くはヨコナデで刷毛目を消す。内底は篦ケズリ状に指で掻き上げ上半はヨコナデしている。7は小型の手捏土器で指跡が残る。9は手捏の椀形土器である。器壁は薄く内底から口縁にかけ整形の指跡が明瞭に残る。

ＳＣ－106（Fig.30，ＰＬ.12）

ＳＣ－102と南側で重複しその北側に位置する隅丸方形の住居跡である。北東側を斜めにＳＤ－105が横切り、南西部はＳＣ－102の下から検出した。遺存状態は極めて悪く北側で10cm弱、南側では数cmである。規模は西辺が4.6m、南辺が5.2mを測り東西に少し長くなる。遺物は土師器の小破片だけである。

ＳＣ－115（Fig.30）

Ｇ－７区に位置する大型の住居跡である。北側ではＳＣ－140と重複する。北側にベッド状遺構をもち、南側の壁沿いに長方形のピットが認められる。規模は東辺で5.5m、南辺で6.1mを測る。主柱穴は径１m、深さ0.5m前後を測るＰ１、Ｐ２の二本柱と考えられる。ベッドは北壁に沿い幅1.1m、高さ5cmで西側は消滅する。南側のピットは長さ1.4m、幅0.55m、深さ0.2mを測り西側に小ピットを掘り込み、出入り口の可能性がある。

出土遺物（Fig.29－11～14）

小型の壺形土器２点が出土している。13は丸い胴部から直立する口縁部となり端部が外反する。外面には刷毛目調整の後ナデを施す。11は胴部上半に最大径をもつ肩の張る器形で底部は丸くなる。器表面は磨滅して調整は不明であるが外面は刷毛目の後ナデ調整をしているものであろう。12はＰ２から出土した小型の二重口縁壺である。頸部はすぼまり外反して開き口縁下で屈曲し少し内傾する口縁部となる。外面は研磨状の篦ナデ、内面はヨコナデである。器壁は極めて薄く、胎土も精良、焼成堅緻で暗褐色ないし黄褐色である。14はＰ２出土の甕形土器の口縁部である。

ＳＣ－140（Fig.31）

Ｇ－７区に位置する住居跡でＳＣ－115に切られ、その北側に位置する。北側はＳＤ－001の大溝に削られ緩やかに傾斜するため壁面、床面とも消滅する。隅丸の方形住居跡と考えられる。規模は南辺

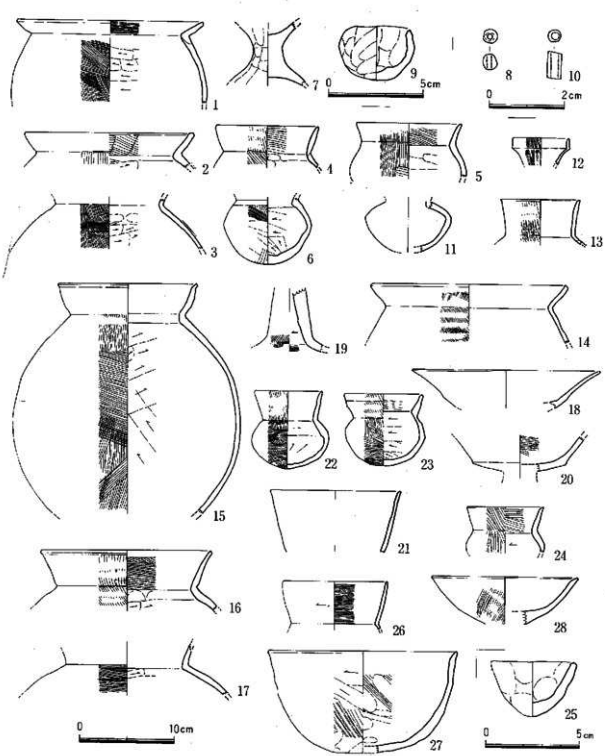


Fig.29　SC－102・140・143・145出土遺物実測図（1/4・1/2・1/1）

4.86m、東辺現存長2.65mを測る。床面はほぼ平らであるが東側は少し窪む。

出土遺物（Fig.29－15～24，PL.37）

住居跡の中では比較的土器の量が多く大部分は遺構検出時に出土していたものである。15～17は甕形土器である。15は底部近くまで残る。球形に近い胴部で、口縁下に膨らみをもたせ端部を肥厚させている。内面はナデにより外反させ器壁が薄くなる。外面は胴部下半が縦、上半は横、頸部付近は縦の刷毛目、口縁部はヨコナデ調整である。内面は箆ケズリである。22～24は小型の甕。外面は刷毛目、内面は箆ケズリである。

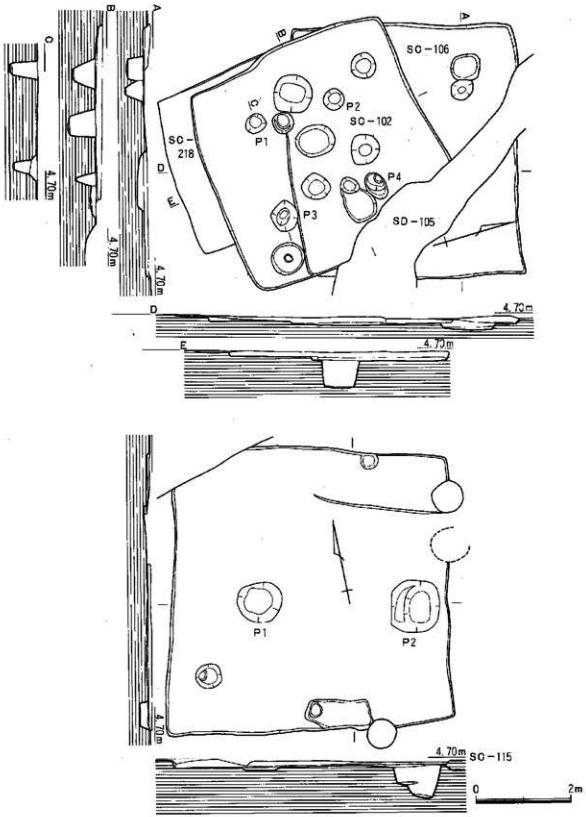


Fig.30　SC－102・106・115・218実測図（1/80）

SC－143（Fig.31）

H－6区の中央部に位置する3棟重複する住居跡の中の1棟である。最も新しいもので平面形は隅丸長方形、その規模は南壁4.1m、西壁4.8m、深さ10cm弱である。主柱穴はP1～P4が考えられ4本柱であろう。

出土遺物（Fig.29－26）

小型の壺形土器の口縁部破片である。器壁は薄く内面は刷毛目調整の後、篦研磨している。

ＳＣ－145（Fig.31）

ＳＣ－143の北側に位置し、大部分はＳＤ－105、ＳＣ－143に切られ北東部が僅かに遺存しているにすぎない。隅丸の方形あるいは長方形の住居跡であろう。出土している土器は東壁沿いの大きなピットから出土しこの住居跡に伴うか否か明らかではない。出土遺物はない。

出土遺物（Fig.29－27，28，ＰＬ.37）

27は鉢形土器で内外面とも刷毛目調整で外面には篦ケズリが残る。28は高坏形土器の坏部破片である。

ＳＣ－219（Fig.31）

この住居跡も大半はＳＣ－143に切られ、壁面が僅かに遺存していたに過ぎない。ＳＣ－143と同様な形態の住居跡である。出土遺物はない。

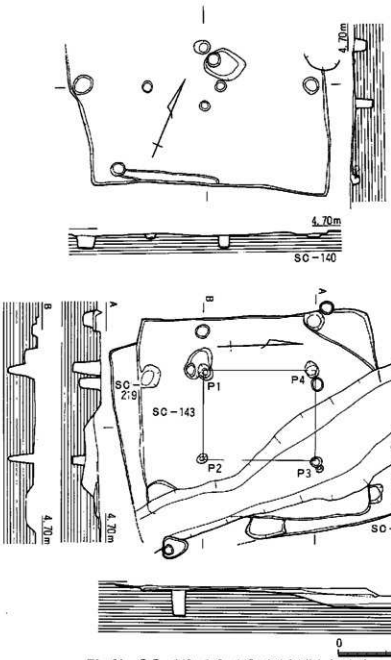


Fig.31　ＳＣ－140・143・145・219実測図（1/80）

6）溝状遺構

今回の調査で6条の溝状遺構を検出した。SD－001、SD－105の2条は飛行場が出来るまで使用していたもの、SD－220は古代末の水路であった。調査した集落跡と関わるのはSD－003、SD－174がある。SD－003は自然の流路と考えられ、突帯文土器を出土する。微高地上にも同時期の溝SD－174があり集落に伴うと考えられる。SD－104は方形区画溝で環濠（SD－002）と同時期である。

SD－003（Fig.32，PL.10,11）

調査区の南西端に検出した4次調査区から続く溝状遺構である。今回の調査の目的の一つであったこの溝の範囲を確定することであったが、当初予想していた流れの方向と異なり5次調査区に入るとSD－002を横切り大きく南側へ屈曲し蛇行しながら更に南側へと拡がっている。また試掘調査においてもSD－002と並行するものと考え、今回の調査区の南側に東西方向にトレンチをいれたが遺構、遺物を検出出来なく調査範囲外とした。

溝は調査区の西壁に沿って南北に流れ、東岸は検出出来たが、西岸は中央部で確認したのみで大部分は調査壁の下になる。東岸は北側から弧を描くようにSD－002を横断し調査区南壁に至り、更に南に続いている。幅は中央部で5.1m、深さは0.5mを測り南北に幅を広げ底面の標高は3.9m、南北の現存長26.8mである。溝の中央部が最も浅く北側に緩やかな傾斜を示し、南側では徐々に深くなり南端では80～90cm、標高3.65mを測り溜り状に窪んでいたものと考えられ、この部分から流木や鍬、建築材などの木製品、土器などが厚く堆積していた。土層は1層－粗砂を含む灰黒色粘質土で溝の埋没後の土層である。この溝の東側で古墳時代の溜りがこの層の上層に見られ、湿地状を呈していたものと考えられる。2層－灰黒色粘質土。1層より粘性が弱い。最終的に溝が埋没した層で溝の肩よりも外側にも拡がる。3層－黒褐色粘質土。この層から木製品が出土しその下の4層まで含んでいる。4層－暗黒褐色土層。5層－暗灰褐色砂質土。6層－暗灰褐色粘質土、7層－暗灰褐色砂質土で壁際の堆積である。遺物は南側の溜り状の部分では幾層にも重なり完形の土器も多く出土するが、北側では自然の流木も少なく木製品も疎らな出土である。

上層出土土器（Fig.33～35）

土層図の1～3層までの土器で僅かに新しい土器も含むが弥白式から板付II式の時期の土器群である。小破片が多く底部から口縁部まで残る土器はないがさほど磨滅していないので直近に集落が存在するものであろう。

甕形土器A類－口縁部が如意状に外反する形態。

1から3である。1は口唇部全体に篦による刻み目をもつ。外面板ナデ、内面はナデ調整で頸部の下に指跡が残る。3の刻み目は棒状工具により口唇部の下端に施す。2は胴部にも刻み目突帯をもつ新しい時期のものである。刻みは小さく浅い。内外面ともナデ調整で胎土に石英、長石を若干含み黄白褐色である。

甕形土器B類　突帯文土器で胴部上半で屈曲し、口縁部が内傾する形態。

6～12である。口縁部下の突帯の貼付る位置が直下の形態a、間隔を空ける形態bがある。8、9、12は後者である。8は内外面とも板ナデ調整で突帯は小さく篦による刻みである。胎土には砂粒を少量含むが精良で、焼成堅緻、内面から突帯にかけ黒褐色、外面は黄褐色である。9は屈曲部から内傾し口縁部は直立する。内外面とも条痕調整。口縁部上面をナデ、肥厚気味に端部が外反する。10の刻みは篦による細い刻みで間隔が疎らである。

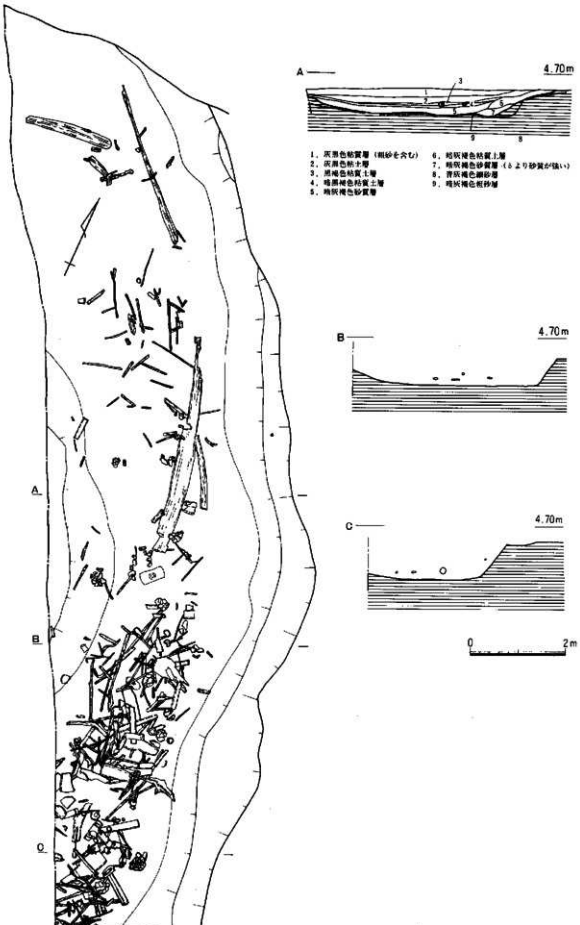


Fig.32　ＳＤ－003遺物出土状況実測図（1/80）

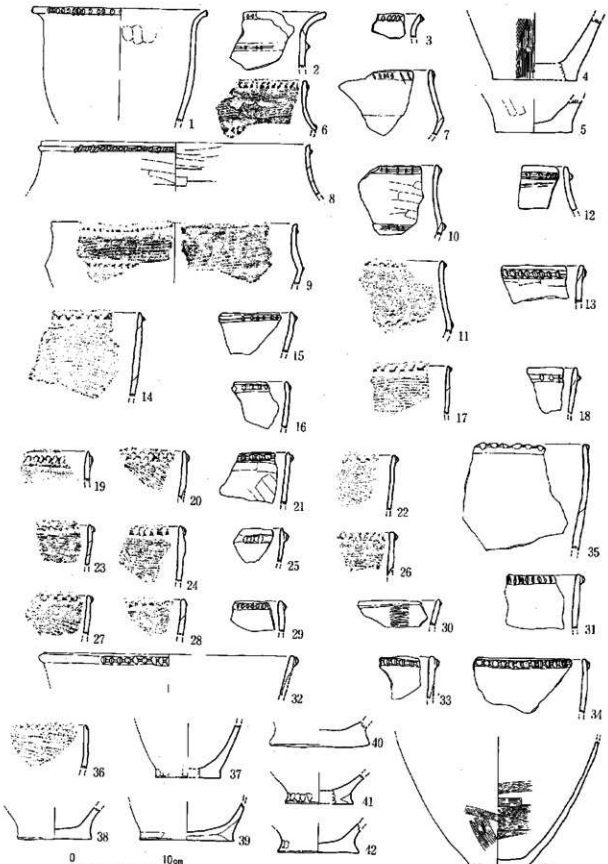


Fig.33 SD−003 七層出土土器実測図(1) (1/4)

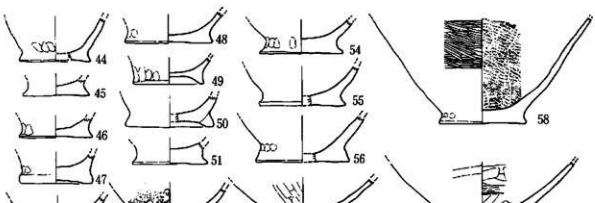


Fig.34　SD－003上層出土土器実測図(2)（1/4）

甕形土器C類　口縁部直下に刻目突帯を巡らしそのまま底部に至る形態。

13～34である。B類と同様に突帯を貼付る位置によりａ、ｂ二種類あり、ｂ類は口唇部が尖るものと角張るものがある。18、25はｂ類で小さな突帯を貼付る。口唇部は18が角張り、25は尖り気味となり、ナデ調整で外面には煤が付着する。ａ類の中で17、22、26等は口唇部の縁に貼り付けている。外面は条痕調整、内面はナデと条痕がある。15、16は口縁部が少し内湾している。30、32は胴部が大きく外傾している。

甕形土器D類　突帯を巡らせなく、口唇部に直接刻みを施す形態。36の1点だけの出土である。口唇部外面に爪？による刻み、外面は条痕、内面はナデ調整で外面には全面に煤が付着する。

甕形土器底部（Fig.33,34－37～50）

端部の張り出しは小さく大部分は平底で、胴部との境に指の調整痕が残るのもある。43は胴部下半まで遺存し、内外面とも擦痕調整、底部は張り出し胴部との境に指押さえの跡が残る。49、50は上げ底で輪高台状となり底部は薄くなる。49の内底は条痕調整の後ナデ調整を行う。外面はナデ調整で高台状の部分より上に煤が厚く付着する。

壺形土器（Fig.34～36－51～68）

中、小型の壺形土器だけである。61は丹塗研磨の土器で、別個体ではあるが62の様な底部となるものであろう。肩が強く張り、頸部との境は不明瞭で口縁部は緩やかに外反する。外面は篦研磨、内面は条痕調整の後板ナデ調整で粘土の接合跡が幾つか見られる。胎土には石英粒を含み焼成良好である。口径14cm、残存器高20.4cm、胴部最大径25.7cmを測る。63も丹塗研磨の土器で頸部は強く内傾し口縁部は緩やかに外反する。内面には条痕調整の後軽いナデ調整、外面から口縁の内側にかけ篦研磨の後丹塗する。60、66は口縁部を強く外反させ肥厚気味となる。68は小型品で器壁は薄く造られる。口縁部は端部が強く外反する。外面は丁寧な篦研磨で黒褐色をなす。53、54の外底面には篦による木葉文を刻む。

高坏形土器（Fig.35－70）

1点だけの出土である。坏部との接合面で剝離する。坏部との境に刻み目突帯を貼付る。

鉢形土器（Fig.35－71～81）

上げ底気味の平底で体部は大きく開き上半で屈曲し内傾する口縁部となる。内外面とも丁寧な篦研磨で胎土には砂粒を含まず精良で黒褐色を呈する。71は体部の立上りが急で、屈曲部からの立上りがほぼ垂直になる。75、76も口縁の立上りは緩やかである。72、73は屈曲部から一旦強く内傾し、口唇部で立ち上がる。72の外面には条痕が微かに見られる。

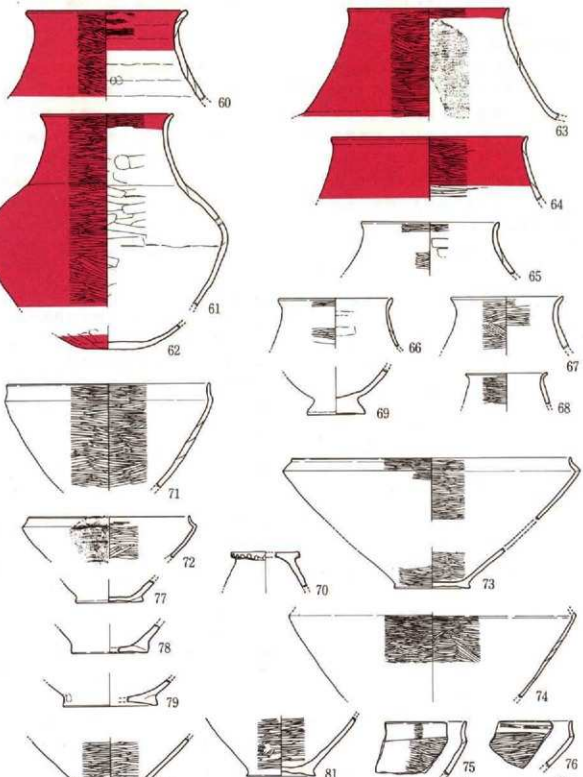


Fig.35　ＳＤ－003上層出土土器実測図(3)（1/4）

下層出土土器（Fig.36～41, ＰＬ.3,4,28～30）

土層図の４層から７層までの土器で木製品を包含する層から下層の遺物である。突帯文だけが出土しているが新しい時期の土器も含んでいる。全体としては夜臼式土器の単純期の所産と考えられよう。

土器には完形品あるいはそれに近いのが多く、器表面も摩耗がなく集落の直ぐ近くの溝（小川）であることが理解できる。

甕形土器A類（Fig.36-1～5）

1はほぼ完形品で口径18.9cm、器高21.4cm、底径4cmである。胴部は膨らみをもち口縁部が僅かに外反する。口唇部上端から少し下から篦で刻み目を施す。外面の胴部上半は煤が厚く付着し、下半部は磨滅が激しく調整不明。内面は刷毛目あるいは擦痕調整で頸部には指押さえの跡が残る。胎土には砂粒を多く含み、焼成も良くなく、暗黄褐色を呈する。底部は外側には張り出さない。2は口縁部を強く外反させた結果、刻みの下に皺状の筋が出来ている。刻み目は角張った口唇部の下端に密に施す。口縁部はヨコナデ、胴部外面は板ナデ、内面はナデ調整である。4、5は底部で胴部との境に指押えの跡が残り、内外面とも板ナデ調整である。

甕形土器B類（Fig.36－6～20）

6～10、18はb類の口縁下突帯の甕形土器である。6は屈曲部からほぼ直立して口縁部となる。内外面とも条痕調整の後ナデ調整である。18は破片が大きく径24.2cmを測る。突帯は小さく、内外面とも条痕調整の後丁寧なナデ調整でナデ消している。焼成は良く茶～暗褐色を示す。7～10は内傾しつつ外反して口縁部となる。8、10の外面は擦痕調整で内面は板ナデ。12～16はa類で口唇部の端に貼付る。12は屈曲部から垂直に立上りり口縁部となる。13は屈曲部が丸くなり内傾して強く外反する。突帯は口縁部は小さく、胴部のは大きく、篦により細く深い刻みを入れる。外面は板ナデ調整で煤が付着している。17は口縁下に突帯をもたない。胴部上半に刻み目突帯を巡らせ口縁部は外反し端部は丸くなる。18は屈曲部に低い突帯を巡らし条痕が残る。19は胴部の屈曲は緩やかで突帯を巡らしていない。屈曲部から直線的に内傾し口縁部となり、太い突帯を貼付るため器壁は薄くなる。内外面とも条痕調整で外面の胴部下半はその上から板ナデ調整を行い、煤が付着する。20も同様な器形であるが口縁部端が外反する。

甕形土器C類（Fig.36,37－21～34,128～131）

突帯はa類がほとんどで口唇部に貼付たのも見られる。全形が知られるのは2点だけである。33は口径22.1cm、器高22.1cm、底径7.2cmを測る。砲弾形の胴部に僅かに外に開く底部となる。口縁下に棒状工具による突帯を巡らせる。外面は丁寧なナデで部分的に擦痕が認められ、内面にも横方向の擦痕、粘土の接合痕が残る。底部から1/3より上の胴部に煤が厚く付着する。21、24などはナデ調整により条痕は微かに残るが、128は内外面とも全面に条痕調整が残る。34は胴部上半は擦痕調整で内面には粘土の接合痕が観察できる。31はあまり例を見ない大型の土器で胴部と底部が接合しないが復元口径43.8cm、器高45cm、底径9.4cmを測る。砲弾形の胴部に台形に張り出した底部となる。篦刻みの突帯は部分的に口唇部端と同じ高さかその直下に巡らす。内外面とも擦痕、ナデ調整である。

甕形土器E類（Fig.38－35～46）

口縁部、胴部にも刻み目突帯を有しないものでナデ、板ナデ調整を行う。胎土には砂粒を少し含み焼成良く黒褐色を呈する。外面には煤が付着する。42、46は擦痕、板ナデ調整である。全体の形が明らかなものはないが底部から内湾気味に開き口縁部となろう。39は口縁部が外反して開き、40は胴部上半まで内湾し、口縁部は外反する。口縁部は外に開くのが多いが43は直立、46は内傾する。

壺形土器（Fig.38,39－64～87）

完形品は少なく全体の形状を知られるものは少ない。その中で69は底部を欠損するが全体の姿が復元できる中型の壺形土器である。口径11.1cm、推定器高22.5cm、胴部最大径25cmを測る。肩が強く張り頸部は内傾しながら外反し、端部は肥厚する。頸部と肩部の境は明瞭で篦研磨で沈線状に浅く窪ま

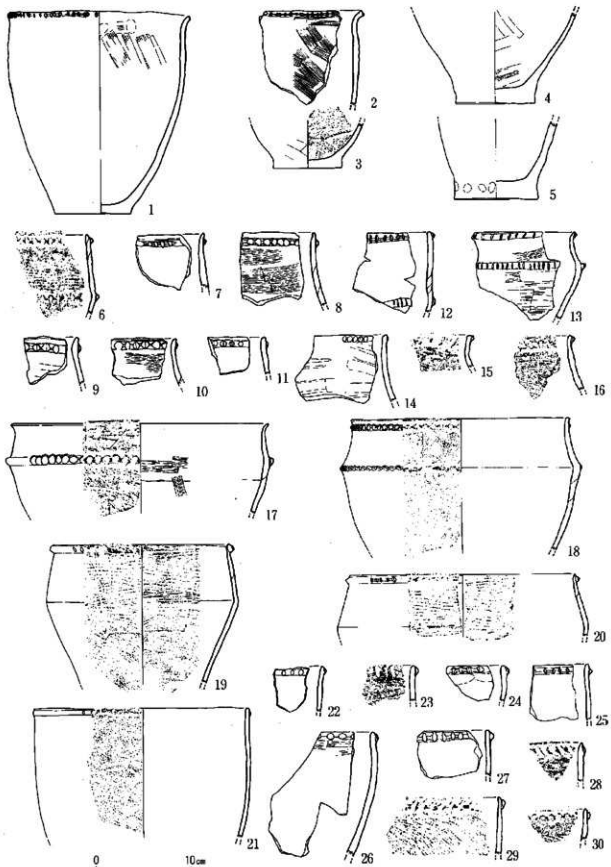


Fig.36　ＳＤ－003下層出土土器実測図(1)（1/4）

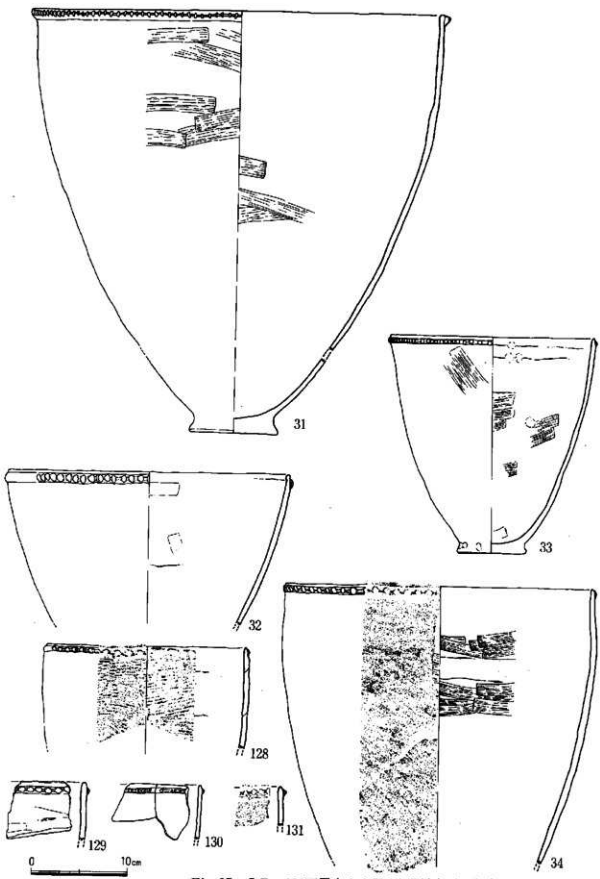


Fig.37　ＳＤ－003下層出土土器実測図(2)（1/4）

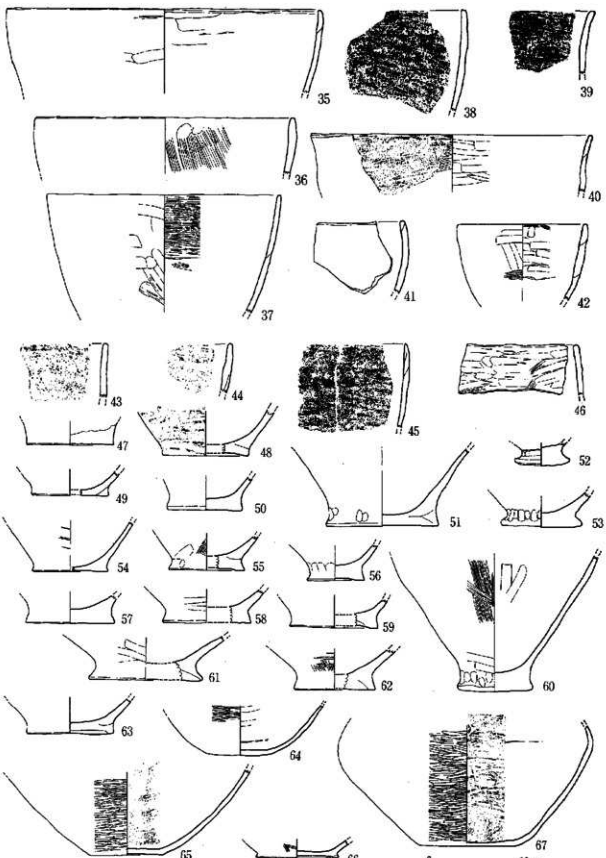


Fig.38　SD−003下層出土土器実測図(3)（1/4）

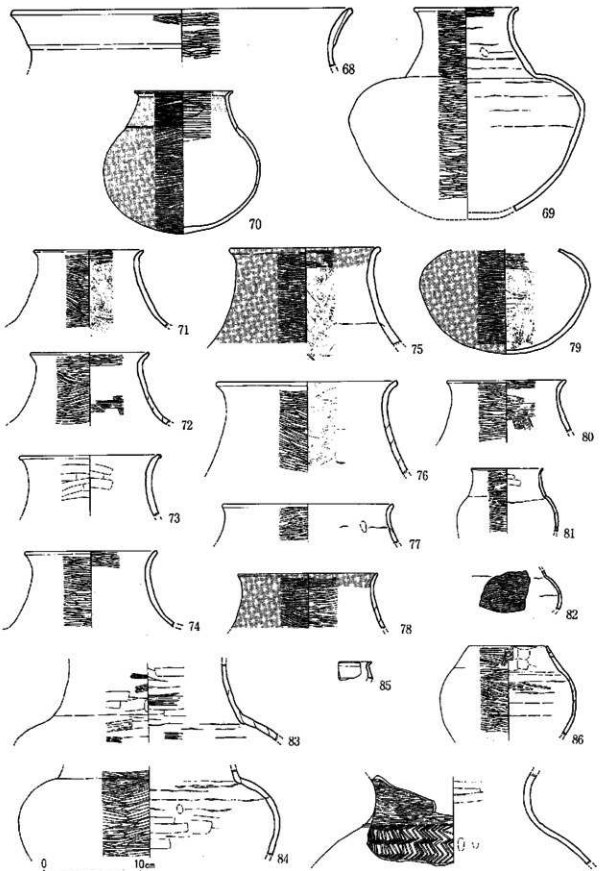


Fig.39 ＳＤ－003下層出土土器実測図(4) (1/4)

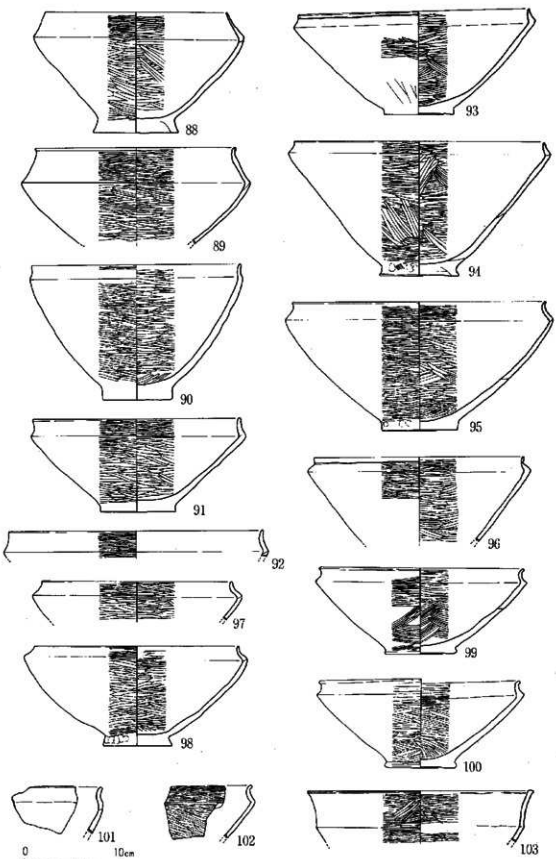


Fig.40　SD－003下層出土土器実測図(5)（1/4）

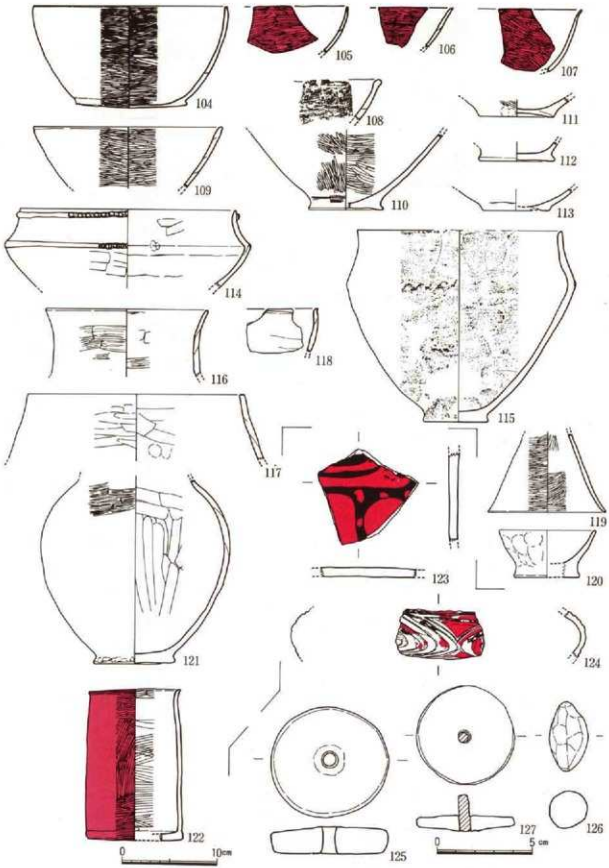


Fig.41　SD－003出土遺物実測図（1/4）

せ、内側には稜をもつ。底部は67のように平底に近い丸底であろう。外面は丁寧な篦研磨、内面は底部近くは条痕の後ナデ、上半は条痕がそのまま残り、頸部はナデ、口縁部は研磨調整である。また内面には粘土接合痕が残る。71～76も内傾する頸部から口縁部が緩やかに外反し、研磨を行う。内面に条痕が残るのも一部認められる。68は大型品の口縁部破片である。粘土を貼付て肥厚させ、段をもつ。肥厚面から内傾にかけ研磨をしている。70は小型品。口径10.5cm、器高15.4cm、胴部最大径16.6cmを計る丹塗研磨の土器である。肩の張らないや、偏球状の胴部に内傾する頸部から強く外反する口縁部となる。内面は条痕調整の後ナデ、外面は篦研磨である。81、82、85は小壺である。81は長胴で少し肩が張り、82はやや、偏球状の胴部で外面は丹塗研磨、85は口縁部を外側へ大きく屈曲させる。胎土には砂粒はほとんど含まず精良で焼成堅緻である。86は口縁部を打ち欠いたような無頸壺である。肩部には条痕、胴部には板ナデ調整の後研磨しているが一部が条痕が遺存している。内面は肩部の粘土接合部を板ナデし、ナデ調整を行う。口縁部上面は工具で面取りし角張り、その下に一対の焼成前の穿孔がある。砂粒を含まず白色の緻密な胎土で焼成堅緻で黄白色である。87は肩部に篦刻の無軸羽状文をもつ壺で時期が異なり、新しい時期の壺である。肩には小さな突帯を巡らし頸部は篦磨き、内面はナデ調整である。混入であろうか。

鉢形土器（Fig.40,41－88～114）

他の器種に比べ数が多く完形品に近いものが多い。底部は平底で深いものが多く、胴部上半で屈曲する。胎土には砂粒をほとんど含まず、焼成も良好で内外面を篦研磨調整を施す。口縁部が内傾し、端部が外反するのが大半であるが、88は屈曲部から口縁までが長く直線的に内傾するのみで端部は外反しない。90は屈曲が緩やかで口縁部はほぼ直に立ち上がる。93、94は内傾して立上り95、96は端部が外反する。104～109は安定した大きい平底から内湾して体部が開き口縁部となる鉢である。104は完形品で内外面を丁寧な篦磨きで仕上げ、焼成は極めて良好で黒陶様に強く焼き締め、叩くと金属音に近い音を出す。器壁も薄くつくられる。105～107は丹塗研磨で器壁を薄くし上げている。114は口縁部と屈曲部に刻み目突帯を巡らしている。胎土には砂粒を多く含む。内外面ともナデ調整で外面には煤が付着する粗製の鉢である。

その他の土器（Fig.41－116～124）

116は壺の口縁部と考えられるが胎土が粗く調整もナデ調整である。115のような器形の小型品か。119は高坏形土器の脚部、研磨調整である。120は手捏土器で内外面に指押えの跡が残る。121は無文土器である。胎土、焼成とも他の土器と酷似し、破片だけではその区別がつかない粗雑品である。口縁部から頸部を欠損する。胎土には石英などの砂粒を多く含み粗く、焼成は不良で軟質、色調は暗茶褐色である。平底で胴部上半に最大径をもつ倒卵形の胴部である。器面調整は粗く底部と胴部の接合面には指跡が残り、胴部上半には横方向の擦痕状の調整、下半は摩耗のため調整不明である。内面には底部近くに指ナデあるいは篦による凹凸が残り、中位は下から上へのナデ、肩部は横方向となる。粘土は外傾接合である。122は円筒形の丹塗研磨の土器である。口縁、胴部の一部を欠損するがほぼ完形品である。口径9.6cm、器高16.1cm、底径10.3cmを計る。平底で円筒形の胴部から頸部が僅かにすぼまり口縁部が外反し端部は緩やかに外反する。外面の中央部は縦、上下及び内面は横方向の研磨である。123は彩文土器で下地に黒色顔料を全面に塗り、その上から赤色顔料で文様を描く。胎土には砂粒を含まず精良で焼成堅緻。破片は板状で曲線を描かないのでどの様な器形になるのか不明。内面も丁寧な研磨を施し、器壁も薄い等を考慮すると大きな鉢の体部の可能性が強い。124は肩部に沈線文をつ壺形土器の肩部であろう。肩の屈曲する部分に押し潰された沈線文を対象に配置し、その上下に三叉文をもつ。赤漆の下にも部分的に黒色顔料が見られることから、内外面を研磨した後全面に黒色を塗布し、

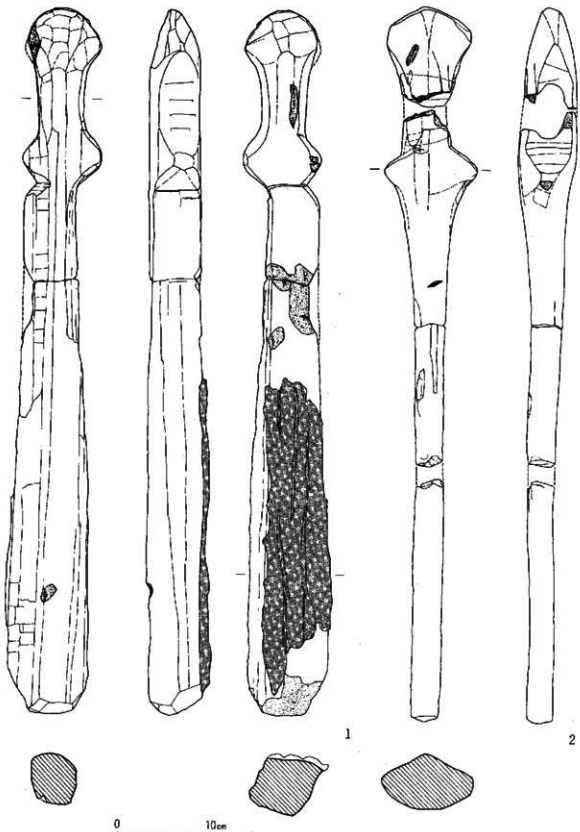


Fig.42　SD－003出土木器実測図(1)（1/4）

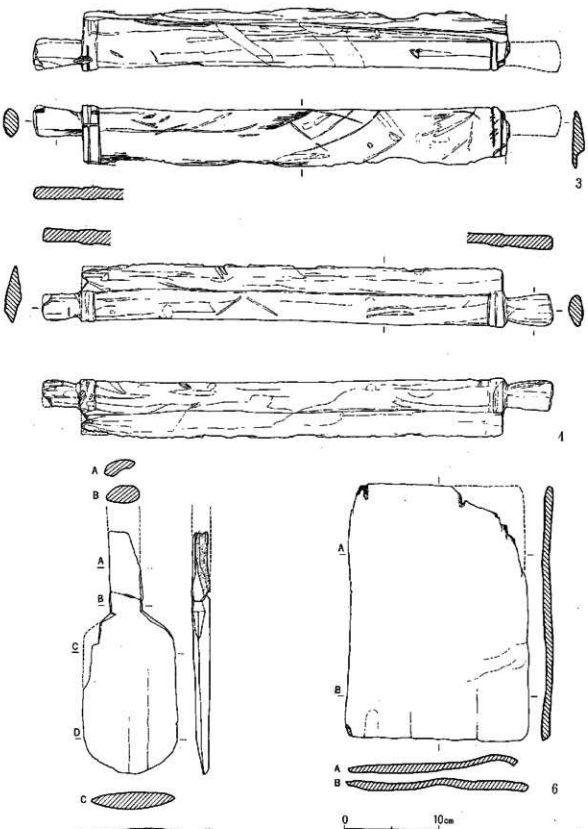


Fig.43　SD－003出土木器実測図(2)（1/4）

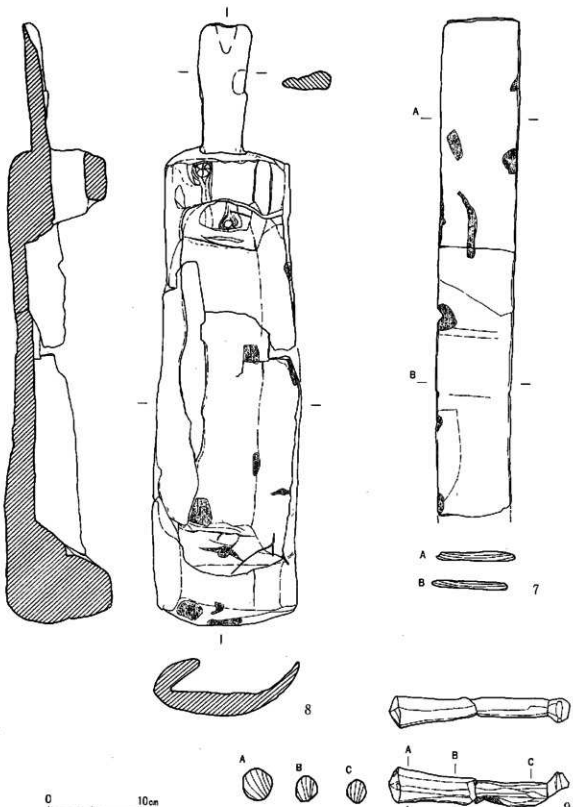


Fig.44　SD－003出土木器実測図(3)（1/4）

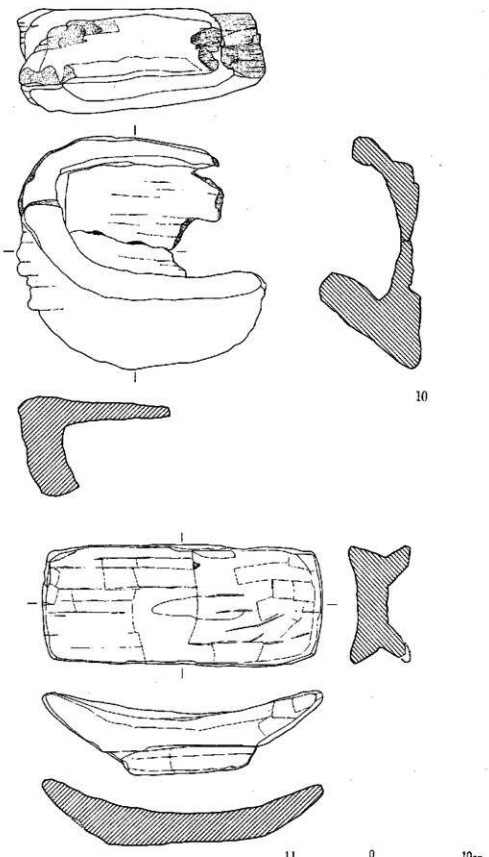


Fig.45　SD－003出土木器実測図(4)（1/4）

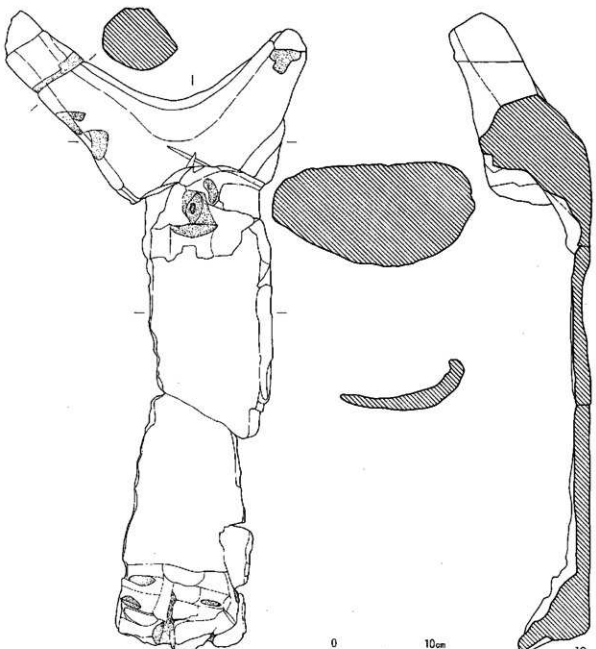


Fig.46　ＳＤ－003出土木器実測図(5)（1/4）

凹線部に赤漆を塗ったものであろう。胎土は緻密で微砂を少量含み、焼成良好で内面は茶褐色を呈する。縄文時代の土器の色彩が強く感じられ、設楽博己氏の教示によれば大洞Ｃ２とのことで彼地から搬入された土器ある。

土製品（Fig.41－125～127）

紡錘車と投弾が出土している。127には木製の軸が装着されたままである。紡錘車は偏平で径5.1cm厚さ0.5cm、木製軸は基部だけが残り円形に削りだし、径0.5cm、残存長2.0cmを計る。126は投弾で器表面に成形時の凹凸が明瞭である。

木製品

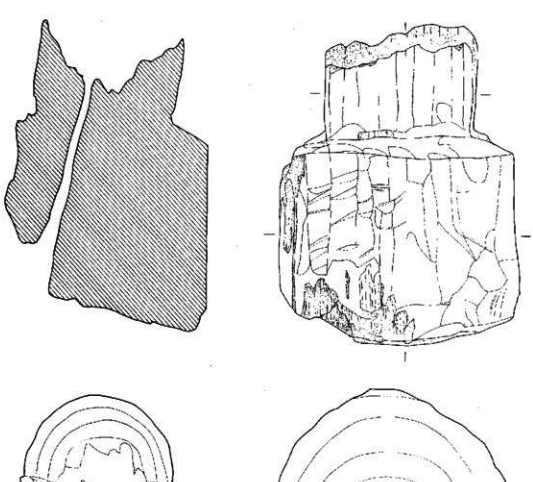


Fig.47　ＳＤ－003出土木器実測図(6)（1/4）

加工具類(Fig.42,43—3～5,44—9,ＰＬ—38,40)

1、2は石斧柄である。1は未製品の石斧柄で装着部のみ割材に加工を加え、柄部は粗割そのままで片面に皮がそのまま付いて、くぬぎ材であろう。装着部は先端部は丸く半円形に削りだし、両面から先端にかけ薄くする。装着部は両側から抉り幅4.6cm、厚さ5.1cmで断面は上下が丸くなる長方形、肩部は両側から切り込みを入れ、それより下の柄部は未加工である。全長74.2cm、装着部長18.5cmである。2は完成品の石斧柄である。装着部は両側から抉りを入れ、先が撥形に拡がり、先端は山形に尖らせる。石斧装着孔は楕円形に抉り刃部に近い側は幅6.7cm、厚さ3.5cmを計り、反対側は一回り小さくなる。柄部は円形に削りだす。3、4は紡織具の緯打具であろう。幅6cmの板状木製品で、両側に幅5cmの柄部を削り出し、身の断面形をレンズ状に整えている。身の両側には沈線と削りだしによる二条の帯状装飾を施し、装飾部を除く身幅は41.6cmである。柄部は中心より上側に位置し、外側に向かって撥形に開き削り調整で丸く仕上げられる。刃部は木目に沿って剝がれ本来の状態を保っていない。3は長さ55.8cm、最大幅6.0cm、厚さ0.6cm、4は少し短く長さ54cmを計る。5は杓子状木製品である。柄の大部分を欠き、身の一部を欠損する。身は羽子板状で四隅を丸く面取りする。断面は凸

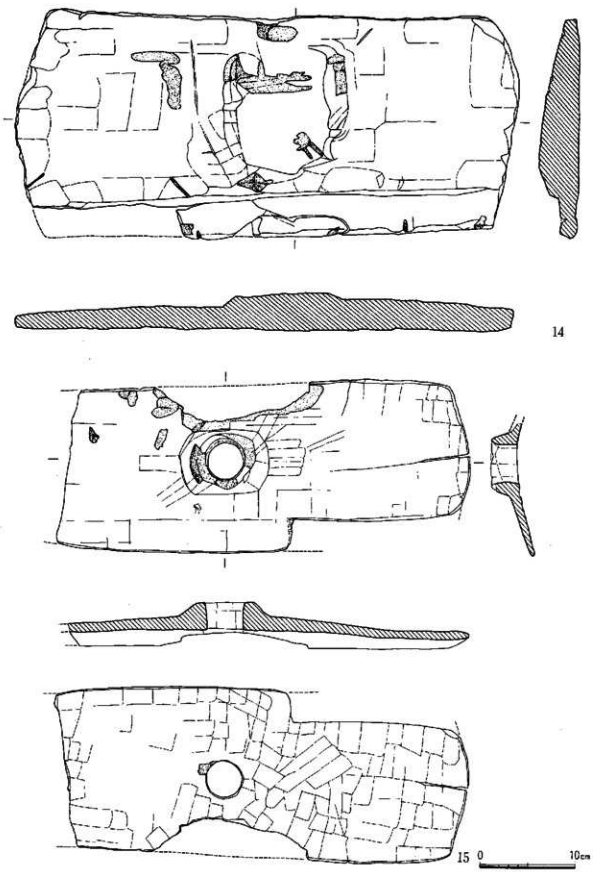


Fig.48　SD−003出土木器実測図(7)（1/4）

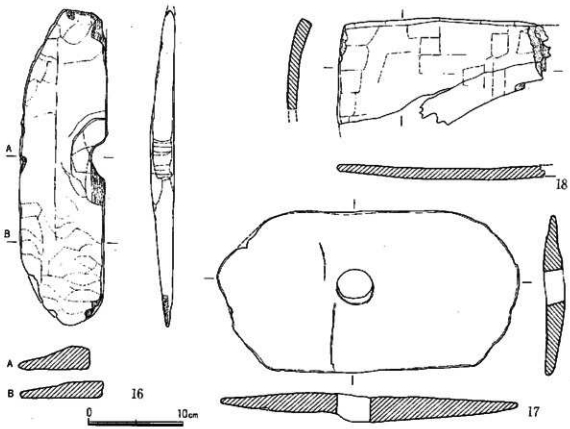


Fig.49　ＳＤ－003出土木器実測図(8)（1/4）

レンズ状で縁辺を薄く仕上げる。柄は扁平な楕円形である。現存長25.4cm、身幅9.8cm、厚さ1.5cmである。９は基部に突起を削りだす棒状の木製品で何らかの柄もしくは横鎚であろう。

加工板材（Fig.43-6,44－7，ＰＬ.38）

６は長方形の板。割材を両面から削り板材としていると思えるが面が痛んでおり削り跡は不明。幅19.5cm、長さ27.9cm、厚さ0.8cmである。７も同様な板材で側面は面取りする。長さ55cm、幅8cmを計る。

容器（Fig.44～46－8,10～12，ＰＬ.38,39）

８は丸木を刳り貫いた容器で、加工を施した径15cmの丸木に両側の木口内側から斜めに削り込み、側面も木の丸味に沿って抉り込み容器としている。右側面は土圧により歪んでいるが左右対称になるものである。木口部の一端には径３cm前後の孔を穿ち、その先に幅4.3cm、長さ13.5cmの大きさの長方形のを削り出し部をもつ。孔と同じ高さで上面が湾曲していることから注ぎ口とも考えられるが、あるいは把手が年輪に沿って半折したため容器部の心材が抉れて注ぎ口のようになった可能性もある。10は20cm前後の丸木を輪切りにし、一方の木口を底面にし、反対側の木口面から抉りぬいて曲げ物のような容器としている。底面を斜に切り込んでいるため両面の木口を年輪に沿って斜めに削った結果容器自体も斜めに歪んでいる。縁の厚さは不均一で２～４cmで内底は中央が薄く壁際が厚く丸くなる。内法は径16cm、最深部７cmを計る。11は浅い盤鉢状の容器である。全体が平滑に仕上げられ金属器を使用したかのような製品である。平面形は長方形で低い脚を付ける。身の上面は浅い皿状に削り中央部を窪め、側面は斜めに逆「ハ」の字に成形する。脚は両側縁にもうけ、断面が「ハ」の字になる。幅12.4cm、高さ7.8cmを計る。12は８とほぼ同じ加工を施す容器で木の先端部が二又に分かれた部分を利用している。身の内面の木口部は斜めに粗雑な削りを行い、工具跡をそのまま留めている。二又部

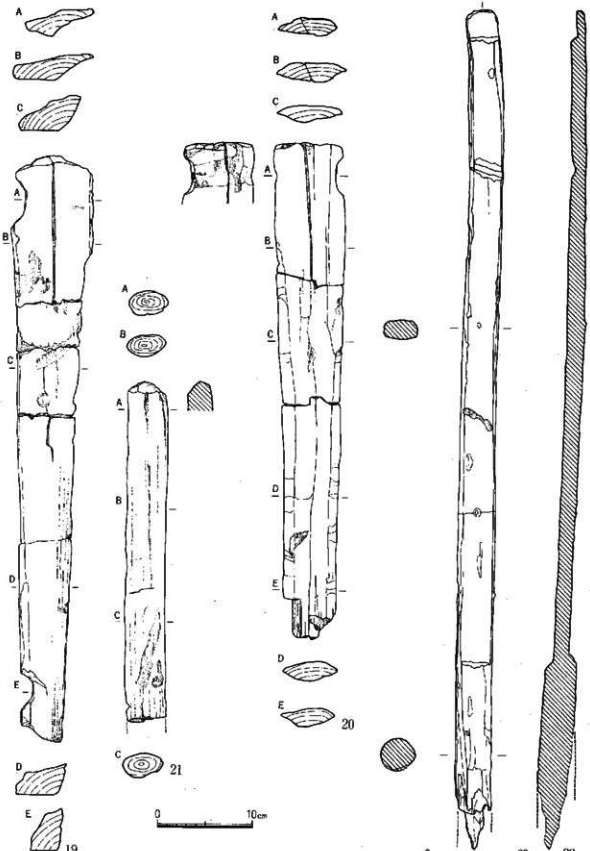


Fig.50　ＳＤ－003出土木器実測図(9)（1/4・1/8）

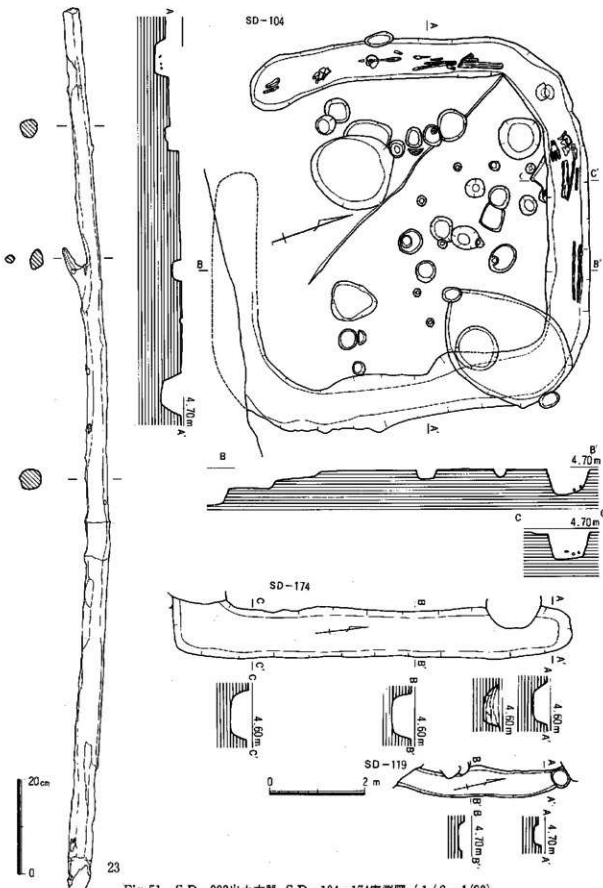


Fig.51　ＳＤ－003出土木器，ＳＤ－104・174実測図（1/8・1/80）

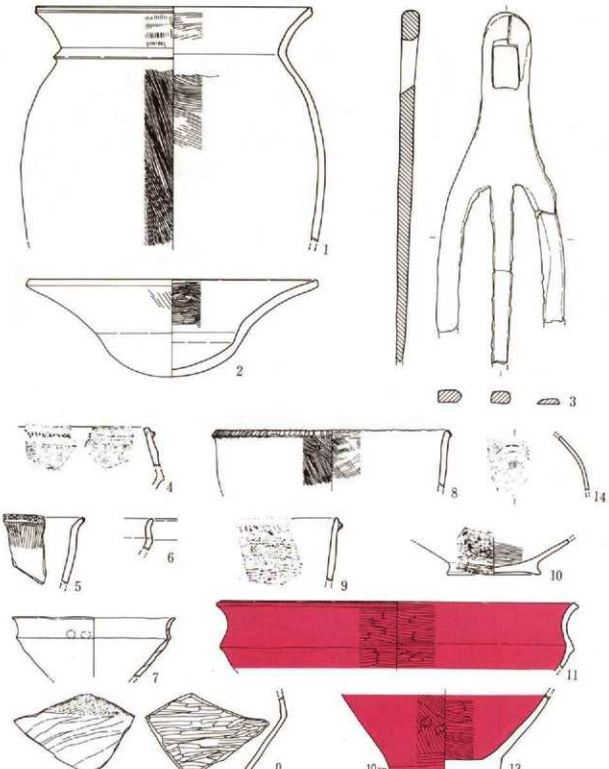


Fig.52　SD−104・119・174出土遺物実測図（1/4）

分の側面は皮を除去しただけで、先端部も粗く切離し工具の跡を留め、仕上げの加工はしていない。

農具（Fig.48,49—16,17,PL.39,40）

14は諸手鍬の未製品。柄孔の隆起部を方形に粗く削り出す。隆起部の位置が片方に片寄っているのであるいはえぶりの可能性もある。両側面は面取りして直線的になり、両端は丸くなる。幅22.3cm、

長さ52.6cm、身の厚さ1.3～3cmを計る。15～17は諸手鍬の完成品である。15は大型の諸手鍬で、片方の刃部を欠損する。孔の中心部から刃部までは26cmであり全長では50cm前後、幅は17.5cmを計る。中央に柄孔の隆起部を削りだし、刃部を薄くする。16は中央から縦に半折し一方の刃部を欠損する。柄孔部は隆起部をもたず偏平であるが刃部から柄孔部に向かって全体に厚さを増し2.5cmの厚さとなる。また柄孔の周りは2～3cmの幅で斜めに浅く掘り窪め孔の部分を薄くしている。現存長34.5cm、現存幅9.2cmで刃部は丸くなる。

不明木器（Fig.47－13,49－18,ＰＬ.39,40）

13は丸木の心持ち材で側面を丁寧な面取りし工具痕が明瞭に残り完成品と考えられる。。中心で半折している。上半部で段を持たせて削り込み15cmの円柱を造りだし、上の面は円錐状に挟れているが、これが加工か腐朽によるのか不明である。加工による窪みであるとすれば容器かそれに類する木製品であろう。18は厚さ1.2cmの湾曲した板材で表、裏面を丁寧に削り加工している。えぶりかとも考えられるが使用している樹種がイスノキ材で農具とは異なり容器であろうか。

建築材（Fig.50，51－23,ＰＬ.40）

19、20は割材の先端部に抉りを入れるだけの加工を施すもので建築材であろう。19は最大幅８cm、現存長62cmで下端が細くなる。頭部は粗く山形に削り、弧状の抉り部の他は割材のままで断面の形は所によつて異なる。20もほぼ同じ形態で先端部に抉りをもつ。裏面は未加工で自然面を保つ。頭部は直線的に削られ側面等は割材のままである。21は頭部を丸く削っている丸木材。22は基部以外を両側から削り断面長方形に整形し、頭部は平坦面からＬ字状に欠き込みを入れる。基部は径7cmの楕円形、中央部は幅は同じで厚さ3.9cm、先端の欠き込みは長さ5cm、深さ0.7cmを計る。上端から33cmの位置に浅い抉りが斜めに見られ、交差する部材を斜めに緊縛したものであろうか。下端は欠損し38cm以上、その上は130cmを計る。23は丸木の二又の部分を加工した懸架材であろう。基部の径は4.3cmの自然木で二又の枝部分と本体部をコの字状に削りだし、横材を安定させる加工を施す。枝の先端部は丸く尖る。

ＳＤ－104（Fig.51,ＰＬ.11,12）

Ｇ－３区、SD-002の北側に接する方形区画の溝である。SD-002と重複しているが前後関係は不明であるが、出土遺物では時期差は認められない。西辺の溝は４次調査での検出であるがここで一括して述べる。南側が明確ではないが南西隅に陸橋をもち、規模は溝の内側で約6.2m、溝幅１m前後、深さ0.5mを測る。床面は平坦で丸みをもち、壁面は垂直近く立ち上がる。各隅は丸くなり隅丸方形を呈する。覆土は上層が灰褐色砂質土、下層が黒灰色粘質土で、北、西の下層より自然木や木製品、土器が出土している。区画内は古墳時代前期の土壙SK－103、SK－211等の遺構は見られるが他には小ピットが点在するだけで纏まりはなく、内部施設が存在するか不明。

出土遺物（Fig.52－1～3,ＰＬ.37）

１は甕形土器である。頭部に下に垂れた突帯を貼り付け、口縁部は外反し口唇部に沈線を巡らす。外面は縦、内面は横、斜めの刷毛目調整で、口縁部はヨコナデする。外面には口縁部まで全面に煤が付着している。２は口縁部が少し欠けるがほぼ完形品の異形の浅鉢形土器である。丸い体部から外反する大きな鍔状の口縁部となる。外面、内面の体部はナデ調整で一部刷毛目が残り、口縁部は刷毛目調整の後を軽くナデ消す。口径30cm、器高10.3cmを計る。３は三叉鍬で刃の先端を欠損する。頭部は丸く、柄孔は長方形である。着柄角度は49°、残存長37.2cm、刃部幅13.2cmを計る。弥生時代後期後半の遺構である。

ＳＤ－119（Fig.51）

G－7区に位置する小規模の溝状遺構である。南北方向に延び、幅は0.54m、現存長3.5m。深さ15cm前後を計る。覆土は暗褐色土で遺物は少ない。

出土遺物（Fig.52－4～7）

4は口縁直下に刻み目突帯を持つ甕形土器で、内外面とも条痕調整。5は口縁部が外反し口唇部全体に箆刻みを巡らす甕形土器である。外面は縦方向の刷毛目、内面はナデ調整で屈曲部に指跡が残る。6、7は体部上半で屈曲する鉢形土器である。6は丁寧な研磨の精製土器であるが7は粗製品で全体に歪で内外面も簡単な箆ナデ調整である。前期初頭の溝であろう。

ＳＤ－174（Fig.51）

Ｈ－9、10区に位置する弥生時代前期前半の遺構である。ＳＫ－175とほぼ並行して南北に直線的に延びる溝状遺構で最大幅1.03m、長さ4.4m、深さ0.3～0.4mを測る。覆土は1、2層灰褐色土で土器の細片を多く含んでいる。3、4層は黒灰色粘質土、5層は黒灰色弱粘質土層　6層は灰褐色粗砂層、黒褐色粘質土層である。土器は1、2層からの出土である。

出土遺物（Fig.52－8～14）

8は口縁部を僅かに外反させ、口唇部全体に刻み目をもつ甕形土器である。胴部は膨らみが少なく底部に至る。外面は縦の刷毛目、内面は口縁部を横の刷毛目、胴部は板目調整であろうか。外面には煤が付着する。9は口縁直下に刻み目突帯をもつ甕形土器で、外面は条痕調整、内面は条痕をナデ消している。10～12は鉢形土器である。10は底部破片で上げ底。内外面とも丁寧な箆研磨で胎土も精良で焼成も良く黒褐色ないし灰褐色を呈する。11は丹塗研磨土器である。屈曲部は鋭く、口唇部は角張り上面の中央は窪み端部は肥厚する。13は外底を除き丹塗研磨、14は小型で肩部に重弧文を箆描きする壺形土器である。

7）掘建柱建物

今回の調査で6棟の掘立柱建物を検出した。ＳＢ－222は大型の建物で桁行12.18m、梁行8.4mである。特殊な機能を有するものであろう。他のは1間×2間、1間×3間と小規模で倉庫の可能性がある。1間×1間の柱を残す建物は歪な平面形で竪穴住居跡の主柱穴の可能性もある。

ＳＢ－222（Fig.53,PL.13）

G－11、12区に位置する側柱だけの大型建物である。後述する環濠の北側から内側へ15m南側にあたり主軸をほぼ南北にとる。梁行4間、桁行6間、床面積102.3㎡の規模である。柱間距離は梁行が210cm間隔、桁行が203cm間隔で中心の柱穴までが420cmと609cmである。中央部には棟持ち柱と考えられる大型ピットが見られる。その規模は長径1.8m、短径1.5m、深さ0.62mの不整楕円形を呈し、南西側は浅く二段掘りしている。建物内部には束柱と考えられるピットは見られないが、実際の掘り込み面はもっと上の方でその可能性は否定出来ない。柱穴は大小様々であるが基本的には建物の外側を浅く、内側を一段深くし二段に掘り込み、床面に礎板を置きそこに柱を立てている。最も大きな柱穴Ｐ－3は平面形が隅丸長方形で長辺1.9m、短辺1.14m、一段目の深さが0.2m、二段目が0.4mの規模である。一、二枚の礎板を有するのが多いが、この柱穴だけが礎板を三枚重ねする。下層には長軸に並行して置き、中層にはそれと直交させその上に径25cmの半円径の礎板を据え、柱の安定を図っている。これらの礎板は他に加工の痕がないので、建築部材の転用品ではなく当初から礎板として造られたものであろう。南西隅のＰ5では扁平な礎板に柱が据えられた状態で検出した。木の心材だけの遺存で径20cm程であるが他の柱穴の土層断面や柱痕跡から30～40cm位の柱を使用していたと推定できる。またこ

の柱穴からは銅鏃(Fig60－19)が1点出土する。掘り出した時には赤銅色を呈しバリが残存していることから建物建立時の祭祀ではなかろうか。礎板が検出出来なかったのはＰ7、Ｐ9、Ｐ10、二枚使用するのはＰ4、11、16、18、20で他は一枚の礎板を据えている。

ＳＢ－225（Fig.54，ＰＬ.14）

北側の環濠の縁に接して2棟の建物があるが、その中の1棟で西側にある1間×2間の掘立柱建物である。環濠とほぼ直交する建物で、主軸はN－58°－Wをとり西に振れる。梁行1間(4.32m)、桁行2間(4.8m)、床面積20.7㎡の規模である。柱間距離は梁行が432cm、桁行が240cmである。柱穴の掘り方は隅丸長方形ないし長楕円形で細長い板を礎板として用いる。Ｐ4の規模は1.43cm×1.03cm、深さ0.85m、礎板は長軸に沿って置かれ大きさは幅28cm、長さ60cm、厚さ5cmの板材で、その西に寄った位置に礎板の幅ぎりぎりの柱を立てる。Ｐ5では礎板が半折し、西側の水平な方に柱を乗せる。柱は面取りし目途穴を下端に切り込む。Ｐ3の礎板は上面に自然面をそのまま残した材を使用する。Ｐ1とＰ6の間の柱穴は後世の土壙に切られる。またＰ5はＳＢ－226のＰ8に切られる。Ｐ3からは銅鏃が一点出土している。

ＳＢ－226（Fig.55，ＰＬ.14）

環濠の方向とほぼ並行する建物でＳＢ－225と一部重複し、その東に位置する1間×3間の掘立柱建物である。東西に長く主軸はN－44°－Eをとり西に振れる。梁行1間(4.93m)、桁行3間(6.87m)、床面積33.87㎡の規模である。柱間距離は梁行が493cm、桁行が229cmである。柱穴の掘り方は布掘り風で二つの柱穴を連結させる浅い溝状の掘り込みがあったり、中心の柱穴の周りに十文字に浅い掘り込みを入れたり統一性にかける。平面形は隅が角張る長楕円形で最も大きいのはＰ7で長径2.3m、短径1.5m、深さ0.7mを測り、小さめのＰ2は1.42×1.32m、深さ0.8mを測る。確認面から約10cm下からは粗砂層で壁面が崩落しているのもある。礎板には径5～15cmの丸木を用い、小さい木はそのまま数本並べ、大きい丸木は半截し、その両側面をＸ状に削り断面を四角形に整え柱の下面をコの字に抉り礎板と組み合わせる形態であろう。なかには丸木をＸ状に欠き取るのも見られる。

ＳＢ－227（Fig.56）

Ｇ－12区、大型と小型の建物の間に位置する小型の建物である。4本の柱が検出出来たのでそれを組み合わせた。1間×1間の建物であるが各辺は直交しない。柱間距離も各々異なり掘立柱建物と考えるより竪穴住居跡の四本柱の可能性が強い。柱は10cm前後の丸木である。

ＳＢ－231（Fig.56）

Ｇ－8区に位置し、大部分をＳＤ－001に切られ全体の規模は不明。南北に1間、東西に2間を確認できた。柱穴の掘り方は楕円形、隅丸長方形で径70～80cmの小規模な建物である。Ｐ1とＰ2が3.4m、Ｐ2とＰ3の間が2.0mである。

ＳＢ－232（Fig.56，ＰＬ.15）

Ｇ－6区に位置し二個の柱穴(Ｐ5、6)は4次調査で検出した。大型の柱穴を有する1間×2間の掘立柱建物である。主軸はN－15°－Wをとり西に振れる。梁行1間(4.8m)、桁行2間(4.8m)、床面積23.0㎡の規模である。柱間距離は梁行が480cm、桁行が240cmである。柱穴の掘り方は隅丸長方形ないし長楕円形である。一個を除いて礎板の立つ位置は二段に掘り込む。礎板が残るのはＰ1、Ｐ2だけで他の柱穴は検出出来なかった。Ｐ2は掘り方も大きく歪曲した台形で1.7m×1.8m、深さ85cmの規模でその南西隅を一段掘り窪め礎板を据える。礎板は他のと異なり転用品である。幅7.5cm、厚さ4.7cmを測り下面は割面を平滑にし、側面及び上面は手斧により丁寧な削りを施し、断面七角形に仕上げる。本来2m前後の2本の厚い板材を60～70cm前後に切断して礎板として用いたものであろう。

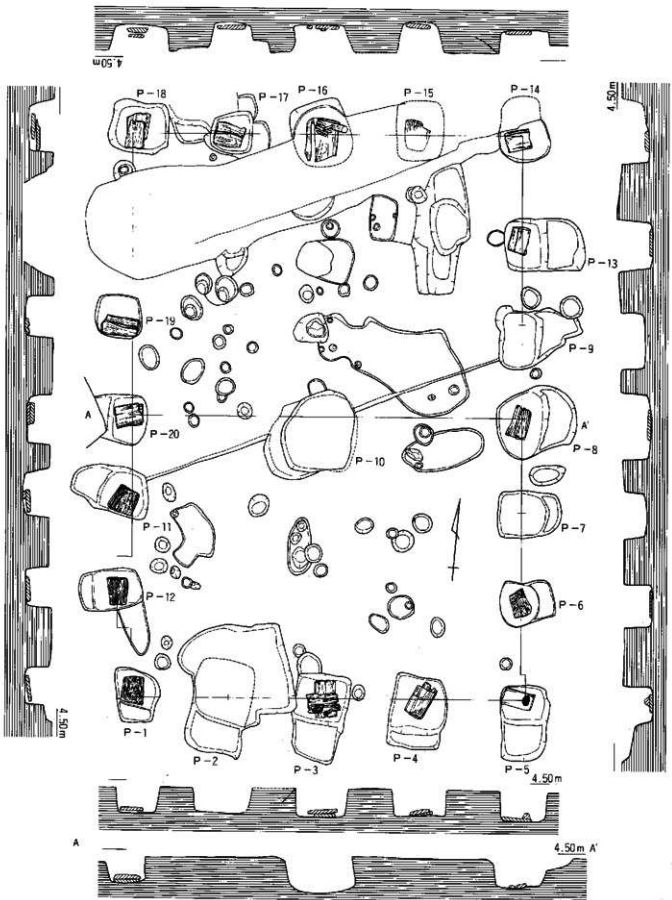


Fig.53 SB-222実測図 (1/80)

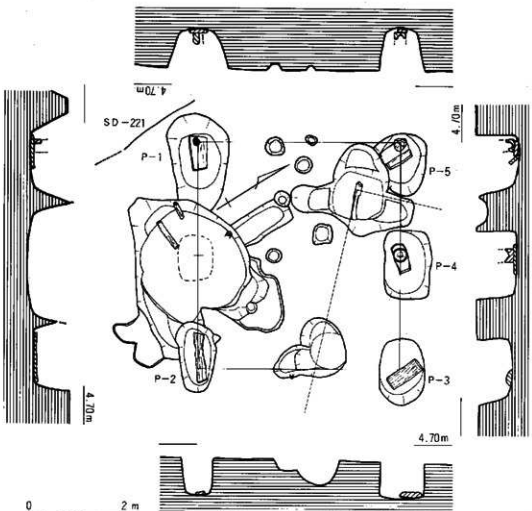


Fig.54　SB-225実測図（1/80）

出土遺物（Fig.58～60, PL.4,16,17,37,41）

1～9は礎板である。1、2はSB-222のP14、18出土。この建物の礎板としては小型品である。1は割材そのままで両端を切断する。幅41cm、長さ55.4cm、厚さ3cmを測る。2は先端部が細くなり台形を呈する。最大幅40cm、長さ63cm、厚さ8.7cmを測る。3はSB-225のP4出土。割材に粗い削りを加え、転用材であろう。基部は両側から削り断面が山形となり、両側にも削りが加えられ、幅16.5cm、長さ76cm、厚さ6.2cmを測る。4～8はSB-226出土。6は片面に樹皮を付けたままの割材で両側面のみをX状に削り取る。端部には両側から切断しその痕を留め、一方の側面に切断跡が残る。全長85.4cm、端部幅17cm、中央部幅9.2cm、厚さ7.8cmを測る。4、5、7は同様な形態、7は側面の削りがない。8は半分に切断する。5はP1、6はP2、7はP5、8はP5出土である。9はSB-232のP2出土である。表面は金属器の手斧を用いた鋭利な加工で四面に面取りし、削り跡を模様的に残し、側面も同様な削り、裏面は割面を平滑にしているだけである。両端も粗い切断痕を留め、加工した長い角材を切断して礎板として利用したものである。幅14.5cm、長さ85.3cm、厚さ8.7cmを測る。

10～19はSB-222の柱穴出土。弥生時代後期後半の土器と銅鏃である。10～13は甕形土器の胴部から口縁部の破片で卵形の長胴に外反する口縁部となり端部は面取りする。内外面とも刷毛目調整で口縁部を横の刷毛目調整の後ヨコナデしている。11の外面にはタタキの痕が残り、12の屈曲部には突帯を貼り付ける。14は北環濠にみる異形鉢形土器の口縁部であろう。口径29cmを測る大型品で外面には

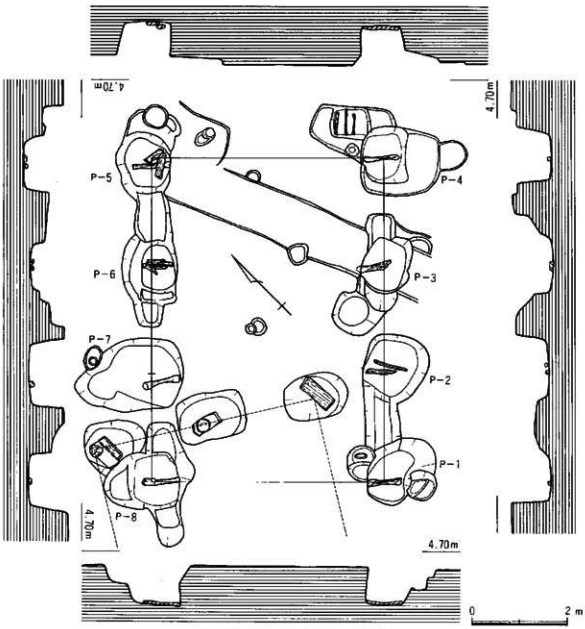


Fig.55　ＳＢ－226実測図（1/80）

刷毛目の後粗い研磨を施す。16は平底風の鉢形土器。丸く湾曲する体部から口縁部は緩やかに外反する。17は手捏の小型品。底部は丁寧にナデられ指跡が残る体部との境に明瞭な稜が認められる。18は土玉で径1.4cm。19は有茎で篦被をもつ三角形の鋳造製銅鏃で中央に稜を有する。銅質は良好であるが鋳上がりが悪く凹凸が見られ、基部から篦被にかけバリが残り、身の一部が研磨されるだけである。茎は一方に湾曲する。断面は菱形で全長5.95cm、最大幅2.3cm、厚さ0.45cmを計る。20はＳＢ－225出土の有茎鏃である。銅質が悪く鋭利さに欠ける。稜を持ち断面菱形。全長3.75cm、厚さ0.3cmを測る。21、22はＳＢ－225出土。21は丸底化した甕形土器の底部で外底まで刷毛目調整をする。23から24はＳＢ－226出土。平底で丸底への変化を窺える。25は複合口縁の壺形土器の口縁部である。口唇部は肥厚し屈曲部は角張る。26から28はＳＢ－232出土。

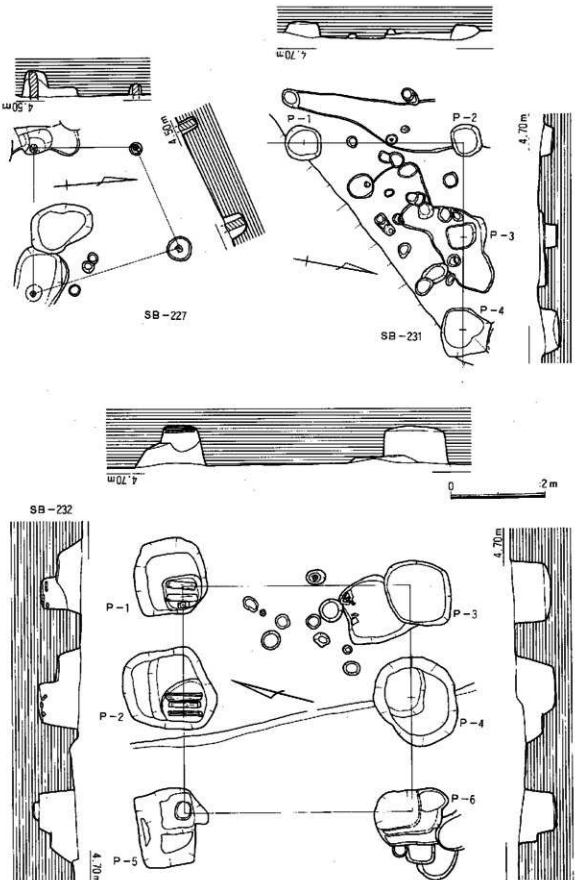
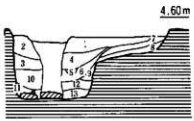
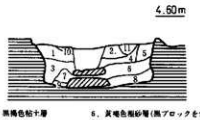


Fig.56　S B－227・231・232実測図（1/80）



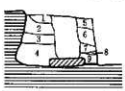
1. 黒褐色粘土(砂質より砂を多く含む)
2. 1と灰色同質
3. 黒褐色粘土層
4. 2と灰色同質
5. 灰褐色粘砂層
6. 暗黒色粘土層
7. 黄灰色粗砂層
8. 黒褐色粘土、灰色粘土ブロック混り
9. 青灰色粗砂層
10. 青灰色粗砂層
11. 暗黒褐色粘土
12. 灰褐色粗砂層(黒褐色粘土ブロック混り)
13. 灰色同質

SB－222 P－13



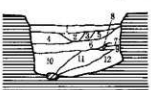
1. 黒褐色粘土層
2. 〃
3. 〃 (1より暗い)
4. 〃 (2に近い)
5. 〃 (1より暗い)
6. 黄褐色粗砂層(黒ブロックを含む)
7. 〃
8. 〃
9. 〃
10. 黒褐色粘土層、粗砂混り
11. 黒褐色粘土層と灰褐色粗砂層との互層(厚5cm)

SB－222 P－18



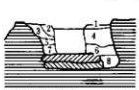
1. 黒褐色粘十
2. 灰褐色粗砂
3. 黒褐色粘土
4. 暗黒色粗砂
5. 1と灰色同質
6. 2と灰色同質
7. 3と灰色同質
8. 灰褐色粗砂
9. 4と同色同質

SB－222 P－14



1. 黒褐色粘土層
2. 黒褐色粘土と粗砂層
3. 粗砂層
4. 黒褐色粘土(1より暗い)
5. 粗砂層
6. 黒褐色粘土層
7. 黒褐色粘土と粗砂
8. 暗黒色粘土層
9. 黒褐色粘土層
10. 暗黒褐色粘土層
11. 粗砂と黒褐色粘土混り層
12. 灰褐色粗砂と黒褐色粘土混り

SB－222 P－19

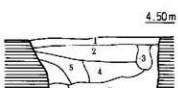


1. 黒褐色粘土と粗砂混り
2. 黒褐色粘十と青灰色粗砂十
3. 暗黒褐色粘土
4. 黒褐色粘土
5. 黒褐色粘土
6. 黒褐色粘土(4より暗い)
7. 暗黒褐色粘土
8. 暗黒色粘土

SB－222 P－20

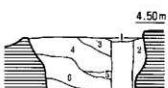
1. 暗褐色粘質土
(粗砂粒を多く含む)
2. 暗褐色粘質土
3. 茶褐色砂質土
4. 灰白色

SB－225 P－2



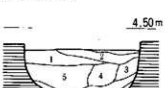
1. 暗褐色粗砂質土
2. 黒褐色砂質土
3. 茶褐色砂層
4. 淡灰色粘土
5. 青灰色砂に少量の黒色土混り
6. 茶褐色砂
7. 暗褐色粘質土に青灰色粘質土混り
青灰色粘土混り

SB－225 P－3



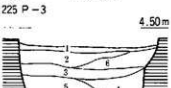
1. 茶褐色砂質土
2. 茶褐色粘質土
3. 灰白砂層
4. 暗褐色砂層
5. 茶褐色粗砂
6. 暗褐色粗砂
7. 茶褐色粘質土、砂混り

SB－225P－5



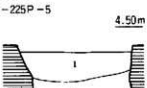
1. 暗褐色粘質土
2. 灰褐色粘砂
3. 暗褐色粘質土
4. 黒褐色粘質土
5. 暗褐色土と黄褐色粘砂の互層
6. 暗褐色粘質土に砂混り

SB－225 P－6



1. 暗褐色粘質十
2. 1と青灰色砂の混り
3. 黒褐色粘質土
4. 黒色粘質土に少量の青灰色砂質土が混る
5. 黒褐色粘質土と青灰色粘土の混合土
6. 2より暗い

SB－226 P－2



1. 灰褐色へ黒褐色砂質土
2. 暗褐色粘質土

SB－226 P－3

0 1m

Fig.57 掘立柱建物柱穴土層実測図 (1/40)

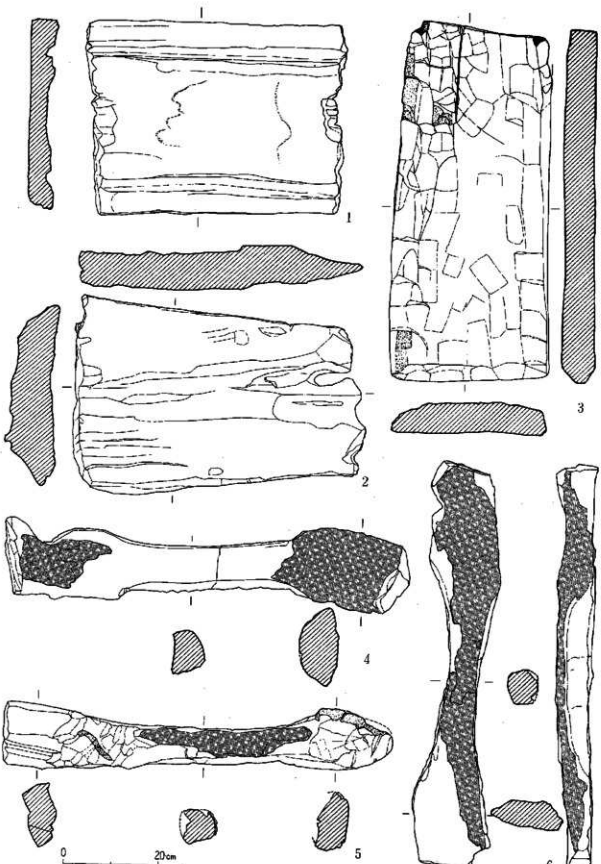


Fig.58 掘立柱建物礎板実測図(1) (1/8)

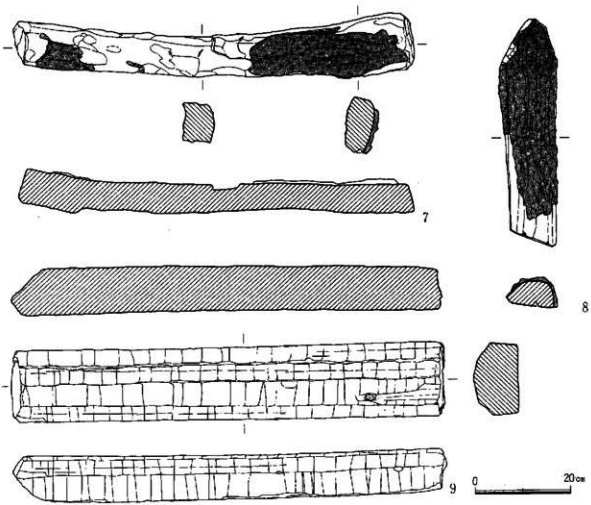


Fig.59　掘立柱建物礎板実測図（1/8）

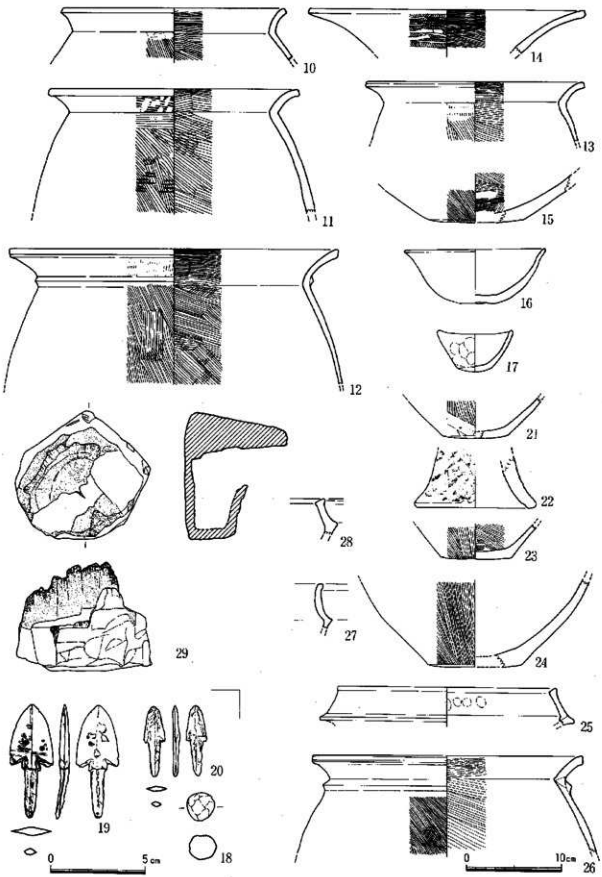


Fig.60　掘立柱建物出土遺物実測図（1/4・1/2）

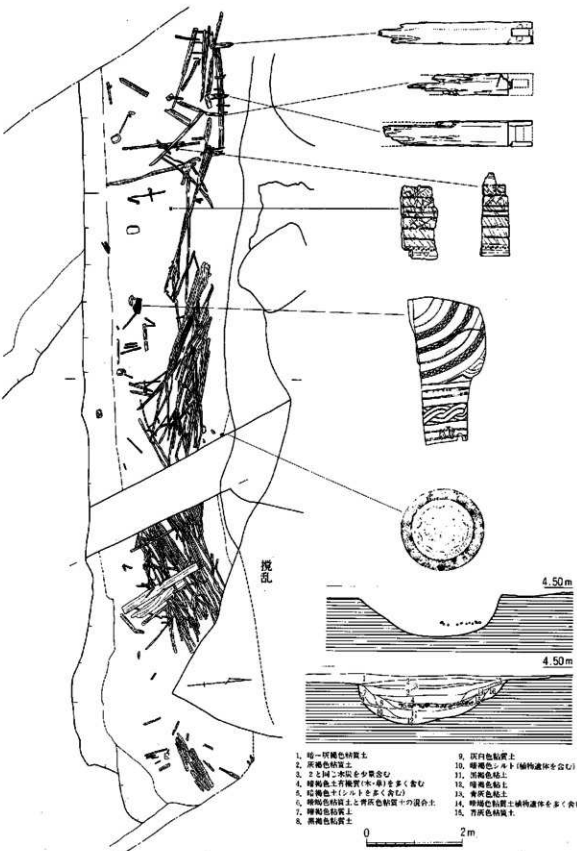


Fig.61　SD－002遺物出土状況実測図（1/80）

8）環濠の調査

4次調査で弥生時代後期の溝が確認でき、環濠の可能性が指摘されたが、調査範囲内では明確な答えは見出せなかった。今回の調査で南側は4次調査の溝（SD－002）と繋がり、北側にも同時期の溝（SD－221）が確認でき、直接には結び付かないが4次調査の溝と繋がり環濠になるものと考えられる。環濠全体を調査出来なかったが東西に長い楕円形で東西約200m、南北130m前後を呈するのではなかろうか。大部分は滑走路の下に拡がり、今回調査したのは環濠の西端にあたり、南北115m、東西40mを測り全体の1/6程度の面積であろう。環濠は幅4～5m、深さ1m前後、断面「U」字状を呈する。環濠の遺物出土状況は地点により大きく異なり4次調査の東半分は上層から土器が多く出土し、その下から大量の木製品が発見されている。5次調査の南端（SD－002）では上層には遺物をあまり含まず中層から流木や木製品が全体を覆うように出土する。さらに北端（SD－221）では上層から中層にかけ壺、甕、鉢形土器が投棄され下層から少量の木製品が出土している。環濠の外側には弥生時代前期の遺構は僅かに見られるが柱穴、竪穴住居跡などは認められない。

SD－002（Fig.61,PL.15、18、19）

調査区の南端を東西に横断する環濠の一部である。調査区を横断するため調査出来たのはほんの一部で長さは12mに過ぎなく大部分は調査区外、空港の滑走路の下に延びている。北側（環濠の内部）は二段に掘り込まれているように見えるが、この層は古墳時代の土器が含まれ調査区の南側全体を覆い、建築材等の木製品を含んでおり、当時湿地状の地形を呈していたと考えられ、環濠部は周辺より一段高くなり南側へ緩やかな傾斜を示す自然地形であろう。

濠は青灰色粘質土から掘り込まれ、中ほどから灰白色微砂層となる。幅約3m、深さ1m前後を測り、断面「U」字状を呈する。直線的に東へ延び、東端で僅かに曲線を描くがこの地点では掘り込み面から微砂層であるため湧水が多く壁面の崩壊が著しく攪乱もあり不明瞭で直線的に延びるものであろう。断面は内側はなだらかに外側は立上りが急となる。砂層まで掘り込まれた床面は中央部が丸く窪む。堆積している土層は1層－暗～灰褐色粘質土。この層は溝の埋没後に堆積した古墳時代の包含層である。2層－灰褐色粘質土。3層－灰褐色粘質土。2層より粘質が強く、上層には炭化物を含む。4、5層－暗褐色土で4層には植物遺体を多く含み、5層にはシルトを多く含んでいる。この層から下に木製品は出土し、中央部では径が5cm前後の枝を付けた自然木が横倒しの状態で出土している。6層－暗褐色粘質土と青灰色粘質土の混合土。7層－暗褐色粘質土。8層－黒褐色粘質土。9層－灰白色粘質土。10層－暗褐色シルト層。青灰色粘土層や、木の葉や枝等の植物遺体を多く含む。11層－黒褐色粘土。部分的で底が窪んでいる部分に堆積する。12層から15層は壁際に流れて堆積した土層である。

遺物は1～3層までは土器の破片が少量出土する。做製鏡は3層の下から出土している。溝の西側では木製品は少なく疎らな出土状態であるが、壁際に加工した棒材を数本並べ、それを3本の杭（後に大型組合せ式机の穂と判明）を打ち込み留めている護岸施設が1か所確認できた。中央より西に寄った位置の底面近くから木製短甲、その西から楯が2点出土している。中央より東にかけては自然木が横倒しになった状態で検出された。木の径は5cm前後で根の方を環濠の内側にして雑木が薙ぎ倒されたような状態で一面に検出された。西側には樹根もそのままで出土していることなどから環濠の内側に樹木が茂っていたのが強風により倒壊した可能性もある。鍬、机の足等がこの下から出土している。SD－221と異なり土器の出土は少なく、中層で自然木が多く出土している。下層からは多くの木製品

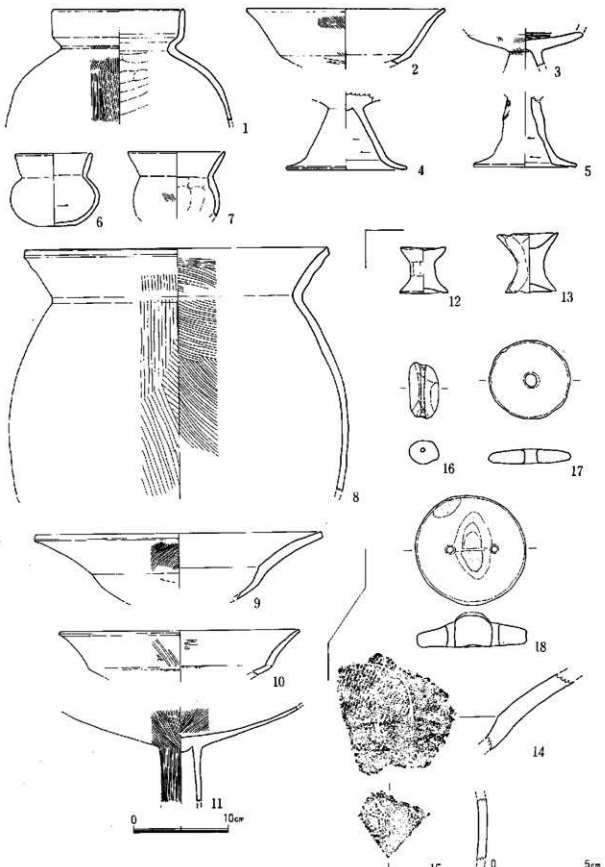


Fig.62　ＳＤ－002上層出土遺物実測図（１/４・１/２）

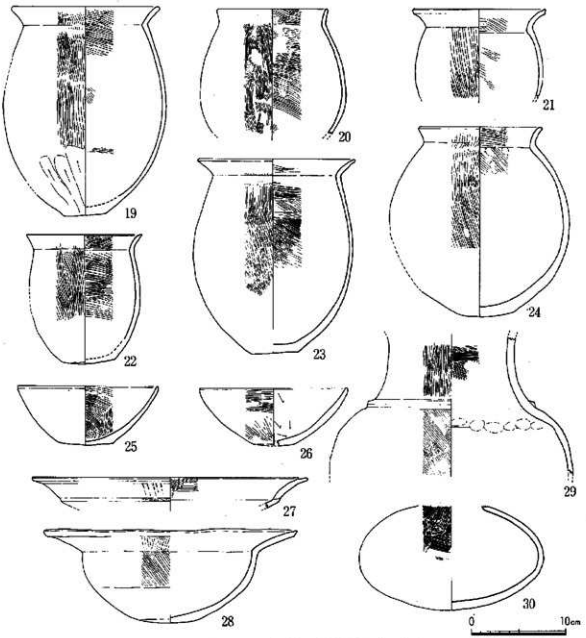


Fig.63　ＳＤ－002下層出土遺物実測図（1/4）

と少量の土器が観察できた。

出土土器・土製品（Fig.62、63,PL.36、37）

1～7、13～15は1層出土の土師器である。1は二重口縁の壺形土器で内面篦削り、外面は縦の刷毛目調整。丸い胴部に直立する口縁部となる。2～5は高坏形土器。坏の底部との境に稜をもち、口縁部は外反する。脚部は開き裾部が平坦になり、内面は篦削りで稜を有するのもある。6、7は小型丸底壺で偏球形の胴部に直線的な口縁部となる。13は小型の手捏土器で、外面に指おさえの痕がつく。14、15の外面には篦描き模様を描く絵画土器であるが小破片であり何であるか不明。12、16、17は2層出土。16は土錘。8～11は3層出土。8は大型の甕形土器の胴部から口縁部にかけての破片である。胴部外面には篦ナデ状の粗い研磨、口縁部はヨコナデ、内面は刷毛目調整のあとナデ調整である。口唇部はヨコナデし中央部が窪む。9は異形鉢形土器の口縁から体部の破片。丸い底部から大きく拡がる口縁となり、刷毛目調整が残る。10は土師器の高坏形土器で体部に稜をもち内面にも明瞭な段があ

Fig.64　SD－002出土倣製鏡実測図（2/3）

る。外面は真黒で黒色顔料か煤様なものを塗布しているかあるいは付着している。

19～30は4層以下の下層出土。弥生時代後期後半～終末期のものである。19、23は僅かに丸味を帯びた平底で卵形の長胴に外反する短い口縁部となる甕形土器である。外面は縦の、内面は斜の刷毛目調整で、口縁部はヨコナデし端部を丸く収め、19の外底近くは篦ナデをしている。20～22は小型の甕形土器。22は丸味を帯びた平底で湾曲する胴部から外に開く口縁部となる。口唇部上端をナデて、平坦にし内傾させる。20は直立気味、21は大きく外反する口縁部となる。底部は22と同様な形態であろう。24は凸レンズ状の底部で球形の胴部に外反する短い口縁部となる。27は高坏形土器の口縁部。体部中位で稜をもち屈曲し端部はヨコナデにより口唇部の内側を窪ませ、内外面とも粗い暗文状の筮研磨を施す。28は異形の鉢、29、30は壺形土器である。

倣製鏡（Fig.64,PL.1、2）

中央ベルトの3層の下層から出土した。小型倣製の内行花文鏡で鏡面を表にして出土した。径9.1cmで完存し、小型倣製鏡の割には銅質が良く、掘り出した時には地下水の鉄分の影響もあり赤銅色を呈し保存状態も良好で140.5gの重量がある。鈕は1.3cmの円形で、高さ4.5mm、鈕孔は横にやや拡がる楕円形で長径3mmを測り、孔口に向けて拡がりを見せる。鈕の外側には楕円形の円圏が巡るが、この孔口は湯回りの悪さから圏線、模様とも消失している。円圏と内行花文帯の間には四乳を配しその間に渦巻文を描き、相対する位置に動物をモチーフにした絵画文を描く。内行花文帯は10弧でその外側に櫛歯文帯を巡らし幅1.3cmの素文平縁となる。鏡面の反りは1～2mmである。

木製品

短甲（Fig.65－1,PL.1、2）

環濠の中央部西寄りの底面近くから出土した。中央部から折損し、後胴の右半分と思われる。製作時には体の線に即して丸味を持つように作られていたと考えられるが、土圧のためか歪みや割れが認められ扁平な状態である。堅い加工の困難な柿材を加工し表面には茶褐色の薄い塗膜を認めるが微量であり顔料の特定は出来なかった。裏面は肩の突起部以外は白木のままである。全長33.7cm、肩部残存幅14.8cm、脇下11.6cm、胴部下端9.3cm、厚さは胴部下端で6mm、肩の上端で1.2cmを測る。襟口は僅かに窪む程度で直線的となり、肩がなだらかに下がり肩口は丸く曲線を描き脇下ですぼまり、幅を狭めながら胴部へと至る。表面には繊細な模様が線刻されている。全体に文様の割付線が観察でき肩から背中にかけ段、鋸歯文、連続三角文をもしくは菱形文を同心円状に巡らせる。襟口を巡るように1mm前後の段を持ち、その下2cmに沈線を刻みその上に小さな鋸歯文を連続して巡らせる。その下には二重の連続三角文、鋸歯文、さらにその下に連続三角文を配する。連続三角文は線刻でなく浮き彫り風で立体感を持たせている。脇下には直弧文、波状文を線刻している。その下に沈線を刻んで上下の模様帯を区分する。胴部中央には沈線に上下を囲まれた幅1cm弱の弧帯文を描き、その上下に二条の孔列を巡らせ、その部分には顔料が塗布されていない。孔は直径約2mmで、その間隔は同一ではなく長短ある

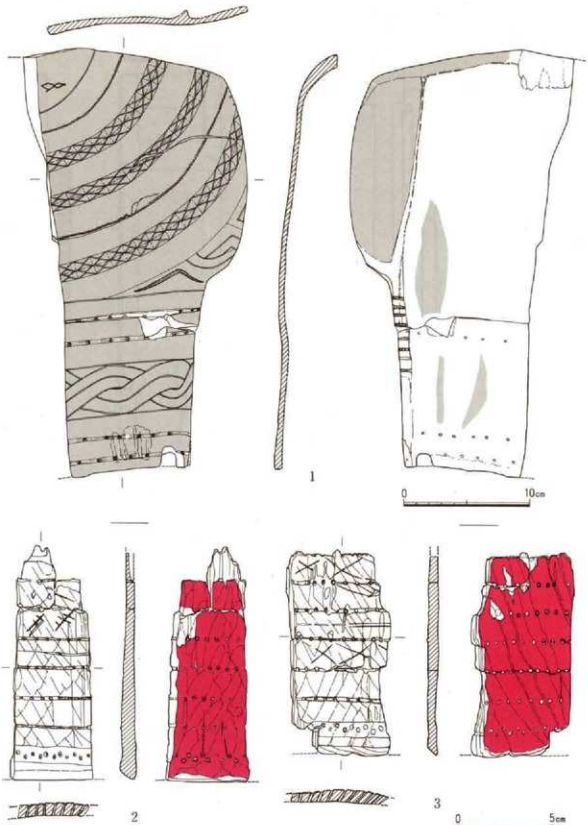


Fig.65　SD−002出土木製短甲及び補実測図（1/3・1/2）

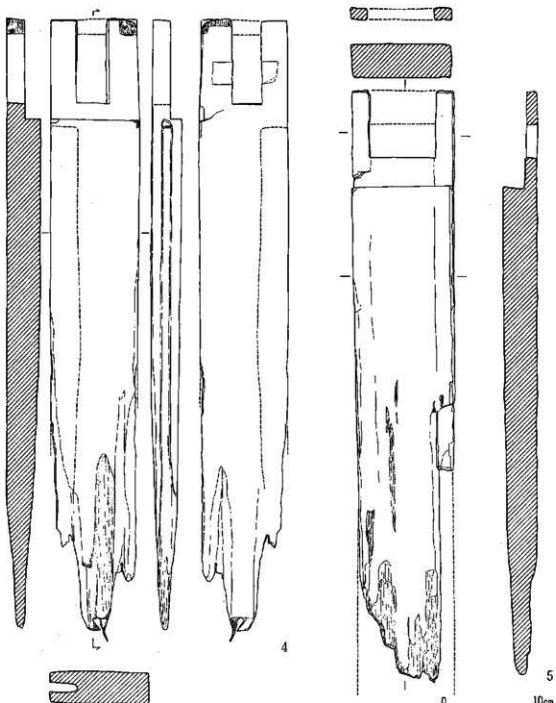


Fig.66　SD－002出土机実測図（1/4）

が1.5cm前後を計るのが多い。胴部の側面には前胴との結合のための小孔8個を観察でき、破損部も含めると10数個になろう。内面は肩の袖に寄った位置から脇の下にかけ縦位置に段を設け短甲の強度を高めるとともに、行動し易いような工夫を凝らしている。

楯（Fig.65－2、3,PL.2、3）

漆の西寄りの位置で底面の砂混じりの土層から出土した小破片である。下端部は斜めに面取りし、全面に孔を穿ちその孔に紐を巡らしている。全体の規模、形状は不明である。モミ材を用いた板材で表面に向かって僅かに湾曲する。表面に黒漆を厚く塗布し、横方向に刷毛目が観察でき、削りの跡と

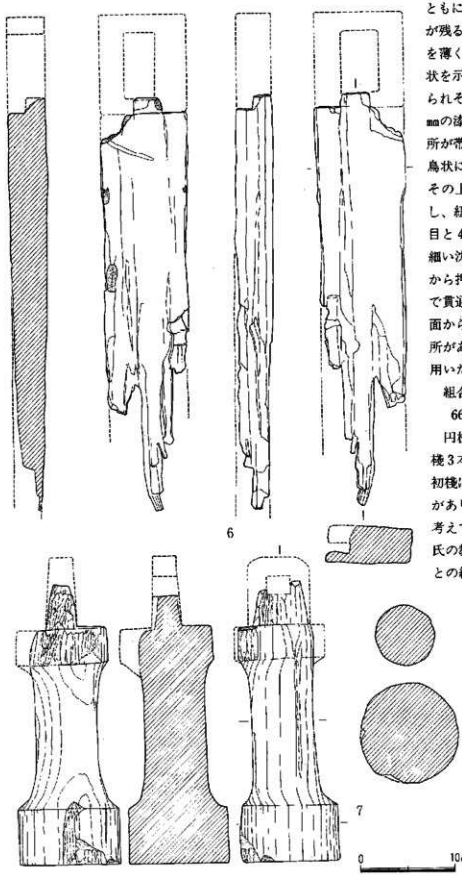


Fig.67　SD−002出土机実測図（1/4）

ともに菱形状の模様（傷？）が残る。裏面には赤色顔料を薄く塗布し、年輪が模様状を示す。下端は斜めに削られその上5㎜の位置に幅9㎜の漆を塗布していない個所が帯状に残り、そこに千鳥状に穿孔を行う。さらにその上には1.5㎝幅で穿孔し、紐を通している。3段目と4段目の間には二条の細い沈線を刻む。紐は表面から押し込むだけで裏面まで貫通していない。孔は表面から穿孔し平面が角張る所があり、四角な穿孔具を用いたものであろう。

組合せ式大型机（Fig. 66,67,68−8、PL.42）

円柱形の脚2本、縦、横桟3本が出土している。当初桟は桝孔や直角な面取りがあり建築材ではないかと考えていたが、宮本長二郎氏の教示により机であろうとの結論に達した。4次調査の机のように組み合わされた状態で出土した訳ではなく推測の域を脱し得ない。桟は土留めの杭として転用されていたため地表の上になる部分は腐朽している。4、6は片方の側面に天板を差し込む桝孔を持ち、長辺になろう。幅9.4㎝、厚さ3.2

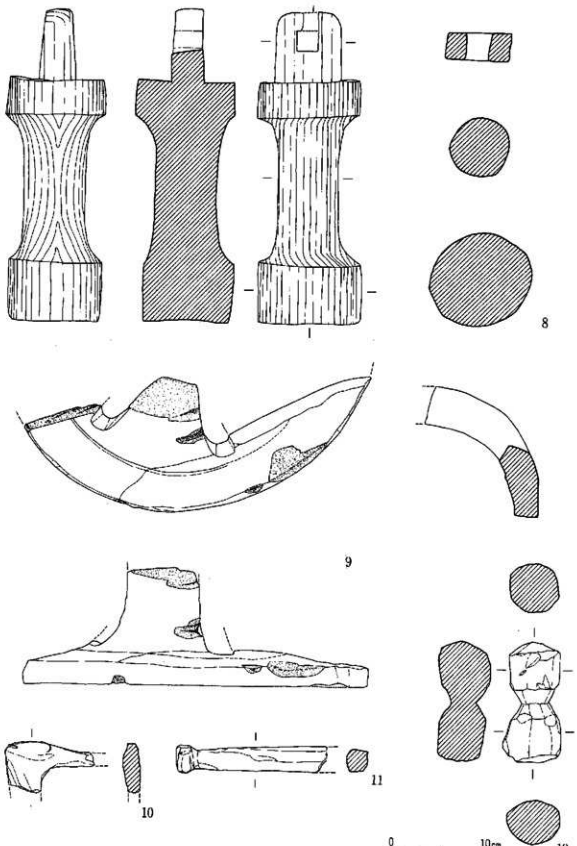


Fig.68　SD－002出土木器実測図（1/4）

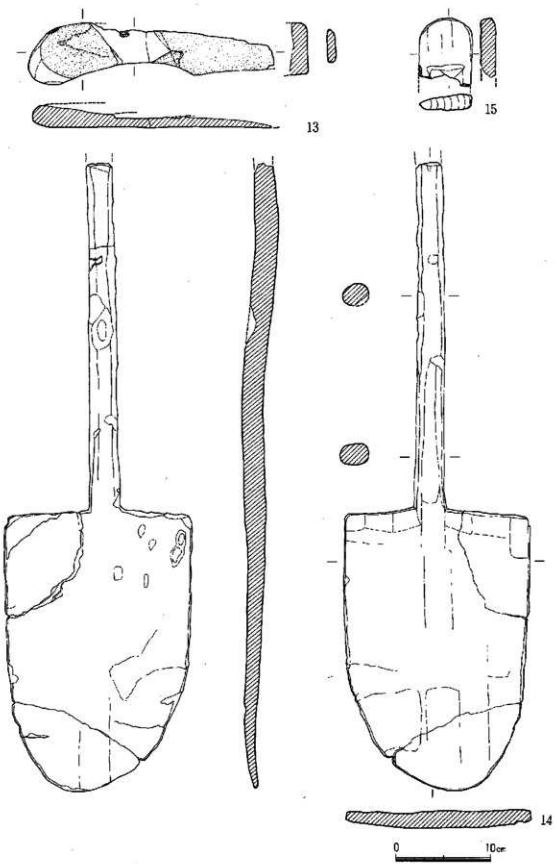


Fig.69　SD－002出土木器実測図（1/4）

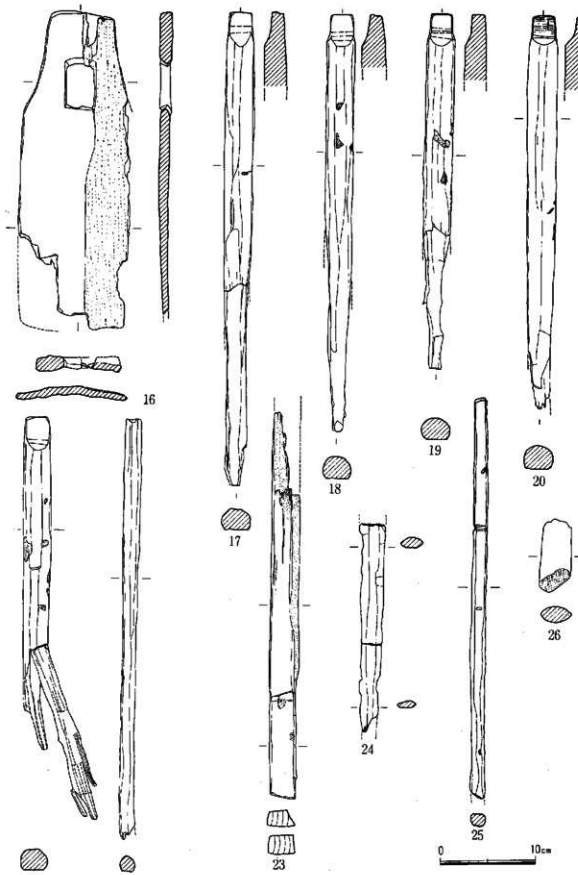


Fig.70　SD−002出土木器実測図（1/4）

cm、現存長は4が64.9cm、6は43.8cmを計る。各面とも丁寧な加工を施した様で表面は平滑である。一端に幅3.1cm、長さ7.3cmの枘穴を開け、表面には物が重なっていたと思える変色していない痕跡を留め木栓を用いていたと考えられる。裏面は端部から10.5cmの位置で直角な抉り込みを入れ1.9cmの厚さとし縦桟と組み合わせる。この抉り込みは直角で鋸を使用したとも思えるが定かではない。一方の側面には幅1cm弱、奥行2.6cm前後の抉り込みを入れ天板を差し込んだものであろう。6は痛みが激しく遺存状態も悪く、直角な欠き込みから先及び側面の抉り上部を欠損する。5は3.3cm×6.6cmと横長の枘孔を穿つ。7、8は脚である。8は枘孔の一部を欠損するがほぼ完形品で上、下端部は楕円形で長径10.8cmを計り、脚の中央部はなだらかな曲線を描く抉りを入れて細め径6.3cmとなる。上面にはソケット部を作り出す。幅2.9cm、厚さ2.9cm、長さ7.9cmの断面長方形で、ほぼ中央部に2.3cmの方形孔を穿つ。側面の上端を面取りし曲線を描く。枘孔と脚の上縁の丁度中間の位置に圧痕が残る。底部は中央部を窪ませ脚の安定を計っている。7もほぼ同様な形態であるが上半部を欠損する。ソケット部は下部が幅広くなり台形である。下端径10.6cm、残存長29.8cmを計り、天板を楔で固定すると机の高さは30cm前後になろう。2点とも杉材で木目を活かした鮮麗な加工が伺える。

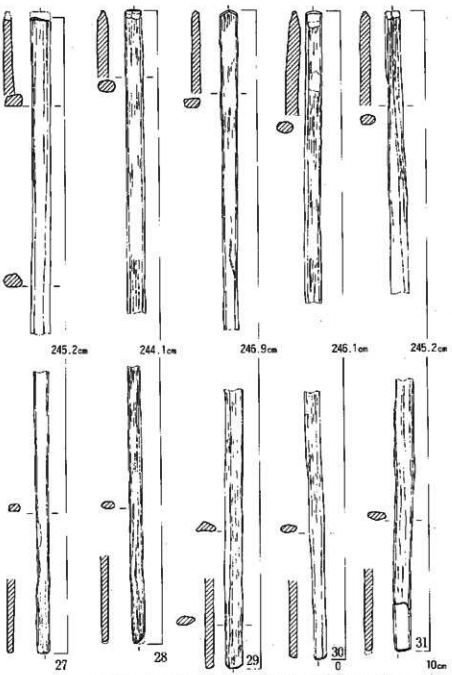


Fig.71　ＳＤ－002出土木器実測図（1/4）

容器（Fig.68－9、PL43）

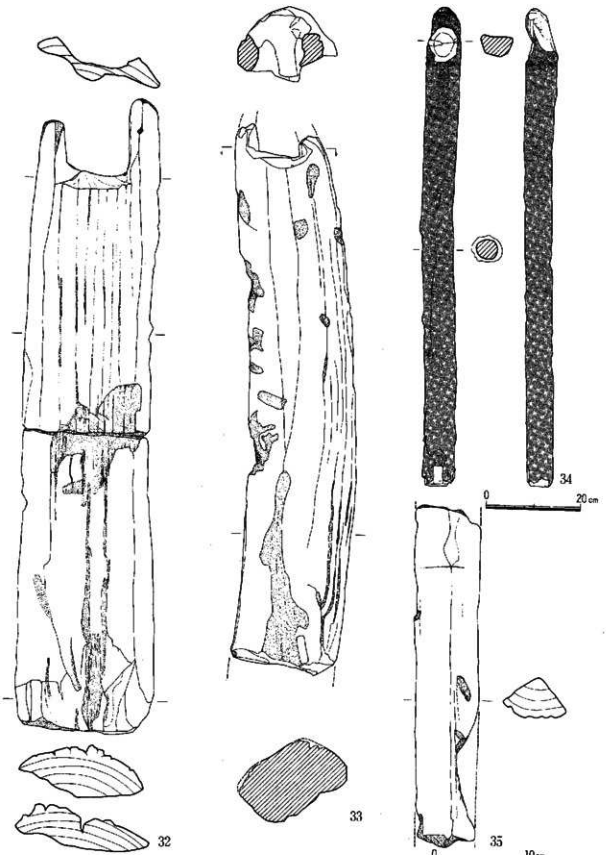


Fig.72　SD－002出土木器実測図（1/4・1/8）

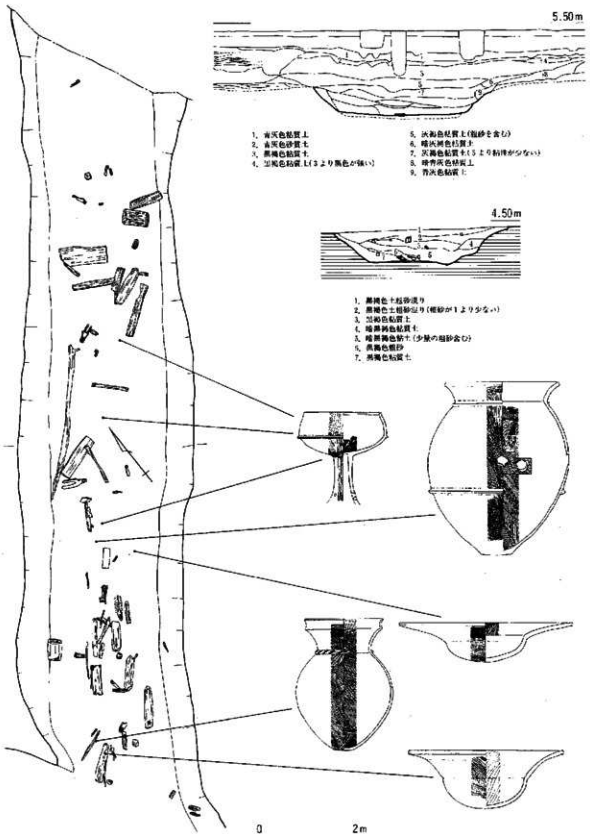


Fig.73　SD－221遺構全体実測図（1/80）

高坏の脚であろう。平面はやや楕円形でU字状の透しをもち盤の脚の可能性もある。裾が薄く坏部が厚く4.5cmを計る。内外面とも轆轤を用いたようなきれいな削りである。裾には鋭利な段を削り出す。杉材使用。

加工具（Fig.68－10～12,69－13,PL.43）

10は鉄斧の柄と思われるが表面の痛みが激しく全体は不明。枝を柄とし鉄斧装着部を長方形に整える。11も柄であろう。粗い削りで基部を太く削り出す。13は鑿の柄の先端部である。装着部の幅は約7cmで内側を弧状に抉り込む。12は編鍬で完形品である。丸木を利用し中ほどを両側から削り込み、両端も面取りする。

農具（Fig.69,70－14～16,PL.43）

14は鋤で把手部を欠損する。柄は断面楕円形で身は「U」字形をなし刃部を尖らす。表は平坦で裏面を丸く削る。刃部幅19.4cm、長さ29.7cm、全長66.4cmを計り、柄の断面は多面体である。15は鍬の頭部で大部分を欠損する。頭部は丸く柄孔は長方形。16は平鍬で長方形の柄孔で隆起はない。

棒状製品（Fig.70,71－17～31,PL.44）

17～21は断面が半円形を呈する杉材で先端部を細く削りだし何かに挿入するよう加工を施している。側面、裏面は平らに面取りし表面は丸く仕上げる。22、25は多面体の棒状品で一端を欠損する。25は直角に刻みを入れる。26は断面楕円形で表面も滑らかな加工が施され柄になろう。28～31は机の桟(杭)に留められ、土留めの横木として利用されていた杉材。。幅2cm弱、厚さ1.2cm前後で、長さ2.46mと細長い。片方の先端は中央部より細く削り込み、一方の端は細く厚さも減じている。割材を加工するためか断面は丸味をもつ多面体で部分により角張ったりと不統一である。単独で用いるには脆弱で加工している端部を差し込んで固定していたもので整材の可能性がある。

建築材（Fig.72,PL.44）

32、33は片面に自然面を残す割材の上端に「コ」の字の抉り込を入れる柱材であろうか。32は現存長107cm、幅20cmで横断面は扁型を示す。33はは歪んだ木材を使用し、抉りの下からゆるやかな曲線を描く。上、下を欠損し全長は不明。34は垂木と考えられる。丸木をそのまま利用し根元に近い先端部の一方に「く」の字状に抉り、反対の面を平らに削る。先端部は尖り気味に切断する。一端は折損し全長は不明である。

ＳＤ－221（Fig.73,PL.20.21）

調査区の北端を南西から北東に横断する環濠の一部である。4次調査のSD002と同一の溝であろう。調査区を横断すること及び南西側をＳＤ－220に切られるので調査出来たのはほんの一部で長さは16mに過ぎなく大部分は調査区外、空港の滑走路の下に延びている。ほぼ直線的で幅約3.8m前後で深さは0.8mを測る。断面は逆台形で傾斜面には崩落による凹凸がある。基盤層は掘り込み面から50cm位下から砂層となるため壁面は緩やかな傾斜を示し床面はほぼ平坦である。護岸には特別な施設はなく素掘りのままである。堆積している土層は1層－黒褐色土で粗砂が多く混じる。2層－黒褐色土で1層より粗砂が少ない。この層より完形品に近い土器が集中して出土している。3層－黒褐色粘質土。溝の中央部だけの堆積。4層－暗黒褐色粘質土。5層－暗黒褐色粘土、少量の粗砂を含む。6層－暗黒褐色砂層。7層－黒褐色粘質土。環濠の内側は外側より約30cm高くなり、掘立柱建物など遺構が多く見られるが、環濠の外側はピットなども極端に少なくなり居住に不適であったことが判る。

1～3層までは完形に近い土器を中心に纏まりをもって出土し下層からは木製品が多く出土し、土器は破片が多く出土する。しかしながら上層と下層の間に間層はなく粗密は見られるが連続した出土

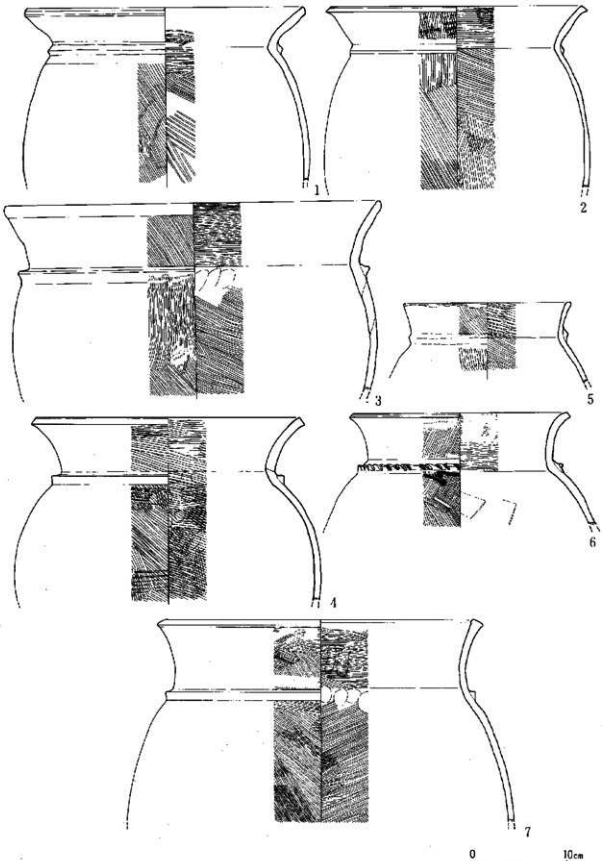


Fig.74　ＳＤ－221出土土器実測図(1)（1/4）

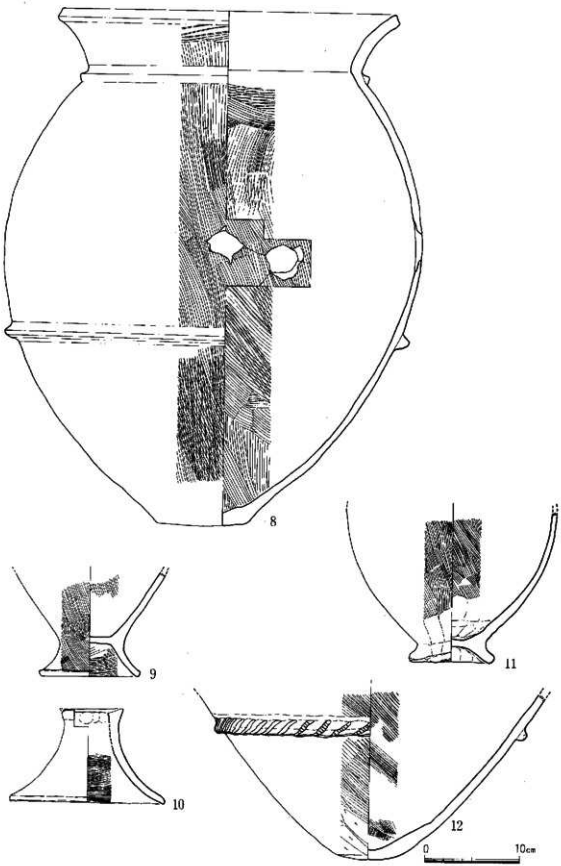


Fig.75　SD−221出土土器実測図(2)（1/4）

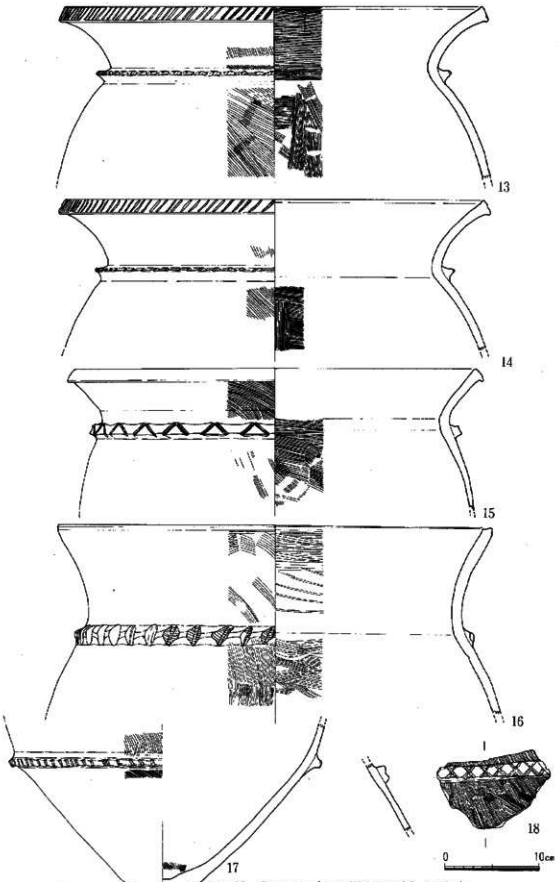


Fig.76　SD−221出土土器実測図(3)（1/4）

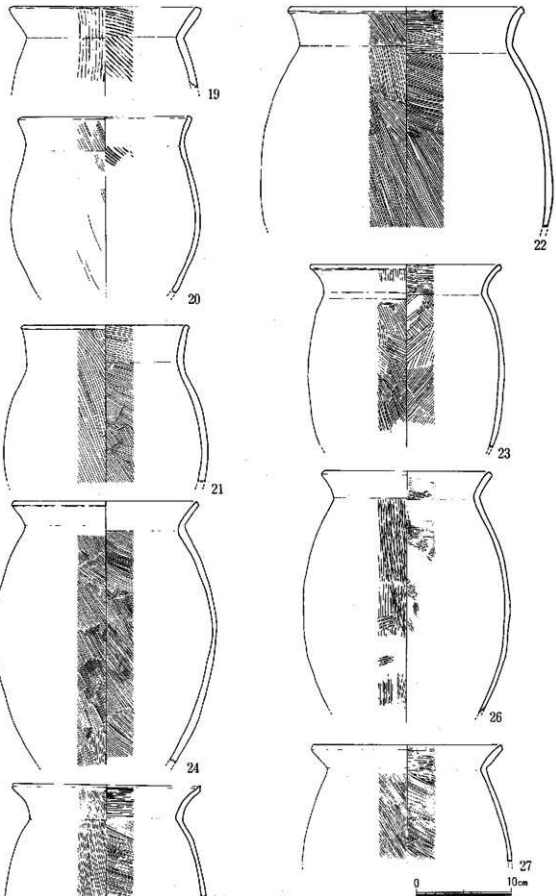


Fig.77　SD−221出土土器実測図(4)（1/4）

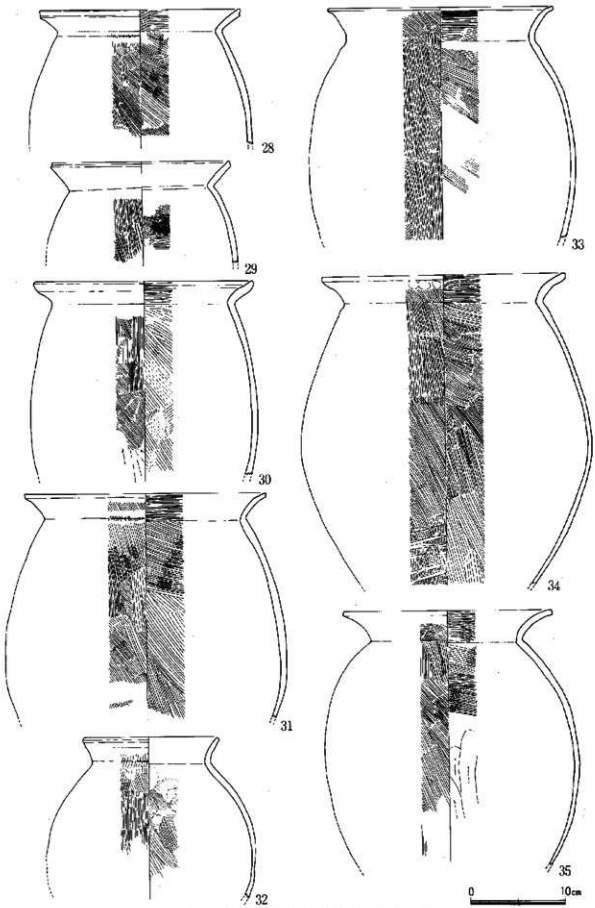


Fig.78　SD－221出土土器実測図(5)（1/4）

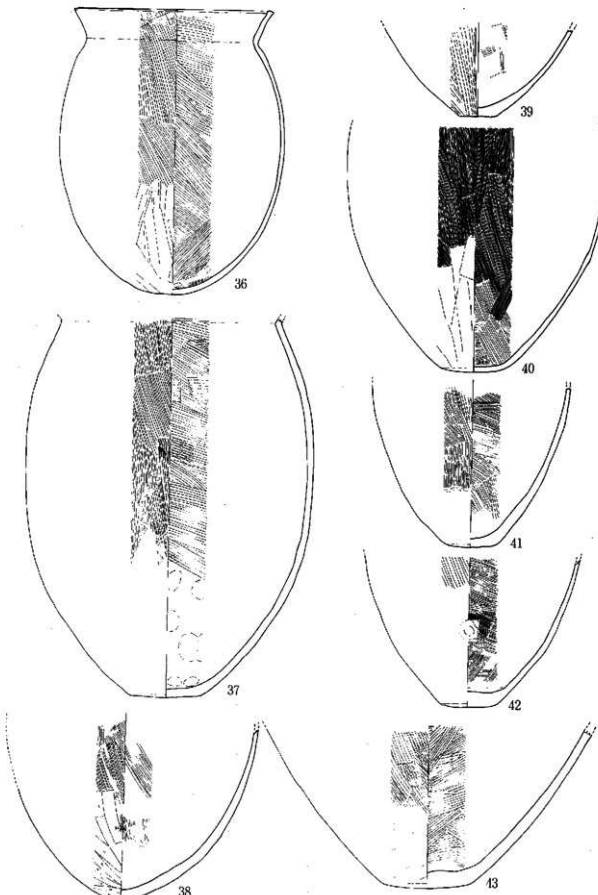


Fig.79　SD－221出土土器実測図(6)（1/4）

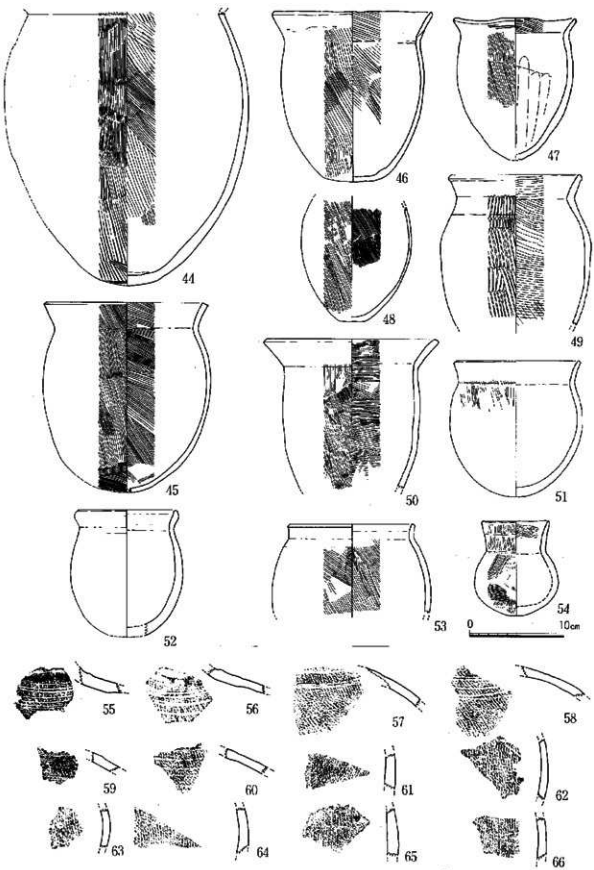


Fig.80　SD－221出土土器実測図(7)（1/4・1/3）

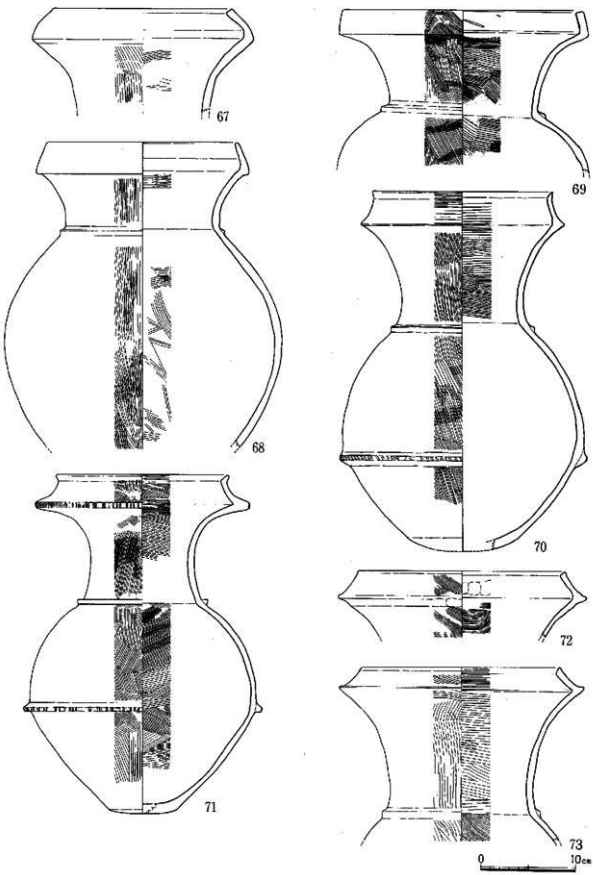


Fig.81. SD−221出土土器実測図(8)（1/4）

状態である。溝の中では北側は土器の量も少なく、床面に接して木製遺物が散在的に認められる。中央部から南側にかけては上層に多くの土器が投棄され、下層からは木製品が出土している。

出土土器（Fig.74～88）

甕形土器（Fig.74～80,PL.31）

甕形土器A類(1～8,13～16)　長胴で口縁部が「く」の字状に屈曲し、屈曲部に突帯を貼付る形態である。口縁部の外反が強いものと緩やかなタイプの二種に大別できる。器面調整は内外面とも刷毛目調整で口縁部及び突帯部をヨコナデしている。1は屈曲が大きく直線的に開く口縁部で端部は丸く収まる。2、4、6は同様に口縁部の外反が大きく口縁端部が肥厚気味となり角張る。8はほぼ完形品で口径35.1cm、器高54.7cmを測り胴部に焼成後の穿孔をもつ。最大径を胴部中位に取り、胴部下半及び頸部に突帯を貼付る。底部は丸味を帯びた平底で口縁部は強く外反し端部は角張る。3は口縁が大きく胴部が短い形態であろう。口唇端部は丸くなり外反は小さい。5も同様な口縁部であるが胴部が大きく膨らむ。13～16は頸部の突帯に刻みを施す。13、14は肥厚する口縁部の平坦面に沈線状の刻みをいれる。15は台形の突帯に山形に刻みをもつ。口縁の外反は14と比べて弱い。16は口縁部の立上りが緩やかで口縁部の上面を窪ませる。

甕形土器B(19～34)　口縁部が「く」の字状に屈曲するが口縁部が直線的に開くもの(1類)、口縁部が直立気味に立ち上がるもの(2類)、緩やかな外反を示し、外傾が少ないもの(3類)、口縁部が強く外傾するもの(4類)、口縁部が大きく外反するもの(5類)に大別できる。長い膨らみの少ない胴部で丸底化する底部となろう。内外面とも刷毛目調整で口縁部をヨコナデしている。19、27～29は1類にあたる。19は内外面とも粗い刷毛目調整で胴部の膨らみがなく直線的となる。28、29は口縁部の平坦面を窪ませ上端を細く尖らせる手法が見られる。頸部近くの胴部は膨らみをもつ。20～22は2類。頸部が僅かに縊れる程度である。20の胴部外面は箆で調整している。口縁端部は角張る。23～26は3類。25の口縁部は上端を尖らせ、その下を窪ませて内面には僅かな段をもつ。胴部は刷毛目調整で口縁部をヨコナデ調整している。30は4類の土器である。膨らみのない長胴に強く外傾させる口縁で端部を上方に緩やかな曲線を描く。31、33、34は5類で胴部の膨らみが大きく、口縁部の外反が大きく、強く外傾する。34は端部を肥厚させ31、33は尖り気味となる。34の胴部下半にはタタキのあとが僅かに残る。

甕形土器C類(35、36)　35の器形は5類とほぼ同じであるが口縁部の外反はさらに大きくなり、胴部は球形に近く、内面の底部から胴部中位までを箆削りしている。底部は丸底となろう。36は丸底で楕円形の胴部に僅かに外傾し、端部を肥厚させ上面の中央部を窪ませる。胴部外面の底部近くは削りに近い箆ナデをする。

甕形土器底部(37～44)　A類～C類の甕形土器の底部である。平底から丸底への過渡期の様相を示す。胴部は内外面とも刷毛目調整で、外面の底部近くを箆ナデ調整するのも見受けられる。44は完全に丸底となるが内外面とも刷毛目調整の手法を留める。

小型甕形土器(45～53、145、146)　45は胴部と底部を一部欠損するがほぼ完形品で口径17.5cm、器高20.2cmを計る。底部は丸底で胴部が膨らみ、頸部がすぼまり直線的に開く口縁部となる。端部は角張る。内外面とも粗い刷毛目調整。46は丸味を帯びた平底で、頸部は僅かに縊れ口縁部が大きく最大径となる。50も同様な形態である。47は底部を焼成前に穿孔する甑である。尖底に近い底部で内面の胴部にかけ箆削り状の強い指ナデをおこなう。51～53は小壺ともとれる。52はナデ調整で口縁部外面に緩やかな稜をもつ。53は刷毛目調整で短く直立する口縁部となる。146はヨコナデにより口縁部外面を窪ませる。口縁部は内外面ともヨコナデ、胴部は刷毛目調整で内面の底部近くは箆削り状の強い箆ナデである。

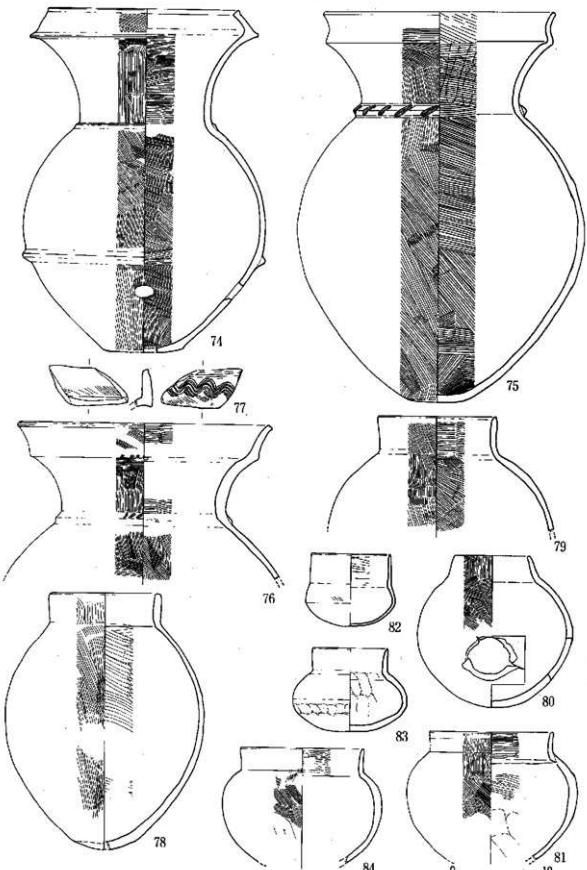


Fig.82　SD−221出土土器実測図(9)（1/4）

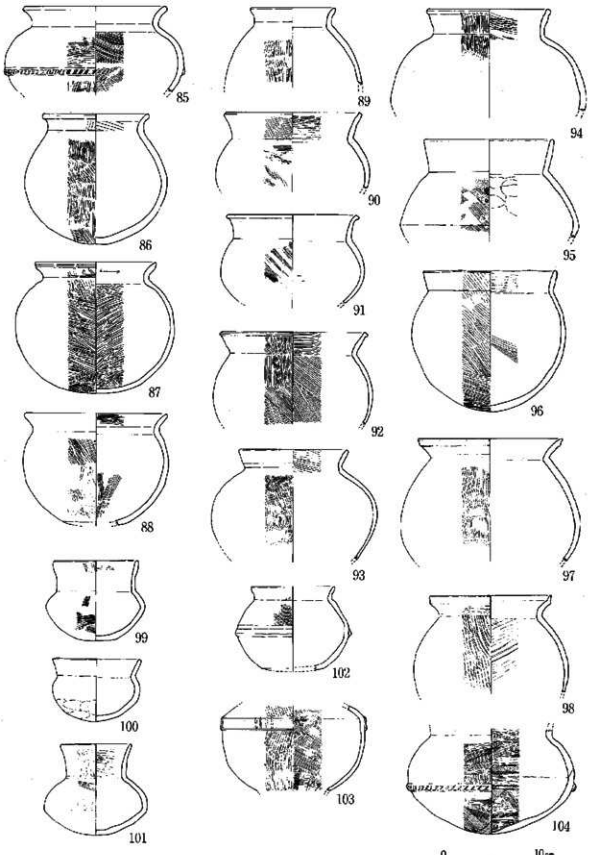


Fig.83　SD−221出土土器実測図(10)（1/4）

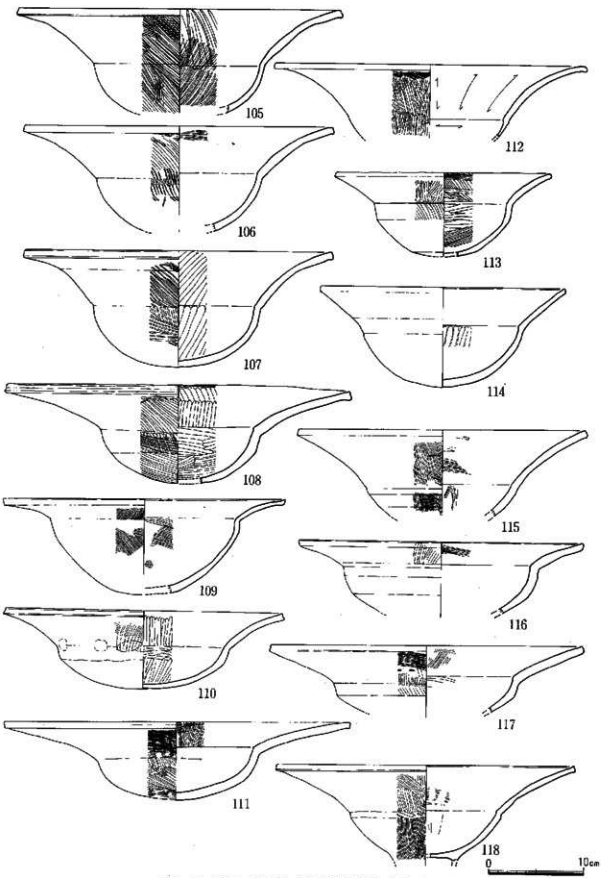


Fig.84　SD−221出土土器実測図(11)（1/4）

壺形土器（Fig.80～83）

縄席文土器(55～66,PL.31)　壺形土器の頸部から胴部で数個体の破片であろう。胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好で灰褐色ないし暗茶褐色を呈する。頸部の際から全面に縄席文を施し沈線を巡らしている。内面は丁寧な研磨状のナデにより平滑になる。55、56は頸部の立ち上がる部分である。頸部の縄席文はナデ消され、その下に縄席文の上から筆により浅く沈線を巡らせる。56は1回転以上して線が重複し凹線状を呈する。58～60は肩部の破片で同様な沈線を巡らす。61～66は胴部の破片で沈線は認められない。以上のことから器形は頸部が大きくすぼまり、肩が張り、その部分に沈線を数条巡らし、胴部には縄席文だけの球形に近い形態であると考えられる。

複合口縁壺A類(67～69、77)　頸部に三角突帯を貼り付け、口縁部の袋部から内湾して端部にいたる。67は袋部の外面が丸味を帯び緩やかな稜をもち、口縁部の内傾も強い。68、69は外面に明瞭な稜を有し僅かに内湾、内傾する。69の口縁部には1か所だけ長さ11cmに渡り波状文を刷毛目の上から描く。波状文は刷毛目工具で施文し、その幅1cm弱で7条の刷毛目が認められる。77も口縁部外面に小さな波状文を描く。

複合口縁壺B類(70～74.PL.32)　72～74は口縁部が逆「く」の字状となり、外面に稜ないし面をもつ。74はほぼ完形品で丸味を帯びた平底で、胴部下半に断面が台形、頸部に三角突帯を貼り付ける。頸部は大きく外反して開き、口縁部は内傾する。内外面とも全体に刷毛目調整を行い、胴部突帯の下に焼成後の穿孔を施す。70、71は一層底部の丸底化が進み、口縁端部が外反する。胴部下半に刻み目突帯をもち、71は口縁部下外面の平坦面に刻みを巡らす。

複合口縁壺C類(75、76.PL.32)　頸部の径が大きくなり、口縁下に稜をもち端部が外反し朝顔状に開く形態である。75は口縁部が外反してほぼ直立し、頸部には三角突帯をもつ。刷毛目工具による刻みは粗く斜めに刻む。底部には小さな平坦な面をもつ不安定な丸底である。76は口縁部が大きく外に開く。

直口壺(78、79)　卵形の胴部に短く直立する口縁部となる。底部は丸底で最大部を胴部中位にとる。内面は粗い刷毛目調整、外面は細い縦の刷毛目調整である。79は胴部の丸味が強く、口縁端部が尖る。

小型壺(80～104,PL.32,33)　80は口縁部が内傾する壺で胴部に焼成後の穿孔が見られる。81～84は直口壺で偏球形の胴部に短く直立する口縁部となる。口縁部内面は横、外面は縦、斜めの刷毛目調整である。内面には指ナデのあとが残るのもある。85～96は口縁部が短く外反する形態である。85は偏球形の胴部で胴部下半に刻み目突帯を巡らせる。87、97、98は口唇上端部を尖らせ外に面を形成し中央部をナデにより窪ませている。胴部は内外面とも斜めの刷毛目調整。87は箆研磨を行う。99～101は小型丸底壺である。器壁は薄く造られ尖り気味の底部で刷毛目調整の後ナデ調整を加える。102は胴部に小さな突帯、104は下半に刻み目突帯を有する。103は外来土器である。肩部に稜をもちその直下に小さな突帯を貼り付け、稜線との間に縦に四条の貼り付け文が三箇所見られ全周では5ヶ所に貼付たものであろう。外面は丁寧な研磨で内面は刷毛目調整の後ナデ調整を行う。胎土には砂粒を含まず他の土器と比較して著しく精良である。外面は明橙色、内面は暗灰色である。

鉢形土器（Fig.84、85,PL.33、34）

鉢形土器A類(105～117)　丸い椀型の体部に朝顔状に大きく外反する鍔状の口縁部となる異形の鉢形土器である。最も大きい108は口径36.6cm、器高10.4cmを計る。器壁が厚く、口唇端部は肥厚気味となり中央部が窪む。内外面とも刷毛目調整の後箆研磨を行う。口縁が大きく発達するものと普通の鉢よりやゝ大きい形態の二種に分けられる。同様な器形で脚を付け高坏形土器とする118、148等もある。

鉢形土器B類(119～125)　小さな平底から内湾して開き口縁部となる。外面は刷毛目、内面はナデ

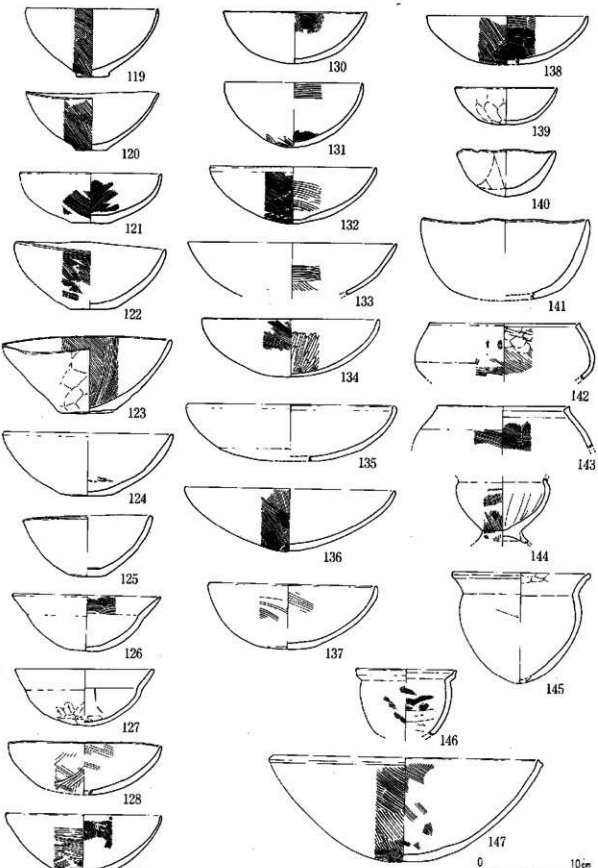


Fig.85　SD−221出土土器実測図(12)（1/4）

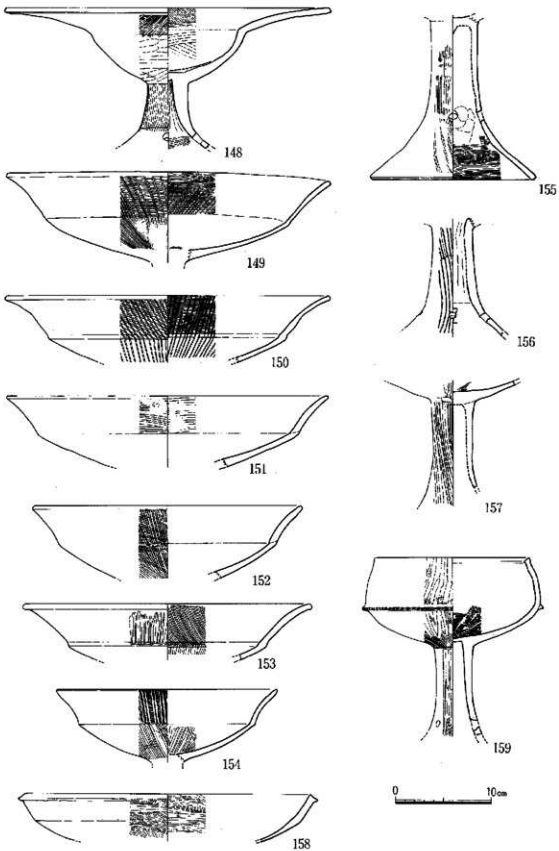


Fig.86　SD−221出土土器実測図(13)（1/4）

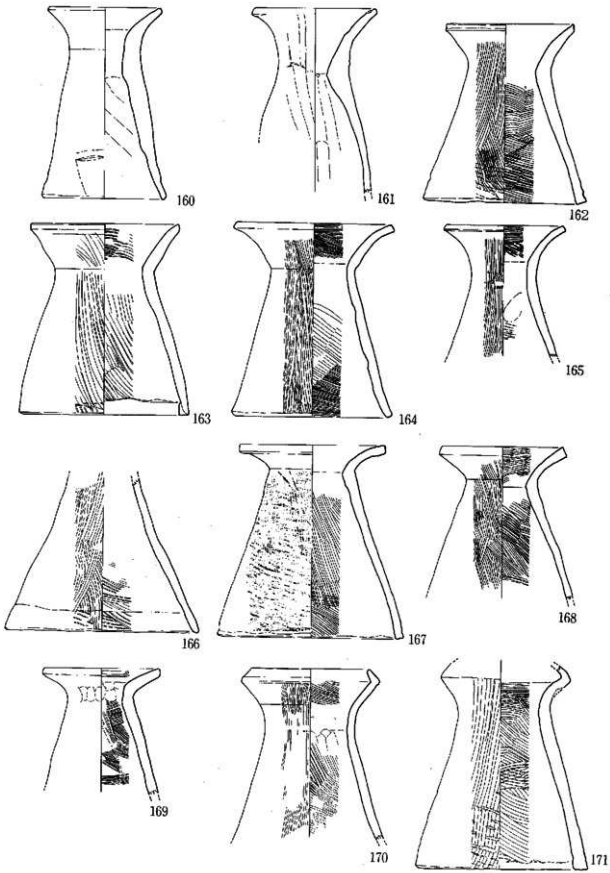


Fig.87　SD−221出土土器実測図(14)（1/4）

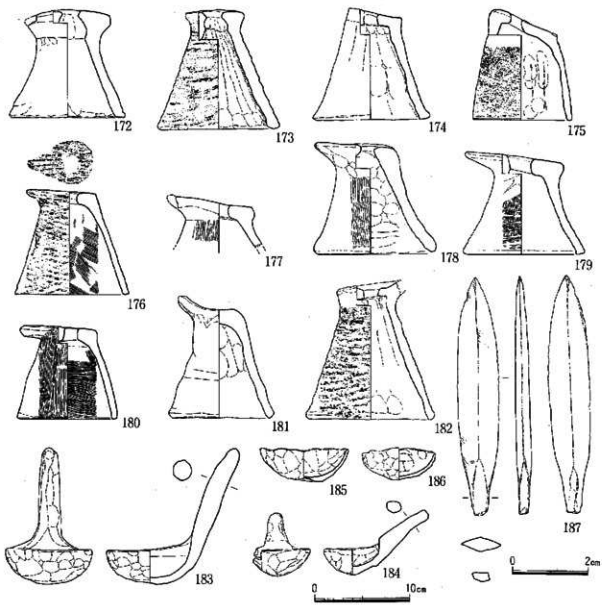


Fig.88　SD−221出土遺物実測図（1/4・1/1）

調整が多いが、内面も刷毛目調整のままのも見られる。123は歪な土器で底部には凹凸があり、外面には指跡が残り、内面は刷毛目調整である。122、125の底部は丸味をもつ。

鉢形土器C類(128～141)　丸底から湾曲して口縁部となる。内外面とも刷毛目調整の後ナデ調整を行う。134などは内面を研磨する。139、140は小型品で外面に指跡が残る。

その他の鉢形土器(126、127、144)　126は内湾する体部上半で直線的に開く口縁部となる。127の外底は篦削りである。144は脚付きの鉢で口縁部が外反するものであろう。

高坏形土器 (Fig.84-118,86,PL.35)

高坏形土器A類(118、148)　鉢形土器A類土器に脚を付けた形態である。筒部は短く裾が大きく開くと思われる。脚部には焼成前の穿孔が4ヶ所見られる。坏部は刷毛目調整の後篦研磨し、部分的に刷毛目が残る。

高坏形土器B類(149～157)　坏部中位に稜線をもち、口縁部が外反する形態である。刷毛目の後研磨を行い暗紋となるのもある。154は口径が他のより小さく刷毛目の上から粗い縦方向の研磨をしてい

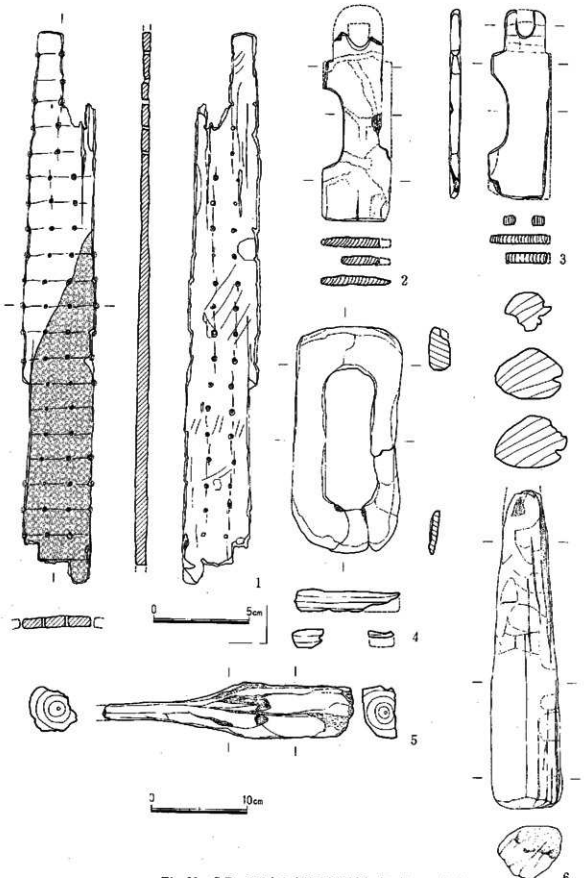


Fig.89　SD−221出土木器実測図(1)（1/2・1/4）

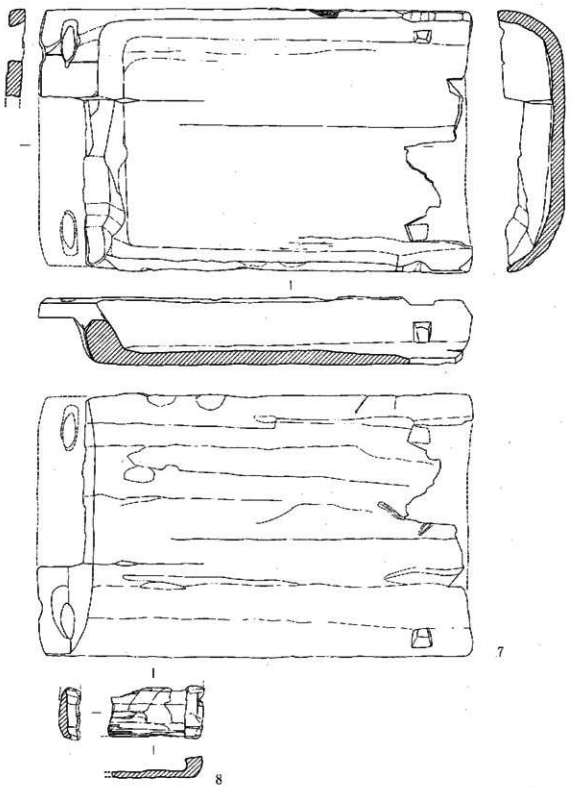


Fig.90　ＳＤ－221出土木器実測図(2)（1/4）

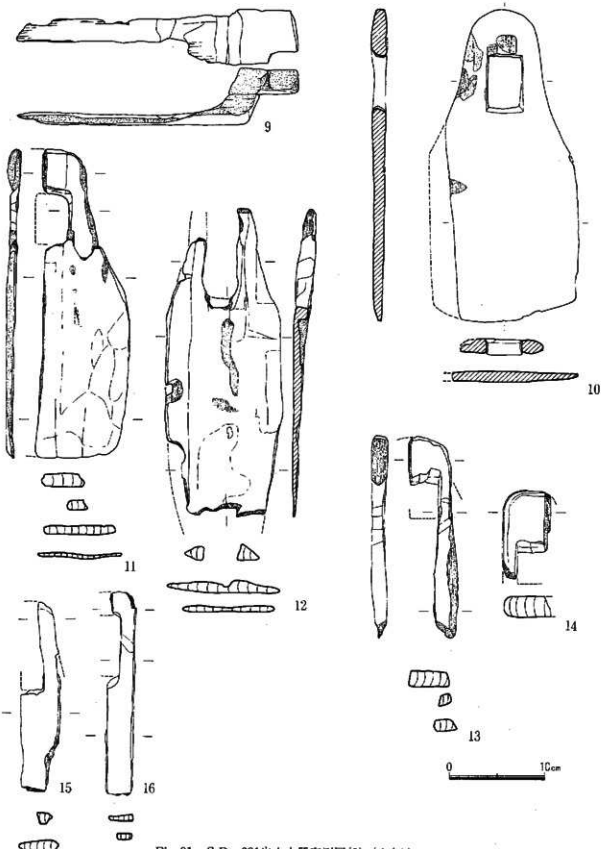


Fig.91　SD−221出土木器実測図(3)（1/4）

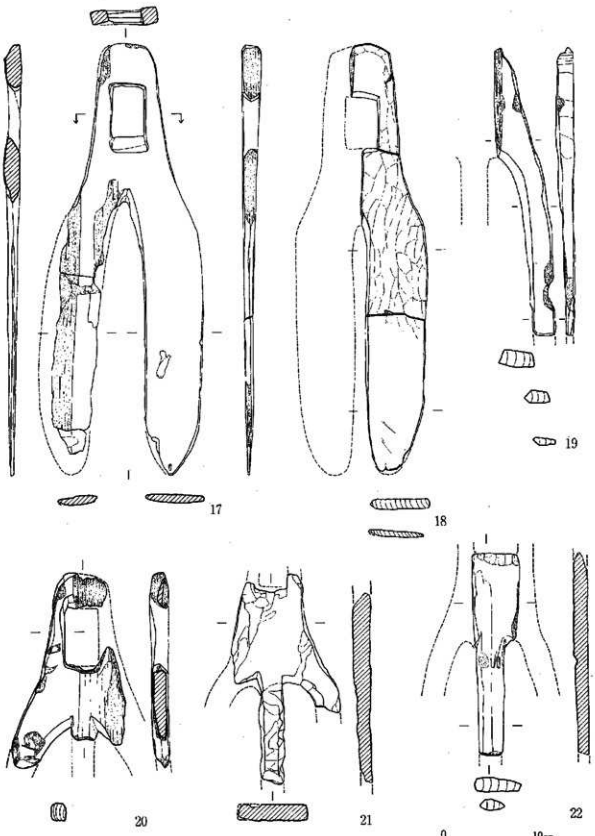


Fig.92　SD−221出土木器実測図(4)（1/4）

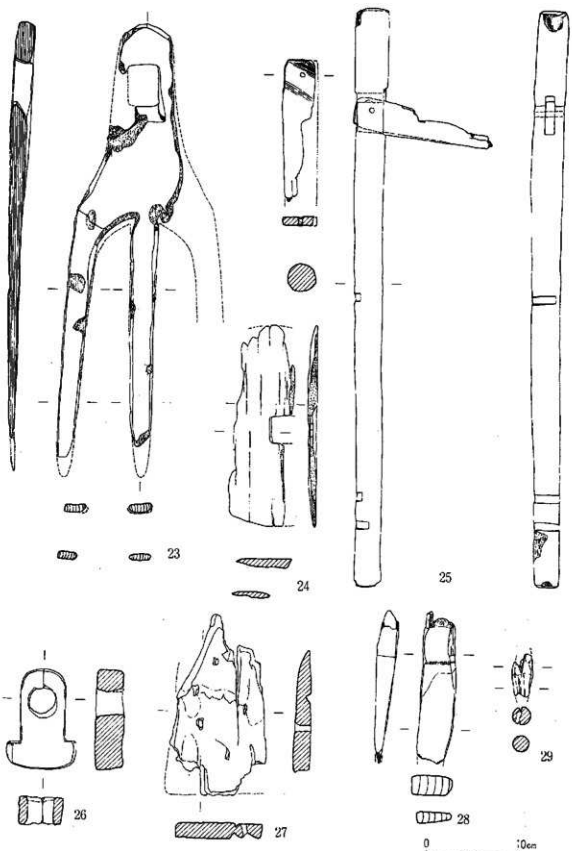


Fig.93　SD−221出土木器実測図(5)（1/4）

る。いずれも脚とは接合しないが155～157のような脚となろう。

外来系土器(142、143、158、159,PL.33)　159は長い脚に椀状の坏部となるブランディグラス状の高坏である。広い坏底部から内湾して立上り、口縁部は内傾し端部を肥厚させる。坏部には刻み目突帯を巡らし口唇部を内傾させる。内外面とも丁寧な箆研磨で刷毛目は外面の脚部近くと内面に残る。胎土には砂粒を含まず精良で焼成も堅緻で黄白色を呈する。142、143は同様な口縁部の形態であるが、内外面は刷毛目調整のままである。胎土は同様に精良で白ないし明橙色である。158は坏部が浅く別の器形か。刷毛目の上から研磨している。

手捏土器(Fig.88－185、186)

内外面に指押えの跡が残り口縁部は波状となる。185の底部は上げ底で、186は丸底となる。

器台(Fig.87,PL.35)

形態により大きく3類に分類できる。160、161、165は口径が小さく細めの形態をとる。体部上半で縊れ口縁部が緩やかに外反する。外面はナデで内面には指ナデの跡が残る。165には刷毛目調整が残る。162～164,166～169は脚端が肥厚気味になる。167～169は脚端に最大径をとる安定した形態で縊れ部はさらに上になり、短く外反させ、端部を肥厚気味にする。内外面とも刷毛目調整で外面にタタキが残る。167の側面には二次熱を受け変色部分がある。

支脚(Fig.87、88,PL.35、36)

170、171は口縁部が袋状を呈し内外面を刷毛目調整で171の下端にはタタキが見られる。また171の打ち欠いた口縁部には煤が付着し、片側は二次熱を受け器表面が白く変色するのが認められる。172、173は上面を平坦あるいはいくぶん丸味をもたせ、174、175は一方に傾斜させ上に載る器の安定を計っている。外面はナデ調整が多いが173はタタキのままである。176～182は畚形支脚である。外面はタタキと刷毛目調整、内面は刷毛目と指ナデである。

土製品(Fig.88－183、184,PL.36)

杓子状土製品である。183は大型品で径9cmの身に口縁部から直線的に延びる柄を付ける。外面には指跡が残り、内面はナデ調整をしている。184は柄の角度が緩やかでスプーン状をなす。

銅鏃(Fig.88－187,PL.4)

柳葉形の銅鏃で短い茎を有する。銅質も精良で錆も少なく端正な形態で、刃部は鋭利に研ぎ出され中央に鏑をもつ。身は断面菱形、茎は両面から研ぎ片面に鏑を残すがほぼ長方形になる。全長6.32cm、最大幅1.09cm、厚さ0.37cmを計る。

木製品(Fig.89～94)

楯(Fig.89－1,PL.44)　ＳＤ－002で出土した丹塗の楯と同様全体に等間隔に穿孔しているので楯と考えられよう。表面に1.2～1.4cm間隔で横に沈線を刻み、その沈線上に同様の間隔で穿孔する。両面から穿孔し孔径は2mm前後、厚さは6mm前後で現存長29.2cm、幅3.7cmを計る。表面には山形に黒色顔料を塗布している。

机(Fig.89－2、3,PL.44)　小型の組合せ式机の脚である。厚さ1cm弱の長方形の杉板材で一側面を弧状に抉り上端を角をつけて細めその中央にU字状の穴を開けている。３の上端側面には桟、天板の圧痕が観察できる。全長19.8cm、最大幅6.2cmを計る。

杵・横鎚(Fig.89－5、6,PL.45)　５は心持ち材の横鎚である。柄の基部および身の敲打部分を欠損する。６は縦杵の半身である。断面は楕円形に近く摘部は摩耗により摺り減り丸くなる。

容器(Fig.90,91－7～9,PL.45)７は　大型の盤状の容器である。幅27.5cm、45.1cm、器高6.9cmを計

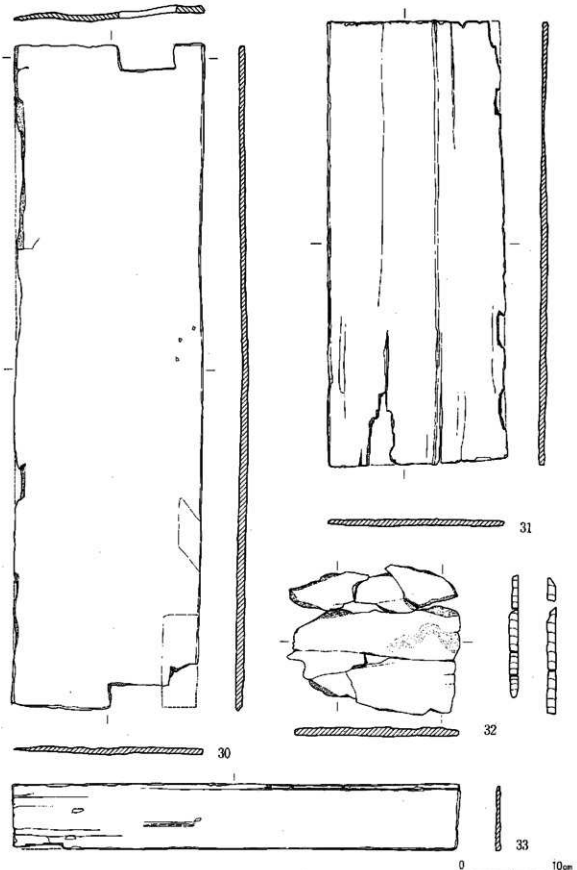


Fig.94　SD−221出土木器実測図(6)（1/4）

り中央部を刳り抜き、器壁を1.1cm前後に横断面U状となす。木口の一端に幅6cmの平坦な縁を設け、その両端に楕円形の孔を開け、相対する位置には側面を設けず、下面には台形の孔を穿つ。8、9も同様な刳物の容器である。

農具（Fig.91～93－10～23,PL.46）　10～12は平鍬である。10、11は頭部は丸く柄孔を長方形に穿つ。刃部は丸味をもち鈍く尖る。12は頭部と刃部を欠損する。柄孔は長方形になるものであろう。身の中ほどで幅を狭め先端部が細くなる。17、18は二又鍬である。19～23は三又鍬である。残りが悪く柄孔から三又の分岐部にかけて遺存する。23は頭部が山形で柄孔は長方形。刃部先端を欠損する。

その他の木製品（Fig.89－4、91－16、93－24～28、94－30～33）

4は厚さ3.1cmの板材で隅丸長方形に加工し、内部を隅丸長方形刳抜いている他の部材との組合せ材であろう。26は逆T字状を呈する部材である。。上端近くに円孔を穿ち、下端は丸く加工する。16、24は有孔板材。25は杉材の棒状の一端に長方形孔を開けてそこに板材を挿入する組合材である。棒材は径3cm弱の円形で、1×4cmの長方形孔を開け、中央部と下端の二箇所に緊縛の圧痕が7～8mm幅で残る。板材は棒材の孔に挿入してその中央部を一本の木釘で固定されていた。厚さ1cm弱、現存幅3.5cmで一側面が欠損するが長方形孔とと同じく4cm位であろう。出土時は斜めになっていたが本来直角に装着されるものであろう。整理中に板材が外れその表面に鋸引の痕かと思える条痕(PL.47)が遺存していた。27は厚さ1.6cmの板材で5個の穿孔が見られる。下端は裏面を斜めに面取りを行い水平に、左上を斜めに加工し穿孔も外側から内側に両面から行う。28は楔状木製品で一端を尖らせえる。29は木鍬で中央にV字状の切り込みがある。先端、茎は欠損する。30～33は板状製品である。他の部材との組合せで使用するもので、30の両端には「コ」の字状の欠き込みがある。

ＳＸ101（Fig.95）

ＳＤ－002、003調査時にその上を覆っていた土層内に堆積していたもので全体に土器の細片や自然木が出土しているがその中で纏まりをもって出土している箇所があったので遺構として取り上げた。古墳時代の湿地状に堆積した自然遺物を主体にする遺物で包含層とした方が妥当性があろう。図示したのはＳＤ－002の南東部からＳＫ－207にかけて集中して検出した。なお同層の周辺と近くのピット

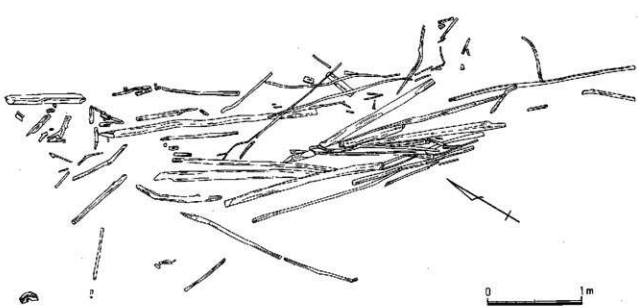


Fig.95　ＳＸ－101遺物出土状況実測図（1/40）

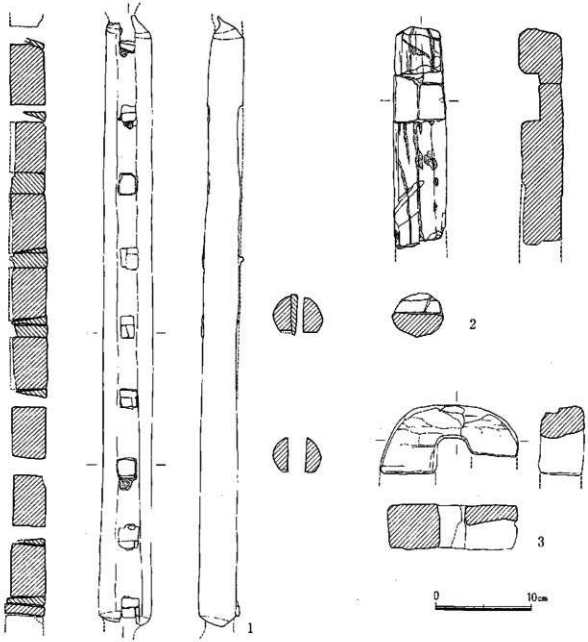


Fig.96　ＳＸ－101出土木器実測図（1/4）

から出土した木製品も一括して記載した。。

出土遺物　(Fig.96、97)

1は方形孔を開けた棒状製品である。側面は丁寧に面取りして平滑にしており、断面半円形の棒状部に方形孔９個を5cmの等間隔に開け、その孔に別の部材を挿入している。この部材を固定するため裏面から方形孔の中央部に木の楔を打ち込んだ手の込んだ手法を使用している。孔は２cm×２cmのほぼ方形である。棒状部の両端は丸く刻み込む途中で折損しておりさらに延びる。現存長64.4cm、幅5.2cm、厚さ3.3cmを計る。ＳＤ－003の肩部から出土しているが包含層に属するものであろう。２は建築材である。断面が楕円形で面取りする棒状部の先端にコの字の欠き込みを入れている。欠き込みの幅は5.1cm、長さ5cm、深さ2.2cmである。頭部は丁寧に丸く面取りを行う。現存長23cmを計るが更に長くなる。

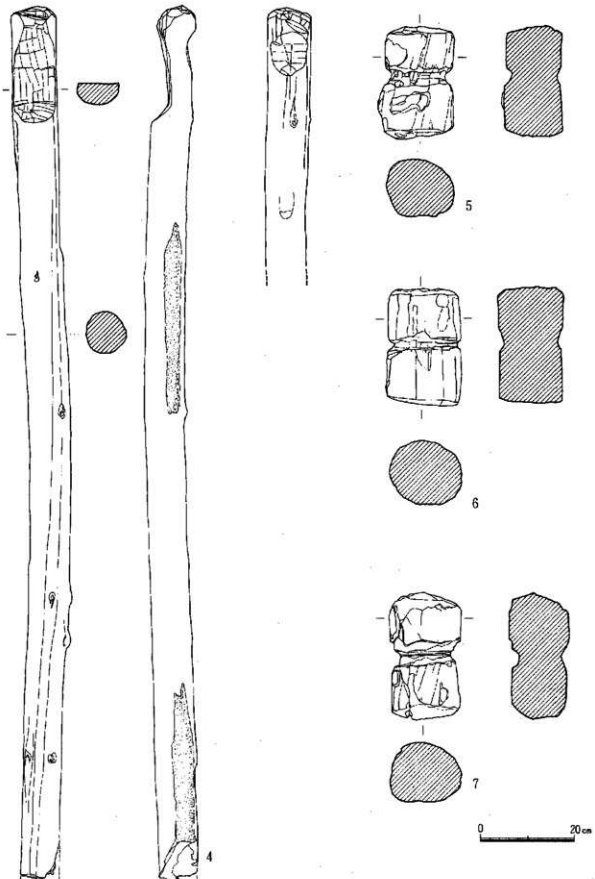


Fig.97　SX−101・ピット出土木器実測図（1/4・1/8）

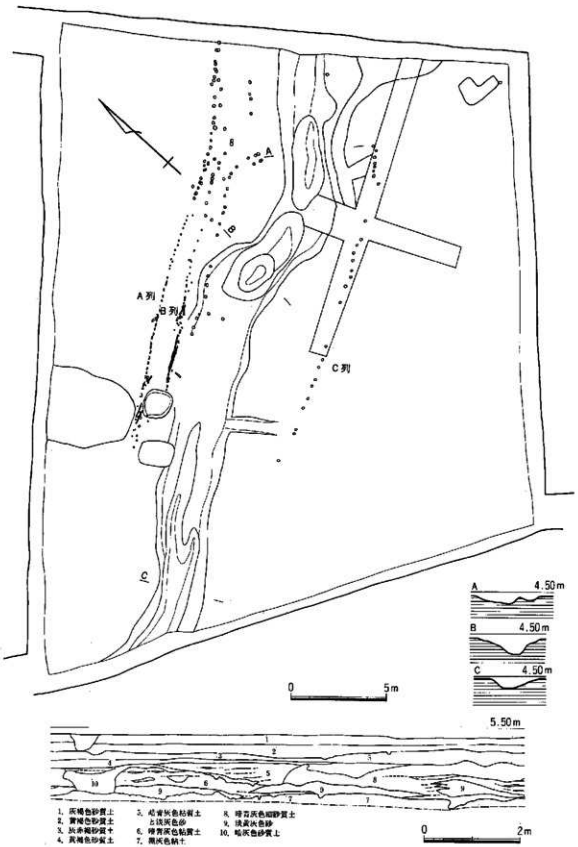


Fig.98 Ⅲ区全体測量図（1/200・1/80）

3は厚さ4.5cmの板材で全体を丸く仕上げ、その中に孔を有する加工部材である。他の部材との組合さるものであろう。4は垂木材である。先端部以外は自然のままである。先端の一面L字状、その反対側をV字状に欠き込みをいれ、加工痕を明瞭に留める。頭部も丁寧な面取を行う。5～7は綱錘である。表面には樹皮が付き両端を丸く加工し中央部に溝状の刻みを入れている。

2．Ⅲ区の調査

試掘調査によりⅡ区とⅢ区の間は遺構、遺物の出土がなく調査対象外とした。実際北環濠の外側になるとピットの数が激減し遺物もほとんど出土しなかった。Ⅲ区において杭及び砂に埋没した水田の足跡が検出されたので調査を実施することとなった。

1）土層

東壁の土層を図示したが飛行場が出来る以前の水田耕作土からの土層が観察出来た。1層－旧耕作土で灰褐色砂質土。2層－黄褐色砂質土。3層－灰赤褐色砂質土。鉄分、マンガンを多く含み赤変する。3層までは水平な堆積状態を示し安定した状況が伺える。4層－暗灰色砂質土。粗砂を多く含み、部分的に途切れたり黄褐色砂質土となる。その下は粗砂、細砂、微砂等が縞状に堆積し不安定な状況を呈する。7層－黒褐色粘質土。標高4m前後を計り北側が序々に低くなる。Ⅱ区の中央部ではこの層は5m前後の高さであるから1mくらいの比高差が認められる。

2）検出した遺構

Ⅲ区の調査では水田遺構(杭列)と溝状遺構を検出した。水田面は粗砂に覆われ多くの足跡が認められたが畦畔は洪水により流失したのか遺存していなかった。ただ杭列が3条確認できた。また杭列の南側に溝状遺構1条を調査した。

水田遺構　(Fig.98)

水田面を砂に覆われていたので足跡を粗密の差はあるが全面から検出することが出来た。足跡には人の他動物と考えられるのもあった。しかしながら畦畔は東西に延びる杭列以外には認められず洪水砂による水田面の凹凸もあり、水田区画を見出すには至らなかった。

杭列　(Fig.98、99)

中央部を東西に走る溝を挟んで3列の杭列が確認できた。北側からA、B、C列として説明を加える。A、B杭列は溝の北側を並行に走り、その間の距離は1.2m前後と一定し直線的に延びる。A杭列の西側約9mは矢板のみを用い、東側は丸木の杭を使用する。矢板は幅15cm前後、長さは90cmを測るのもある。丸木の杭は径5cm前後を測るのが多いが中には10cmを越えるのもある。矢板の中には四角い孔を有するのもある。B列は西側で矢板と丸木杭が混在し、東側では丸木杭のみとなる。A、B列の間は幅広く、水路の際に設けられた中畦畔で農耕用の通路であると考えられよう。C列は溝の南約3～4mの間隔を置いてA、B列と並行して東西に延びるが両端とも調査区内で終結している。丁度溝が蛇行している部分に限り杭を打設しているようである。畦畔も兼ねた護岸の補強の杭列であろうか。杭は丸木のみで径5cm前後、長さ50～70cmの規模である。

溝状遺構　(Fig.98)

調査区中央部を東西に横断する溝状遺構である。水田に伴う水路が洪水により本来の姿を大きく変化させているものであろう。中央部で蛇行し南端でも少し北側へ屈曲しそうである。幅は2.5～3.5mを

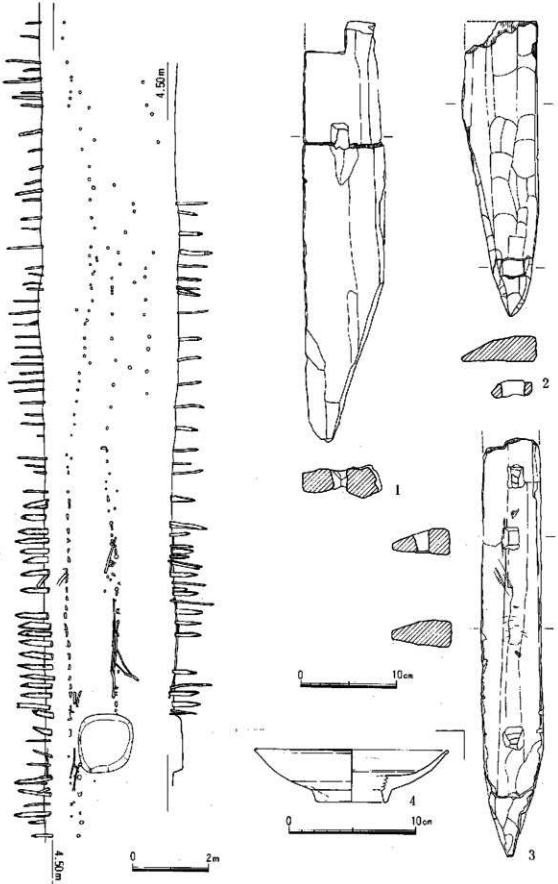


Fig.99　杭列、出土遺物実測図（1/100・1/4・1/3）

測り北端部はさらに拡がりそうである。深さは部分により浅深があるが20cm前後で、蛇行している前後と西端で一段窪んでいる。杭列の西側にあたる箇所は最も浅くなり、その南岸には溝に直交する浅い溝状の窪みがあり取水口の可能性がある。

出土遺物（Fig.99）1～3はA杭列出土の矢板で角孔を有するものである。4は水田の砂層出土の輸入の高台付白磁皿である。他には土師器の破片しか出土していないので12世紀前後の時期であろう。

3．各区出土石器

今回の調査では、各遺構から次のような石器が出土した。磨製石器としては、磨製石鏃、加工用の各種片刃石斧、伐採用の太形蛤刃石斧をはじめとする大型斧、収穫具としての石庖丁や石鎌、加工具としての砥石、調理もしくは加工用の磨石などがある。目立ったものとしては、磨製石斧の欠損品を再利用した敲打（擦具）具や手持ちの砥石などがある。打製石器としては、石鏃や削器をはじめとして、二次加工のある剥片や剥片、石核などがある。とくに黒曜石を主体とする剥片と石核は該期の北部九州の遺跡と同じく、おびただしい量が出土している。ここでは、とくに代表的なものに限りその一部を図示した。以下にその概要を述べる。なお、本遺跡出土の量や石器製作の構造的な把握のための分析は時間の都合で割愛せざるを得なかった。ここでは、基礎資料の提示を経ないまま、概観して気づいた諸点について述べるにとどめたい。

磨製石鏃　細身の柳葉形のもの（1）と幅広の葉形のもの（2）がある。3は石剣の再加工品の可能性がある。時期的には弥生時代早期～前期のものである。

柱状抉入片刃石斧　抉り部分の破片（4）と刃部の破片（8）がある。いずれも暗灰青色の粘板岩を使用している。時期は弥生時代早期～前期に属すると考えられる。

偏平片刃石斧　肉厚の厚さ1cm以上の幅広の製品（6・7・12）と1cm以下の幅の狭い薄手の蟇刃状の製品（9～11）がある。ほとんどが白色の風化面をもつ頁岩を素材としているが、12は淡い緑色の光沢のある頁岩を素材としている。また、12は破損後に側面部に両面から調整剥離を加え、鋭い刃部を形成して再利用している。5は1点のみ蛇紋岩を素材としたもので、多くの面を研磨しており、定角式でなく、やや丸みを帯びた形態をしている。時期が判明しているのは弥生時代前期の例が1点のみであるが、他の製品もほぼ早期～前期のものと考えられる。

石庖丁　6点図示したが、形態はさまざまである。外湾刃が基本であるが、14のように直刃に近い刃部をもつものもある。14は穴の位置も下方にあり、使用による目減りか、破損による再加工のためにこのような特異な形態になったと考えられる。輝緑凝灰岩製の14と17は弥生時代終末に属する。他はほぼ早期～前期のものであろう。

石庖丁未製品　19は砂岩製の石庖丁の未製品と考えられる資料である。外湾する刃辺に両面から調整剥離を加えているが、一部に研磨した刃をもっている。右肩に素材の礫面もしくは鋸引きによって切られた面を残しており、再利用品の可能性もある。

石鎌　内湾刃の石鎌である。茎部の破片（20）と刃身の破片（21・22）がある。後者の2点は弥生時代終末の遺構から出土している。輝緑凝灰岩製の製品（22）はこの時期に属するが、21は前期の可能性もある。

紡錘車　2点の破片があるが、いずれも半裁している。弥生時代早期～前期の資料である。

臼玉　包含層からの出土であるが、4次調査の資料からみて、古墳時代に属する資料であろう。

蛤刃石斧　本調査地点出土の15cm以上の大型の石斧は、26のような重厚な厚みのある蛤刃石斧と29

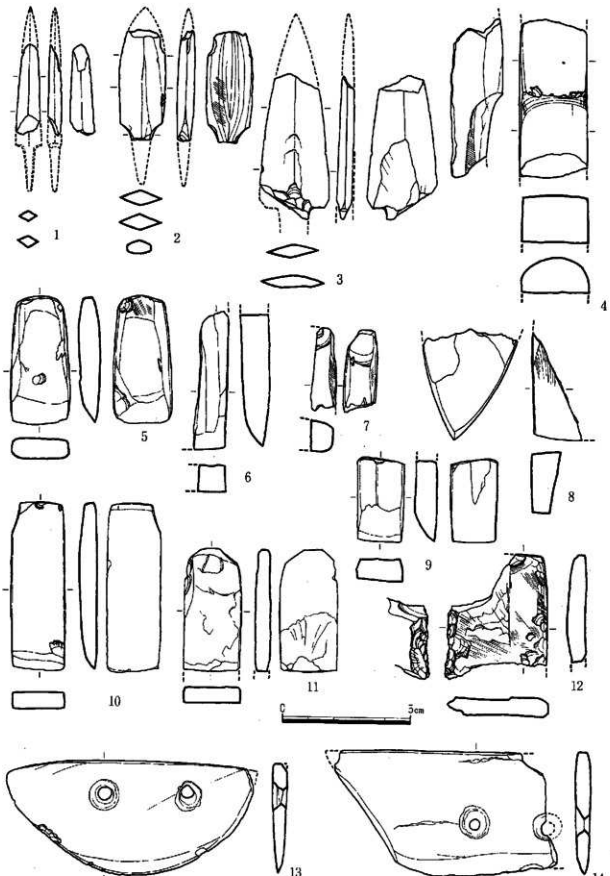


Fig.100 各区出土石器実測図(1)(2/3)

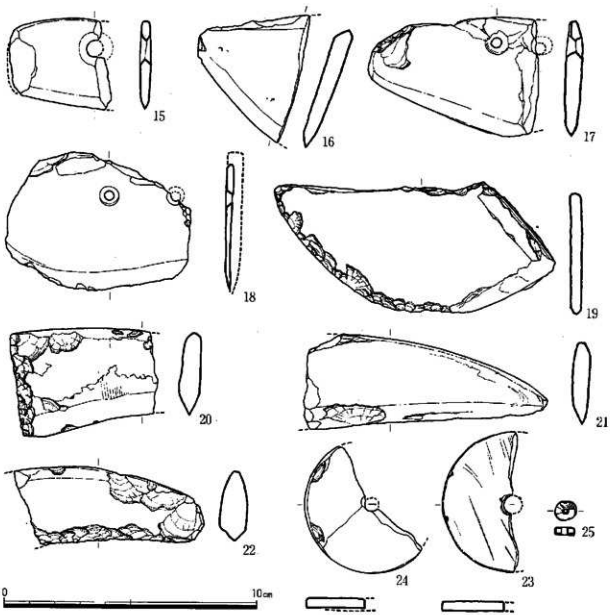


Fig.101　各区出土石器実測図(2)(2/3)

に代表されるような幅広の刃をもち、偏平に近い薄手の蛤刃石斧に分かれる。これに35や36の素材となった小型の偏平な製品が加わる。石材は、重厚なタイプに主に表面が白色に風化し、場合によっては粉状に表面が剝落していくような玄武岩（安山岩）が使用され、偏平なタイプに暗緑色～暗青色もしくは淡緑色の玄武岩が使用されているという、石材による形態の違いが認められる。また淡緑色のものは、表面が風化しもろくなりやすい。また、重厚な蛤刃石斧は敲打痕がほとんど認められないくらい研磨されているのに対し、偏平な石斧は刃部以外の部分に整形剝離や敲打の痕跡を残したままである。両者の石材選択および製作法に顕著な違いが認められ、供給経路の違いを想定できよう。時期的には古墳時代の遺構からの出土もあるが、おおむね弥生時代早期～前期の所産である。

石斧再利用加工具　石斧の破損品を再利用して、敲打もしくは削りに使用したと思われる石器である。31～33にみられるように重厚な蛤刃石斧の折損面に粗い剝離を加えて刃部とし、頭部から打撃を加えている。頭部もしくは先端部の稜線が潰れて、丸くなっているものもある。33のような先端の作

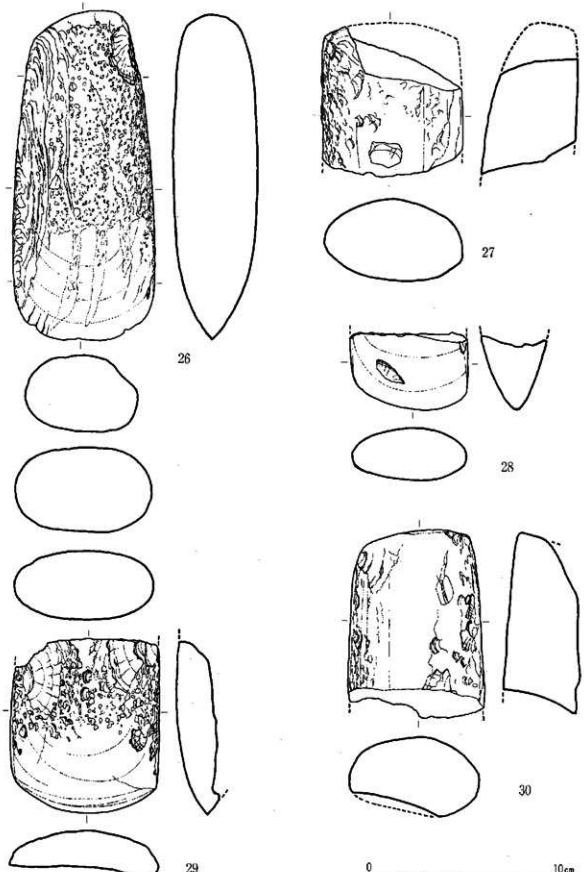


Fig.102　各区出土石器実測図(3)(1/2)

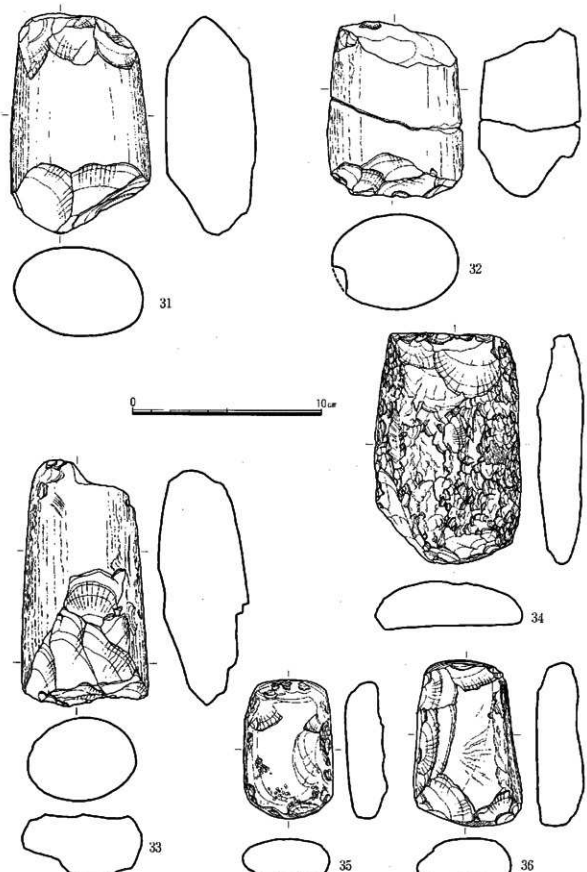


Fig.103　各区出土石器実測図(4)(1/2)

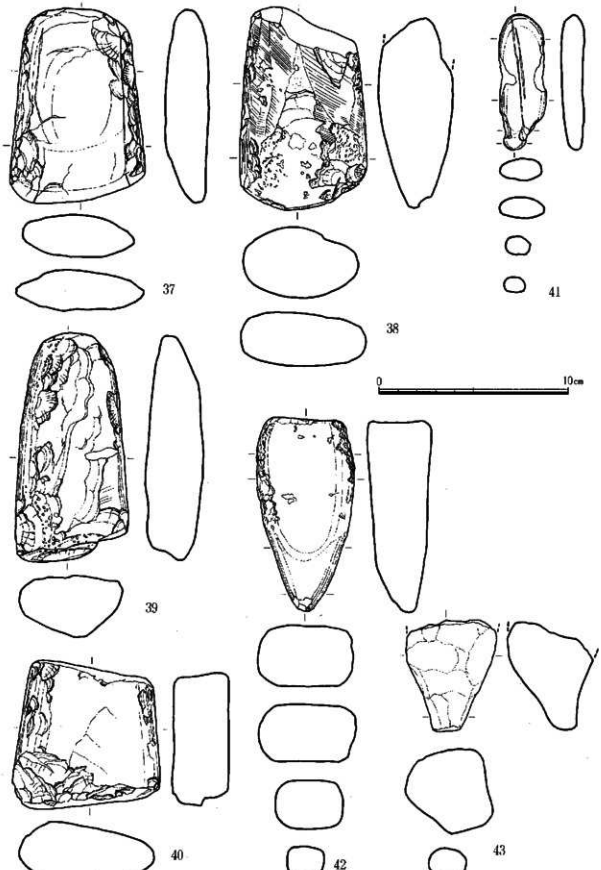


Fig.104　各区出土石器実測図(5)(1/2)

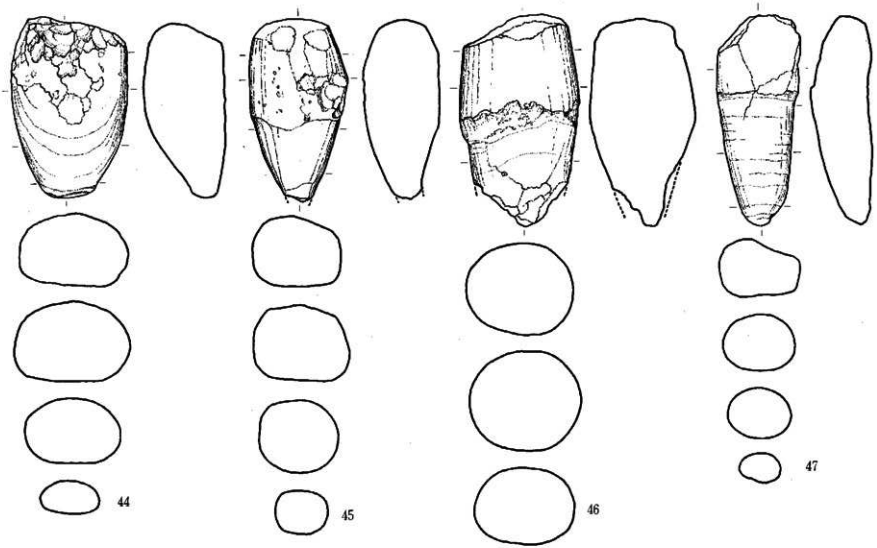


Fig.105　各区出土石器実測図(6)(1/2)

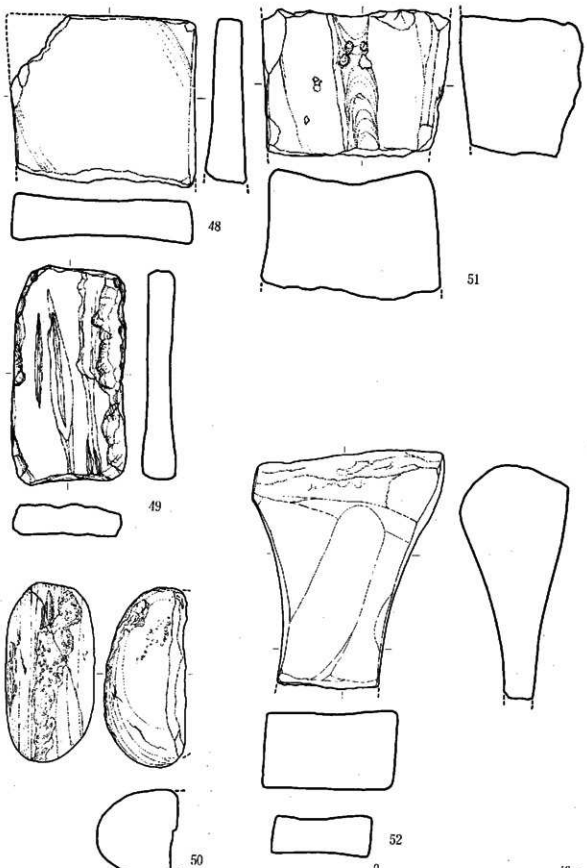


Fig.106　各区出土石器実測図(7)(1/2)

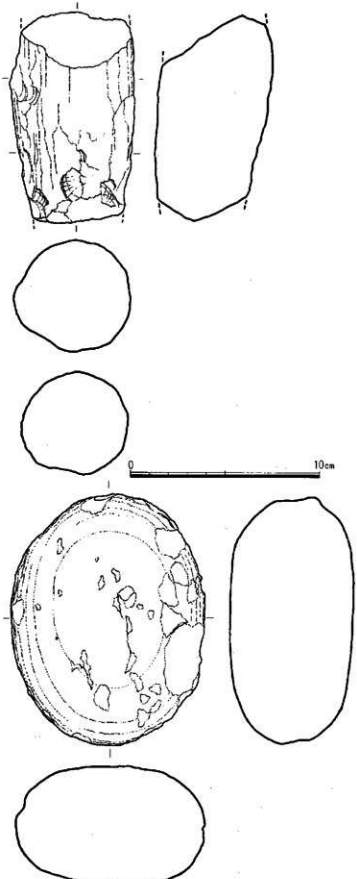


Fig.107　各区出土石器実測図(8)

業部の大きな剥離痕は使用の際のものである可能性もある。これに対し、34～40のように偏平な石斧の破片を使用し、両端に極度の丸い擦り面をもつものがある。これらは作業部に直角方向の擦痕をとどめており、それが両端の作業部に付く例もある。これは、前者が断面楔状の形態を持つのに対して断面形が丸い両端の形状をしているのが特徴である。おそらく前者はたがねもしくは木材などの分割に用いる楔として機能したのに対し、後者は石器の敲打や皮や木製品などの加工に使用されたものと推定される。時期的には、その素材となった石斧の所属時期である弥生時代早期～前期がほとんどであるが、終末の遺構からも出土しており、この時期に採集品が工具として再利用された可能性も否定できない。

手持ち砥石　粗い砂岩を素材とした扁平形の砥石である。このうちの一部はこれまで、環状石斧などの回転穿孔具と考えられていたものを含むが、その形状に斉一性があり、ここではこれとは機能の異なるある種の砥石であると考えたい。その形状の特徴は、まず擦り面の断面形が楕円形もしくは隅丸方形に近いことである。これはあきらかに回転穿孔具が正円に近い断面形を取るのと趣を異にしている。また、手持ち部分と考えられる上半部は断面形が楕円もしくは円形のものが多いが、中には方形のものがあるなど、一定していない。そして頭部は回転による擦痕跡もなく、粗い敲打面をとどめるものが多いなど、ほとんど回転具として機能しないものであることがわかる。また、手持ち部分の粗い面と擦

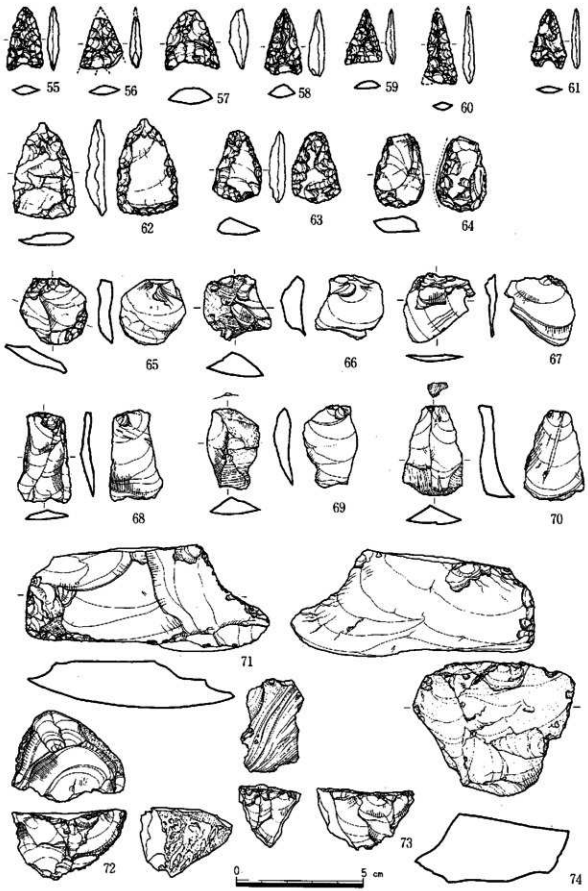


Fig.108　各区出土石器実測図(9)(2/3)

り痕のある面とでは一つの面に片寄るように段を形成するものが多い。そして、44の例にみられるように、先端は猪の鼻面のように一端が反り上がっているものが多い。これはこの反り上がった面に被加工物をあてて横方向に作業したため、溝状に窪んだものと考えられる。そして加工物の形態は、木製鍬などのほぞ穴の内面などのように薄く、しかも作業が手の支持した部分で停止するような穴状のものが想定できる。また、石鎌などの内湾した弧を描く刃部などを研磨するにも有効である。時期は弥生時代早期から出現しており、このころに盛期があったものと考えられる。板付遺跡や比恵遺跡などからも出土しており、ほぼ弥生時代前期におさまるものである。4次調査例を加えれば40点あまりが発見されており、周辺遺跡も含めて本遺跡が最も多量に本石器を出土している。

その形状から、「猪形砥石」と銘名しておくが、機能や分布については、今後詳細な分析と再考が必要と思われる。

不明石製品　41は砂岩の偏平な小礫を使用した石製品である。中央に2本の細い刻線がある。端部が丸く摩耗している。端部近くの両側辺がわずかに抉れる。用途不明。弥生時代早期に属する。

砥石　代表的な砂岩製の砥石4点を図示した。48は偏平な板状の形態をもつ。49は3本の断面V字形の、51は中央に断面が丸い溝状の窪みをもつ。52は使用により中央部がすり減る、ばち形に変形した柱状の砥石である。弥生時代早期～前期の資料がほとんどであるが、52のみ終末に属する。

磨石　50は小型の磨石で、側面に敲打痕をもつ。54は大型の円礫製の磨石である。弥生時代早期と前期の製品である。

敲打具　53は砂岩製の円柱状の石製品である。両端部を欠損するため、明確な機能は推定できない。「猪形砥石」にも似るが、手持ち部が長いため、一応敲打具と考えた。弥生時代終末に属する。

打製石鏃　黒曜石およびガラス質安山岩製の両面加工の石鏃である(55～61)。形態は二等辺三角形を基本とし基部にわずかに抉りが入る。62と63は石鏃の未製品と考えられるが、錐や削器の可能性もある。そのほとんどが弥生時代早期～前期に属すると考えられる。

以下に記述する剥片石器は弥生時代早期に属するSD003出土品から抽出している。

二次加工剥片　黒曜石の剥片を使用し、周辺もしくはその一部に剥離を加えたものである(64～65)。64は両側辺に背面側と腹面側のそれぞれから連続する剥離を加えている。65はその側辺の一部に腹面側から剥離を加えている。

剥片　黒曜石の剥片の一部を図示した(66～70)。打面の形状は平坦打面もしくは礫面打面で、無調整のまま打面の方向を変えながら連続して剥離されたことを示している。

削器　ガラス質安山岩製の大型の横長剥片を使用した削器である(71)。左側辺に両面から剥離を加え刃部を形成している。左側辺には連続する微細な剥離痕が認められる。

石核　黒曜石製の小角礫を使用した石核である(72･73)。自然面を打面として剥片剥離を実施したものや、その後剥離作業面を打面に転移して剥離を実施するものなど、剥離作業に際して打面の準備などの法則性は見いだせない。

原石　黒曜石製の小角礫の原石である(74)。上記の剥片や石核の素材となったものである。

このような黒曜石製の剥片石器およびその素材が多量に検出される現象は、該期の北部九州の諸遺跡に通有のもので、本遺跡でもSD003を中心にこのような腰岳産の小角礫を使用した石核とそれから剥離された多量の剥片や砕片が出土している。

これ以外に、石英岩の小礫を使用した敲打具などが目立った製品である。また、4次調査では、石庖丁の紐穴などの穿孔具も検出されており、これも組成に加える必要がある。

今回の調査地点における弥生時代早期から前期にかけての石器および石器製作についての特徴を概観する。本調査地点においては磨製石器の材料がほとんど見いだされていない。玄武岩や頁岩の礫や板素材は一部発見されているが、原材から石器作成までの石器製作の全工程を示す資料は存在しない。石斧などの磨製石器と同じ石材の剥片は、完成された磨製石器から剥離した破損によるものがほとんどで、これらの製品は遺跡に完成もしくは、敲打完了時点で搬入された可能性が高い。頁岩製の小型の片刃石斧類も同様で、ほぼ完成された姿で持ち込まれたものと考えられる。これに対して、剥片石器類は原材から石器製作にいたるまでの全工程を示す資料が出揃っており、好対照を成している。

磨製石器とくに玄武岩製石斧の製作および入取形態については、比恵遺跡などとは若干様相が異なっており、集落ごとの違いが存在しそうである。しかし、本調査地点出土石器は住居などの集落の中心から発見されたものでないことから、比較にあたっては慎重を要するのも事実である。

Fig.	No	器種	小区	遺構	層	石材	折れ	長さ	幅	厚さ	重さ	時期
100	1	磨製石鏃		包含層		粘板岩	有	3.65	0.95	0.50	1.41	
100	2	磨製石鏃		SD003	4	粘板岩	有	4.40	1.85	0.70	6.73	弥・前
100	3	磨製石鏃		SD105		頁岩	有	5.80	2.75	0.60	11.19	現 代
100	4	扁平片刃石斧	G-6	包含層		頁岩	有	6.35	2.70	2.00	58.21	
100	5	扁平片刃石斧		包含層		蛇紋岩		5.10	2.30	0.90	19.58	
100	6	扁平片刃石斧		SK188		頁岩	有	5.50	1.25	1.15	15.45	弥・前
100	7	扁平片刃石斧		包含層	下	頁岩	有	3.40	1.00	1.30	6.59	
100	8	柱状抉入片刃石斧	G-6・7	包含層		粘板岩	有	4.50	3.75	1.85	18.57	
100	9	柱状抉入片刃石斧	H 7	包含層		頁岩		3.40	1.85	0.90	11.91	
100	10	扁平片刃石斧		SB226	6	頁岩		6.70	2.10	0.75	22.42	弥・終
100	11	扁平片刃石斧		SD003	2	頁岩		4.95	2.25	0.60	16.20	弥・早
100	12	片刃石斧再利用刃器		SK167		頁岩		5.00	3.95	0.80	22.37	弥・前
100	13	石庖丁		包含層		緑泥片岩	有	9.80	4.60	0.60	40.64	
100	14	石庖丁		SD221		硬砂岩	有	8.85	5.00	0.65	44.83	弥・終
101	15	石庖丁	G-9	包含層			有	4.05	3.50	0.45	11.23	
101	16	石庖丁		SD003	4		有	4.65	4.85	0.75	22.67	弥・早
101	17	石庖丁		SD221		輝緑凝灰岩	有	6.85	4.75	0.70	35.76	弥・終
101	18	石庖丁		SD215			有	7.30	5.40	0.35	20.49	弥・前
101	19	石庖丁未製品		SP582		砂岩		11.30	50.50	0.50	47.20	
101	20	石錘		SD105			有	5.95	4.25	0.90	40.42	現 代
101	21	石錘		SD221			有	9.70	3.70	0.70	38.12	弥・終
101	22	石錘		SD002	3	輝緑凝灰岩	有	7.60	3.10	1.10	36.34	弥・終
101	23	砥錘車	G-6・7	包含層		粘板岩	有	5.60	2.80	0.40	11.97	
101	24	砥錘車		SD003		粘板岩	有	5.40	3.30	0.40	9.79	弥・早
101	25	臼玉		包含層		滑石		0.75	0.85	0.30		
102	26	太形蛤刃石斧	G-6	包含層		玄武岩		17.60	7.55	4.50		
102	27	太形蛤刃石斧		SK103		玄武岩（白）	有	8.00	7.50	4.80	401.60	古墳
102	28	太形蛤刃石斧		SH222	19	玄武岩（白）	有	4.15	6.25	3.40	113.31	弥・終
102	29	磨製石斧		SD105		玄武岩	有	9.30	7.90	2.10	250.70	現 代
102	30	石斧転用敲打具		SD002	5	玄武岩（白）	有	10.10	7.35	4.10	492.73	弥・終
103	31	石斧転用敲打具		SD002	2	玄武岩（白）		11.80	7.40	4.85	677.04	弥・終
103	32	石斧転用敲打具		SD003	2	玄武岩（白）	有	9.40	7.25	5.40	620.29	弥・早
103	33	石斧転用敲打具		SD221	東半	玄武岩（白）		13.25	6.80	4.65	644.65	弥・終

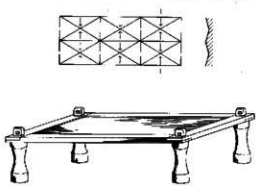
Fig.	No.	器種	小区	遺構	層	石材	折れ	長さ	幅	厚さ	重さ	時期
103	34	石斧転用敲打具		SP713		玄武岩		12.40	7.90	2.45	393.22	
103	35	石斧転用敲打具		SD002	2	玄武岩		7.40	4.80	2.10	134.26	弥・終
103	36	石斧転用敲打具		SD003	2	玄武岩		8.90	5.80	2.52	218.75	弥・早
104	37	石斧転用敲打具		SD002	3	玄武岩		10.50	7.25	2.35	280.73	弥・終
104	38	石斧転用敲打具		SD002	1	玄武岩		10.80	6.85	4.00	408.78	弥・終
104	39	石斧転用敲打具		SD003	3	玄武岩		12.30	6.00	3.35	349.54	弥・早
104	40	石斧転用敲打具		SP101		玄武岩		7.90	7.85	3.10	349.05	
104	41	不明石製品		SD003	4	砂岩	有	7.30	2.45	1.25	25.37	弥・早
104	42	手持ち砥石		SD221		砂岩		10.40	5.20	3.45	246.28	弥・終
104	43	手持ち砥石		SK209	上	砂岩	有	6.00	4.80	4.50	103.99	弥・後
105	44	手持ち砥石		SP135		砂岩		9.75	6.20	4.40	338.66	
105	45	手持ち砥石		SD220		砂岩	有	9.90	5.25	4.10	234.41	古墳
105	46	手持ち砥石		SK159		砂岩	有	11.42	6.40	5.70	480.88	弥・早
105	47	手持ち砥石		SD174		砂岩		11.30	4.45	3.20	182.39	弥・早
106	48	砥石		SD171		砂岩	有	9.10	9.85	2.50	340.44	弥・前
106	49	砥石		SD003	南4	砂岩		11.80	6.10	1.85	200.91	弥・早
106	50	原石		SD003	2	安山岩	有	9.60	4.70	4.35	303.80	弥・早
106	51	砥石		SD171		砂岩	有	7.90	10.10	6.55	885.88	弥・前
106	52	砥石		SD221		砂岩	有	13.00	9.90	5.70	712.15	弥・終
107	53	敲打具		SD221		砂岩	有	11.30	6.70	6.10	579.44	弥・終
107	54	凹石		SK157		安山岩		13.50	10.40	6.55	1456.71	弥・前
108	55	石鏃		包含層		黒曜石		2.50	1.40	0.40	1.15	
108	56	石鏃	H-5	包含層		黒曜石	有	2.00	1.80	0.40	1.16	
108	57	石鏃		SD003	東側	黒曜石		2.40	2.10	0.80	2.61	弥・早
108	58	石鏃		SD002		黒曜石		2.60	1.50	0.60	1.91	弥・終
108	59	石鏃		SK146		黒曜石		2.10	1.40	0.40	0.67	弥・後
108	60	石鏃		SK163·164		黒曜石	有	2.80	1.30	0.40	1.22	弥・前
108	61	石鏃		包含層		ガラス質安山岩		2.40	1.40	1.30	0.87	
108	62	石鏃未製品		SD003	4	黒曜石		3.80	2.40	0.70	7.13	弥・早
108	63	石鏃未製品		SP419		黒曜石		2.80	2.00	0.70	2.87	
108	64	二次加工剥片		SD003	3	黒曜石		3.00	2.00	0.60	5.42	弥・早
108	65	二次加工剥片		SD003	北4層	黒曜石		2.60	2.70	0.60	4.56	弥・早
108	66	剥片		SD003	4下	黒曜石		2.60	2.70	0.90	4.99	弥・早
108	67	剥片		SD003	4	黒曜石		2.80	2.90	0.40	2.41	弥・早
108	68	剥片		SD003	4	黒曜石		3.70	2.10	0.30	2.75	弥・早
108	69	剥片		SD003	4下	黒曜石		3.20	2.10	0.70	3.81	弥・早
108	70	剥片		SD003	4下	黒曜石		3.60	2.40	0.80	6.53	弥・早
108	71	削器		SD003	3	ガラス質安山岩		4.30	9.70	1.90	88.50	弥・早
108	72	石核		SD003	3	黒曜石		2.70	4.60	3.70	35.63	弥・早
108	73	石核		SD003	3	黒曜石		2.50	2.50	3.90	15.60	弥・早
108	74	原石		SD003	3	黒曜石		5.40	6.50	2.80	101.92	弥・早

出土石器一覧表

4）まとめ

今回の調査では多くの成果を得る事ができた。縄文時代晩期から古墳時代に至る各種の遺構を検出することができた。日本での稲作が開始された時期の溝ＳＤ－003からは多くの土器、木製品が出土している。１層からは図示していないが古墳時代の遺物も見られ古墳時代の包含層と考えられ、２層からが本来のこの溝の覆土であろう。溝は台地の縁を巡る自然の流路であるが水田に伴うか否かは水田部の調査を実施していないので明らかにすることはできなかった。溝は場所により深くなったり浅かったりと起伏に富むが、遺物は溜り状の部分から多く出土している。それもほとんどが摩耗を受けてなく、土器にも完形品が押し潰された状況を示す。出土土器は下層からでも板付Ⅱ式の壺(87)等数点が出土しているがこれらは新しい時期のピット等の溝の上からの掘り込みの可能性が強く、それを除外すればこの溝の土器は突帯文土器だけである。古い土器も見られるが甕形土器の口縁部下の突帯貼り付けが小さく、底部も台形を示すのはなく、端部が僅かに拡がる程度である。口縁部を如意状に外反させ口唇部外面に刻み目を巡らす新しい形態の甕形土器も数点見られこの溝の時期としては夜臼式土器の単純層の中でも新しい時期であろう。これらの土器と共に大洞系土器（Fig.41－124）と無文土器（Fig.41－121）が出土している。大洞系土器は亀ヶ岡遺跡出土の壺の肩部の横線と類似し大洞Ｃ2式土器であろう。異なるのは左右に対向する渦文の上下にある二叉文が亀ヶ岡例は離れているのに出土した土器はくっついている点である。九州で大洞系土器は大分県下で２点が知られるがその影響を受けていることは確かであるが、どこで作ったのか判然としないが、本例は胎土、色調、文様表出技法や陰などがいずれの特徴からも、東北地方からもたらされたものであろうとの事である。東北地方にも夜臼式土器の影響を受けたと思われる土器があり、無文土器と共にかなり広範囲の交流が行われていたことが窺える。

環濠からは豊富な土器や木製品が出土している。土器は弥生時代の後期後半から土師器まで含んでいるが環濠の機能している時期は後期後半から終末までの間であろう。その中で注目すべき木製品として短甲、楯、組合せ式机があげられる。弥生時代の短甲はこれまで静岡県伊庭遺跡、岡山市鹿田遺跡が報告されている。近年長崎県原の辻遺跡からは楯と共に出土し、本例で４例目である。伊庭遺跡例は柳、鹿田遺跡例は楊か朴で本例は柿を使用している。後胴右半分の遺存であるが全面に文様を刻んでいる。上半部は同心円状に縁取られ、小さな連続三角文や菱形文を巡らし、脇下には直弧文、胴下半分には孔列に挟まれた弧帯文をもつが文用は極めて繊細で、その上から柿渋かとも思われる顔料が薄く塗布され遠くからでは模様の有無は判別は付かないであろう。なお本文中で記載しなかったが連続菱形文は線刻ではなく半肉彫りで下図の様に菱形の中央から斜めに彫り窪め立体感をもたせている。沈線で分離された下半分には吉備地方の特殊器台の文様との共通性が認められる。立坂型の弧帯文と基本的には同一で、ただ３本の線を単位とした単純化された文様である。この模様が筑の地との影響により出現するのか北九州の弥生文化からの出自なのか充分な検討が必要であろう。いずれにしても吉備地方との交流を裏付ける資料である。幅は３点出土しているが２点は表面には黒漆を、裏面には丹を塗布し、数cm間隔で穿孔し一部に皮紐？を通すが表面から押し込んだままのようで裏面まで貫通していない。もう１点は（SD　221出土）内眼では不明であるが顕微鏡で観察すると赤色顔料が認められ、黒色顔料の山形？の模様もある。短甲は薄く加工が幽雅な樹種を選択していること、呪術的文様をもつなど黒漆塗りと共に祭祀用の武具の可能性があろう。大型組合せの机は側面に抉りのある槙を長辺とすれば図のようになろう。ただ槙は一方の端部しか遺存していなくその規模は明らかではない。北陸の環濠からは瀬ノ内系土器(103、159)が少なからず出土しておりその交流が窺える。



上　短甲文様模式図
下　大型組合せ机復元図

註1　「縄文土器大成」４　講談社　1981

註2　設楽　博己氏の教示による。

付論１　雀居遺跡出土の縄文晩期織具

布目順郎

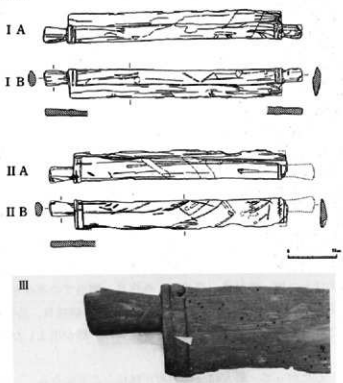
1993年11月30日付新聞紙上において、福岡市博多区雀居遺跡から縄文晩期の緯打具2点が発掘されたことが福岡市教育委員会によって発表された。両者はほぼ同形同寸で、長さ54cm、幅6.2cm、厚さ１～2cmで、両端に長さ各5cmの把がある。ただし、その中の1つは片方の把が折損している（図1）。
出土の緯打具といわれるものは、把以外の部分が長方形をなしていることや、把の位置が片方の側に偏っていることなど、従来の弥生時代緯打具が大方横長梯形、もしくは一端に把をもつ剣形か刀形であるのとは異なる形のものであることから、あるいは緯打具でないのでは、との意見もある。

しかし、唐古（弥生前期）や登呂（弥生後期）出土の機具の中にこれとやや似た形の経巻具があり、また、現代のアイヌ機の中にも類似の形をもつアツシッペラ（厚司箆）といわれる緯打具兼開口具があることから、雀居の出土品はやはり機具とみたほうが妥当のように思える。

その後、八丈島八丈町中之郷の機織研究家山下昌子氏から、雀居の出土品についての見解が寄せられた。1993年12月中に数回に亘って寄せられた私信の内容は説得性のあるものと思われるので、氏の見解を綜合、紹介する。

１．把以外の部分は片刃状に作られ、刃部の中央には力強く打ったために生じたと思われる摩耗がみられることから、緯打に使用されたに相違ない。しかし、両端の把は厚さが2cmほどもあるので、緯糸を通す毎に横から機へ出し入れするには不便である。したがって、常時、機へ入れ放しにしたものとみられ、中筒の役目もしていたと思われる。

図１



Ⅰ　両把を具えるもの
　Aの反対面がB、Aの箆部分での上側が刃
Ⅱ　把の片方を欠損するもの
　Aの反対面がB、Aの箆部分での上側が刃
Ⅲ　ⅡBの左端
　白矢印が撮影

後世の中筒は、その手前に綜統が設置されるので、中筒としての役目以外に緯打を兼ねることはできない。緯を打とうにも綜統が邪魔になって打てないからである。
雀居の出土品が中筒と緯打の両方の役目をもっていたとすれば、綜統はなかったものとみられ、経糸をすくい上げるのには手指か、先端部を薄く作った箆を用いるしかない。すなわち、偶数または奇数の経糸を一度にすくい上げることのできる便利な綜統がとり入れられる以前の極めて原始的な織機ということになる。

２．雀居の出土品は経巻具や布巻具としても使われた可能性が考えられる。その場合、刃状部は断面が丸や楕円のものよりも経糸や布の締まりがよく、また緯糸の細さと合い、始

めと終わりの緯糸の収まりもよいので、きちんと織れる。

3．以上から、雀居の出土品は幾通りにも使い廻しのきく便利な機具であったとみられ、その点、後世の、用途が固定された融通のきかないものと違って自由さがあった。

図2

I　登呂遺跡出土の経巻具（弥生後期）
II　唐古遺跡出土の経巻具（弥生前期）

弥生遺跡出土の類似機具
（日本考古学協会編『登呂（本編）』1954より転写）

以上が山下氏の見解であるが、同じものが二個一緒に出ていることから、一つは中筒兼緯打具として、もう一つは布巻具として同時に使用された可能性も考えられ、また、一つは経巻具、他は布巻具として同時に使用されたと考えることもできよう。つまり、二個がセットとして同一機に使用されたとする考え方である。

すでにのべたように、類似の品が登呂や唐古の弥生遺跡からも出ている。（図2）。そのことが氏の二番目の想定の根底にあると思われるが、唐古のものには刃の反対側（背部）に経糸または布を固定させるための溝（ここへ細棒をはめる）があるのに対して、雀居のものにはそのような溝がない。その代わりに、おそらく添木のようなものが用いられたであろう。

アイヌ機具の中にも類似のものがアツシッペラ（篦）として用いられていることについてはすでにのべた通りであるが、アイヌの場合は綜絖や中筒が別にあり、アツシッペラの両端の把が、横からの出し入れが容易にできるように薄く作られていることでもわかるように、その役目は開口と緯打だけである（図3）。

図3

アイヌのアツシッペラ（厚司篦）
（角山幸洋『日本染織発達史』1976より）

私は、右の登呂や唐古やアイヌの機具を、縄文原始機具の発展した形とみたい。

雀居の機具には、両把の間の幅広い部分の両端に近いところに、それぞれ一本の線刻が、篦を横切るようにして彫られている。これも、アイヌのアツシッペラの把部にみられる彫刻と相通じるものがある。

岡村吉右衛門氏(1977)によると「アイヌの篦の幅は7－12、3cmぐらいで、古いものほど狭いようである。筆者のみた最も狭いものは6cmに満たないくらいであった」という。6cmという幅は雀居の出土品で幅と丁度一致する。

山下氏は雀居出土の機具から極めて原始的な織機の存在を想像しているが時代的にさほど隔っていないとみられる唐古（弥生前期）出土のかなり進歩していたらしい機具の例によりみて、氏の一番目の想定（中筒兼緯打具）をとる場合は、そのほかに篦、緯越具、経巻具、布巻具、腰当ての存在を、また、二番目の想定（経巻具もしくは布巻具）をとる場合は、そのほかに中筒、綜絖、緯越具、綾棒、開口兼緯打具、腰当て等の存在を想像することもできるであろう。たまたま機具の一部が出土したに過ぎないとする見方である。

雀居の機具の刃部の長さは約44cmである。したがって、最大44cm幅の布が織れたことになる

婦人が貫頭衣を着ると記す『魏志』倭人伝の時代（三世期中葉）と雀居遺跡の時代（前300年）との間に約500年の隔たりがあることから、雀居遺跡の頃の人々が果たして貫頭衣を着ていたかどうかは疑問に思われるが、もし仮りに貫頭衣を着ていたとして、44cm幅の布で貫頭衣が作られるかどうかが問

題である。

出土の遺骨から推定した縄文時代の婦人の身長は約150cmとされるから、現代のおとなの婦人での平均身長約156cmに比べればかなり小さい。しかしたとえ150cmしかない小柄な婦人であっても、44cm幅の布では最小限ぎりぎりの貫頭衣しか作れなかったと思われる。

児玉マリ氏（1975）は、アツシッペラの篦の部分の長さを55cmぐらいといい、岡村氏（1977）は約50cmという。50～55cmもあれば貫頭衣としては十分余裕のあるものが作れたであろう。雀居遺跡（縄文晩期）の頃の婦人は、もしかするとまだ腰布しか着けてなかったのではなかろうか。

いずれにせよ、雀居の出土品によって、縄文晩期の北部九州ですでに織機が使用されていたことが明白になったわけで、従来、唐古遺跡（奈良県磯城郡田原本町）の織具が日本最古といわれていたのが、さらに時代を遡ることになった。当時の絹がまだ発見されていないことから、雀居の織具は麻布用であったとみられる。

ところで、縄文時代に汎用されたとみられるアンギン編機でもって、編物以外に織物も作れることが尾関清子氏（1989、1991、1993）の研究によって判明していることから、一部縄文土器にみられる織目文の原体がアンギン編機によって作られた可能性が考えられる。ところが、雀居遺跡の機具によって、縄文晩期の九州北部において織機による織物生産も行われていたことが明らかとなった今日、いったい縄文土器面の織目文の原体は、アンギン編機によるものか、それとも織機によるものかの区別ができなくなった。

終わりに、興味ある見解を寄せられた山下昌子氏に敬意を表すると同時に機具の図を提供された福岡市教育委員会に対し深く感謝する。

文　献

岡村吉右衛門『日本原始織物の研究』文化出版局，1977

尾関清子「縄文時代の布について－千葉県香取郡山田町姥神遺跡採集の土製品の考察（第一報）」フイールド考古『足あと』7号）1991

尾関清子「縄文時代の布－編布・織布とその製作技法」（『生活学』14）1989

尾関清子「縄文時代の布」（『富山市日本海文化研究所報』11号）1993

鎧山猛「原生期の織布－九州の組織痕土器を中心に」上、中（『史淵』84、86輯）1961、下（『史淵』89　輯）1962

児玉マリ「アツシを織る機」（『服装文化』148号）1975

角山幸洋『日本染織発達』田畑書店、1976

日丸哲也ほか編著『健康・体力評価基準値事典』きょうせい1991

日本考古学協会編『登呂（本編）』毎日新聞社1954

布目順郎「境A遺跡出土土器底面の編・織目痕」（『北陸自動車道遺跡調査報告－朝日町編7－境A遺　跡総括編』）1992

山口敏「縄文人骨の変異」（加藤晋平ほか編『縄文文化の研究』1縄文人とその環境）雄山閣、1982

付論２　雀居遺跡第５次調査出土漆製品の塗膜について

福岡市埋蔵文化財センター　本田　光子
（財）京都市埋蔵文化財研究所　岡田　文雄
宮内庁正倉院事務所　成瀬　正和

はじめに

雀居遺跡第５次調査出土漆製品についてＸ線分析と塗膜断面構造の顕微鏡観察を行い、塗膜の状態や顔料等の種類等を調査した。塗膜断面の観察において、漆あるいは漆以外の樹脂とする判断は、理科学的な方法による分析を経たものではない。顕微鏡所見による塗膜の色調、層厚、赤色顔料の分布状態等を基に判断を行ったものである。また、塗膜層中の朱とベンガラの分類については、蛍光Ｘ線分析の結果と検鏡による赤色顔料粒子の形状から総合的に判断した。雀居遺跡第４次調査出土漆製品に認められた塗膜についての同様な調査の結果（福岡市埋蔵文化財調査報告書第406集）と併せて、本遺跡出土漆器の塗膜構造と顔料に関わる若干の考察を試みた。表に試料の一覧と調査結果を示す。

試料

Ｘ線分析、塗膜断面の顕微鏡観察には、３mm～５mm角の破片を用いた。塗膜に剥離した部分がある場合ではその位置から、それ以外は塗膜の端部から採取した。Ｘ線分析には採取した塗膜片をそのままで用い、測定終了後、断面観察に供した。

蛍光Ｘ線分析

赤色顔料の主成分元素の検出を目的として、No１、３について蛍光Ｘ線分析を実施した。理学電機工業(株)製蛍光Ｘ線分析装置を用い、Ｘ線管球；クロム対陰極、印加電圧；40kv、印加電流；20mA、分光結晶；フッ化リチウム、検出器；シンチレーション検数管、で測定を行った。赤色顔料の主成分元素としては、両試料とも鉄と水銀が検出された。

塗膜断面の顕微鏡観察

試料を常法によりエポキシ樹脂に包理し、数μmに研磨した薄片をプレパラートに製作した。塗膜構成の観察結果については、木地を（ａ）、下地を（ｂ）、下地の上の塗層を（ｃ）とし、その塗り重ねを（c_1，c_2・・・・・）と表記した。

No１　椀

塗膜構成は木地（ａ）とその上の塗層（c_1-c_7）からなり、下地（ｂ）はない。塗膜の下部に木地で、ベンガラの密度はc_1よりもc_2の方が高い。層厚は各々約40μmである。塗層c_4、c_5はベンガラを混和した層で、その密度は、c_4がc_5とほぼ同じで高く、c_5がc_1とほぼ同じでc_4より低い。漆層はc_6は褐色の層中に朱が密に混和されており層向に垂直な亀裂が多数認められた。層厚は10μm以下である。漆層c_7はc_6と同様に朱が混和されているが、その密度はc_6よりも低い。層厚は15μm以下である。

	遺物	出土位置	蛍光X線		塗膜の構成	漆層（c）			枠図	
			鉄	水銀		黒色	赤色	赤色顔料	遺物	塗料
1	楯	SP-03	−	+	（ベンガラ＋漆）と（朱＋漆）が交互に9層塗り		①	朱、ベンガラ		1
2	短甲				木地と境界が判然しない不明膠着剤	⑤				2
3	幅（外）				黒色顔料＋漆、その上に透明漆	③				3
4	幅（内）		+	+	赤色顔料（朱）＋不明膠着剤		③	朱		4

第1表　資料の一覧と調査結果

漆層 c_3は赤色顔料を含まない透明な漆層で、層厚は10μm以下である。漆層 c_3は朱を混和した層で、朱以外に不純物が混じっている。層厚は約35μmである。

No2　短甲（PL. 1、2）

塗膜構成は木地（a）とその上の塗層（c）からなる。塗膜の下部に木材組織が付着している。木地の表面付近は収縮しているが、膠着剤がわずかに浸透している様子が窺える。木地表面にわづかに塗膜は見られるが、層厚は一定せず5μm以下である。塗膜の色調は褐色で、不純物が少し混じる。

No3　楯　（PL. 2、3）

外面の（黒色）塗膜構成は針葉樹材の木地（a）とその上の漆層（c_1、c_2）からなる。漆層 c_1は木地に黒色顔料を混和した漆が約1細胞分の幅で浸透している。漆層 c_2は透明漆層で、層厚は5～50μmであり、表面から変色しているのが観察された。

内面（赤色）塗膜構成は木地（a）とその上の塗層（c）からなる。塗層は（a）の直上の朱を混和した赤色層であるが、朱粒子の間の膠着剤は不明で、朱の粒子径は　μm以下である。

結果と考察

今回の漆製品はすべて木胎漆器である。下地については、あるものとないものがある。ここでは、漆層に見られる黒色漆と赤色漆の技法および赤色顔料の種類を表に記した。

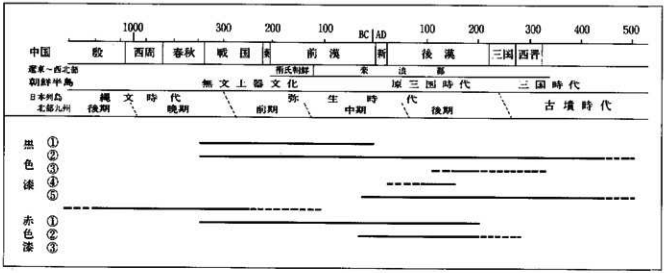
雀居遺跡出土例を含めて現在までに調査した北部九州地方出土漆器（51点）は、黒色漆と赤色漆の技法に次のようなタイプが認められる。黒色漆と赤色漆の塗膜構造の変遷について第2表に示した。

黒色漆　①　漆と木炭粉を混和した下地の上に透明漆を塗布したもの
　　②　木炭粉以外の黒色物質の上に透明漆を塗布したもの
　　③　黒色顔料を含む層の上に透明漆を塗布したもの
　　④　朱を混和した漆層の上に透明漆を塗布したもの
　　⑤　木地との境界が判然としない茶褐色の塗膜が認められるもの

赤色漆　①　赤色漆を塗り重ねるもの
　　②　単層の赤色漆層（全面ないし文様）が認められるもの
　　③　朱と不明膠着剤（漆かどうかわからない）の混和層が認められるもの

黒色漆とは、表面から黒色として認識される塗膜で、塗膜の黒色の由来により分類した。黒色漆①は木胎の表面に漆と木炭粉の微粉末を混和した下地を施し、その上に黄褐色を呈する透明な漆を塗布したものである。単独あるいは赤色漆②と組合わされ、栄畑遺跡の山ノ寺式期の漆器に認められ、拾六町ツイジ遺跡の腕輪、比恵25次の脚付杯、瓦町遺跡の高杯、比恵35次の把手容器等、弥生時代中期後半まで続いている。黒色漆②は木胎の表面に石英類の微少な透明鉱物をわずかに含み、その上に木炭粉以外の黒色物質（黒土の類）を漆に混和して塗布しさらに黄褐色を呈する透明漆を使ったと認め

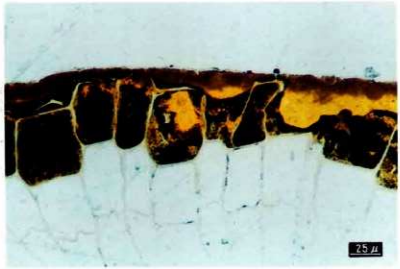
表2　北部九州地方出土漆器における黒色漆と赤色漆の塗膜構造の変遷



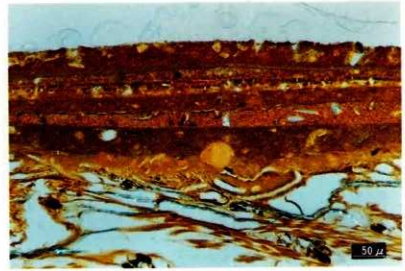
られるものである。この技法は単独で、あるいは赤色漆②と組合わさり、赤色の文様や全面に塗布される。黒色漆の単独としては雀居遺跡4次のSX-03出土弓(W-No555)、黒字に赤色模様としては同4次調査SD-03下層出土の弓（W-No143）に認められ、拾六町ツイジの高杯、雀居4次調査のSD-03出土筒型容器、高畑12次の弓等古墳時代まで継承されている。黒色漆③は、木胎の上に油煙類と見られる黒色顔料を混和した漆を直接塗布し、その上に透明漆を塗布した結果黒色に見えるものである。雀居遺跡5次出土の盾に見られる。北部九州地方以外では滋賀雪の山古墳出土靭や同県松原内湖出土笠骨に認められ、古墳時代に継承される。黒色漆④は特異な例であるが木地の上に朱を混和した漆を塗り、ついで透明漆を塗り重ねたもので、比恵33次出土の柄がある。表面からはわずかに赤味を持った黒色に見える。黒色漆⑤は、木地との境界が判然としない茶褐色の把着剤を塗布したもので、表面からは黒色に見える。塗膜は非常に薄く、かつ塗膜の表面から層面と垂直な亀裂が入っているのが特徴である。比恵35次の容器類や拾六町ツイジの杓子等に見られ古墳時代まで続く物である。雀居遺跡5次出土の木製短甲はこのタイプである。岡山市鹿田遺跡の短甲も肉眼観察からではあるが、このタイプと思われる。この手の塗りについては一般的に柿渋や漆以外の樹脂が想定されている。

赤色漆①は、赤色漆を繰り返し塗布するもので、赤色顔料としては朱とベンガラの両者が単独あるいは重層・交互に塗り重ねられる。雀居遺跡5次の椀は典型的な例であり、4次調査出土の把手付容器、堅櫛？や弓(SX-08下層)もこの技法である。四箇遺跡A地点出土木刀状漆器、四箇24次の椀、来畑遺跡出土漆器、板付G-7bの不明木製品等、最近では由比本村出土鞘などが認められる。赤色漆②は単独あるいは前述のように黒色漆①、②と組み合わされる。雀居遺跡4次のSX-12出土弓は単独であり、把頭飾、筒型容器の蓋等に認められる。赤色漆③は、木地の表面全体に朱を塗布しているが、明瞭な塗膜が認められないことから、通常朱塗りあるいは朱彩と呼ばれているものである。4次調査の案と5次調査の楯（内面）に認められる。今宿五郎江の棒状木製品が初現であるが、各地出土の楯はほとんどがこのタイプである。

赤色漆①は縄文時代後晩期の西日本出土漆器に共通した技法の可能性が高い。これに対して、黒色漆②、③、④と赤色漆②、③の技法は中国古代漆器（戦国時代から後漢時代まで）の技法に類似が認められる。今後は北部九州地方の調査例を増やすとともに、西日本全体に資料を求め、中国、朝鮮半島の漆器についても調査を続けたい。

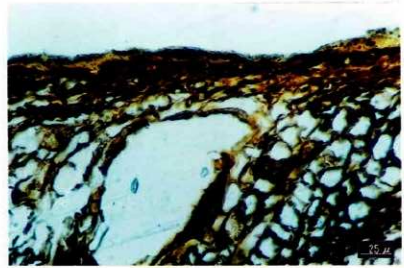


3　No.3　楯（外面）



1　No.　椀

4　No.4　楯（内面）



2　No.2　短甲

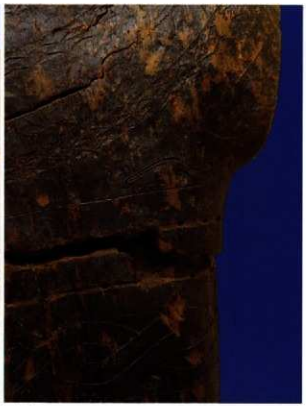
漆膜の顕微鏡写真

PLATE

（2）ＳＤ－002出土木製短甲（表）

（1）ＳＤ－002出土木製短甲（表）

（1）ＳＤ－002出土木製短甲（細部）

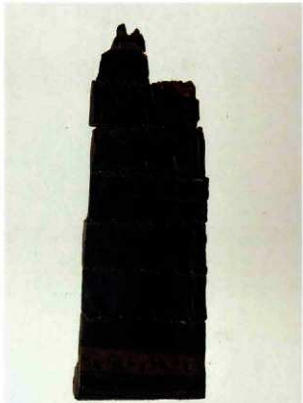


（2）ＳＤ－002出土木製短甲（細部）

（3）ＳＤ－002　出土木製楯（裏）

（4）ＳＤ－002出土木製楯（表）

PL. 3　（1）ＳＤ－002出土木製槽（裏）



（2）ＳＤ－002出土木製槽（表）

（3）ＳＤ－003出土無文土器

（4）ＳＤ－003出土外来系土器

（1）ＳＤ－003出土土器

（2）溝、掘立柱建物出土青銅器

（1）Ⅰ区調査区全景（南から）

（2）Ⅱ区調査区全景（南から）

（1）甕棺出土状況

（2）ＳＫ－107（西から）

（1）ＳＫ－159（東から）

（2）ＳＫ－159遺物出土状況

（1）ＳＤ－174、ＳＫ－175（北から）

（2）ＳＫ－175遺物出土状況

(1) SK−177 (西から)

(2) SK−188 (南から)

（1）ＳＫ－209（西から）

（2）ＳＤ－003下層木器出土状況（南から）

（1）ＳＤ－003木器出土状況

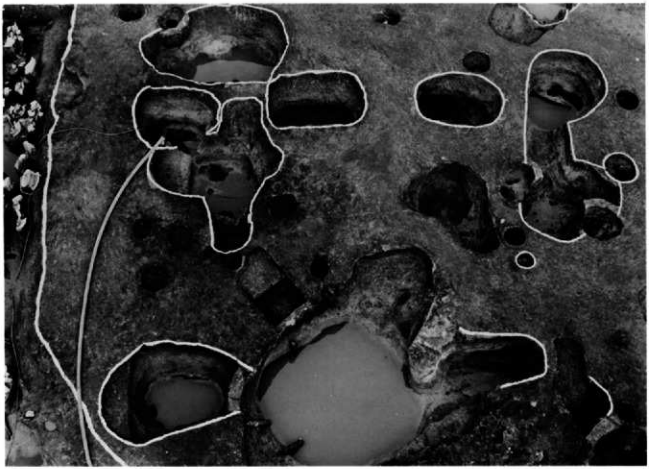
（2）ＳＤ－104（北西から）

（1）ＳＤ－104木器出土状況

（2）住居跡群（南東から）

（1）ＳＣ－193（北から）

（2）ＳＢ－222（南西から）

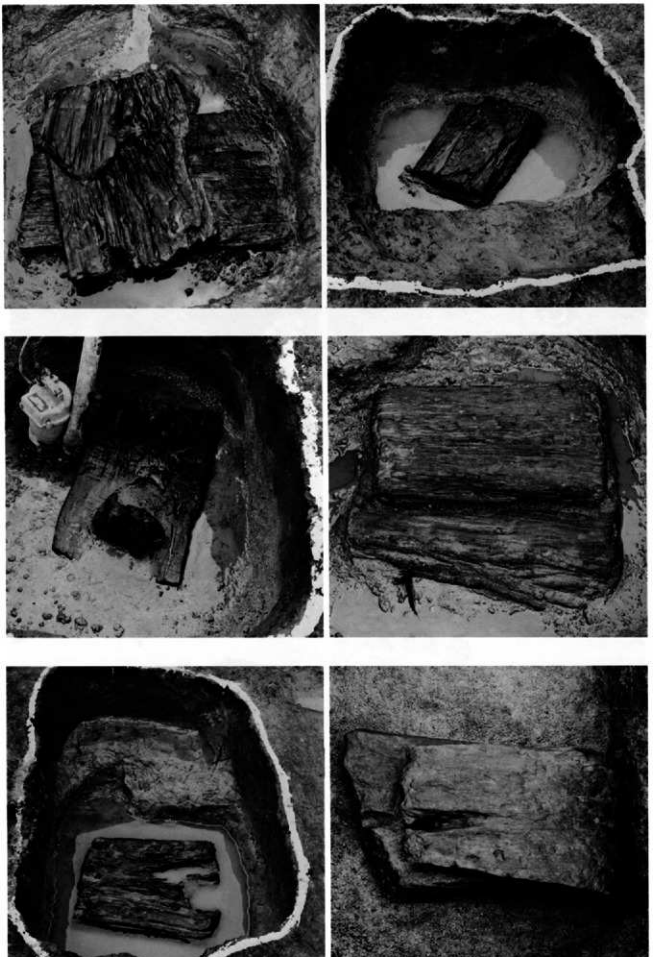


（1）ＳＢ－225（西から）

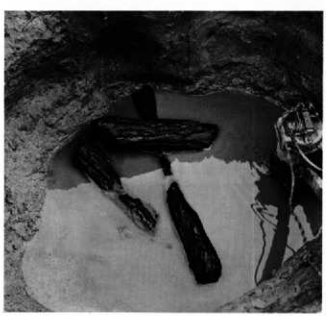
（2）ＳＢ－226（西から）

（1）ＳＢ－232（東から）

（2）ＳＤ－002全景（東から）



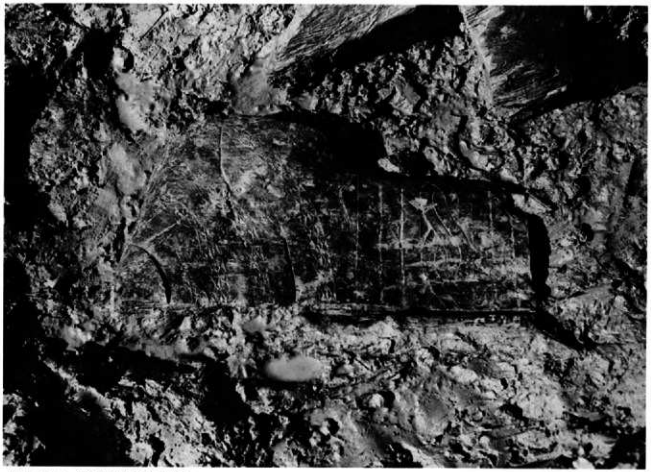
掘立柱建物礎板（ＳＢ－222）



掘立柱建物礎板（S B－225,226,232）

（1）ＳＤ－002完掘状況（東から）

（2）ＳＤ－002木器出土状況（東から）



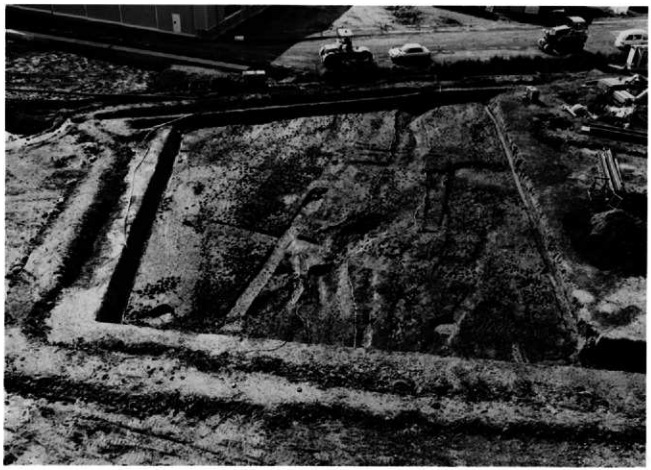
（1）ＳＤ－002木製短甲出土状況

（2）ＳＤ－002中央土層（東から）

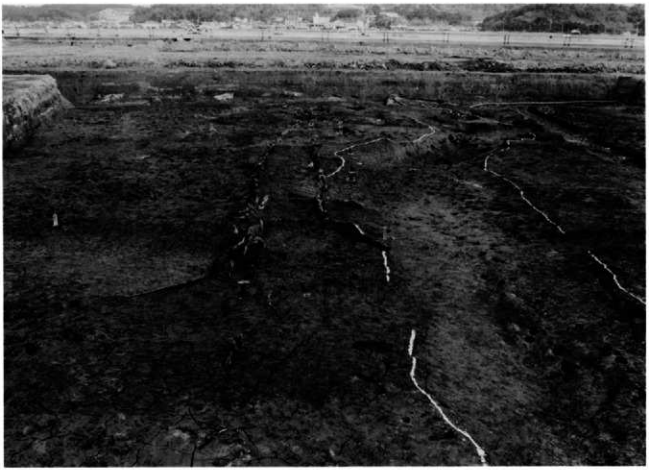
（1）ＳＤ－221全景（西から）

（2）ＳＤ－221土層（西から）

（1）ＳＤ－221木器出土状況

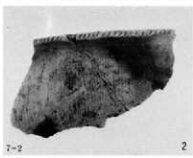


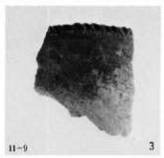
（2）Ⅲ区全景（西から）

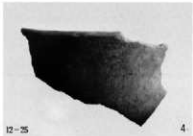


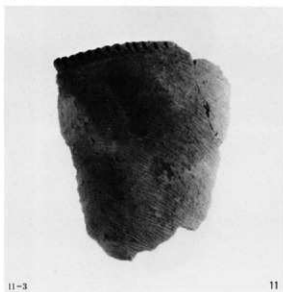
（1）III区杭列全景（西から）

（2）III区A杭列断面（西から）

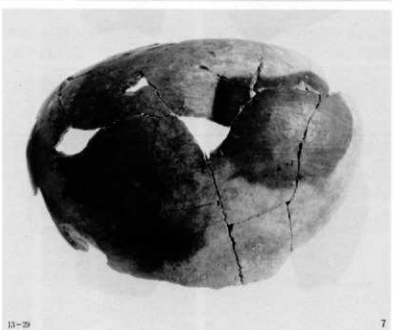




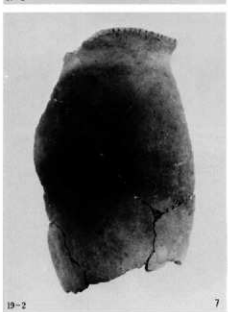




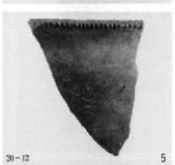
K－179甕棺下、ＳＫ－107、159出土土器（1…K－179、2…ＳＫ－107、3～11…ＳＫ－159）

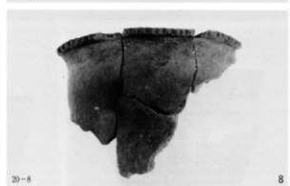


SK－159出土土器

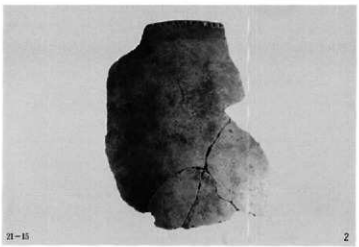


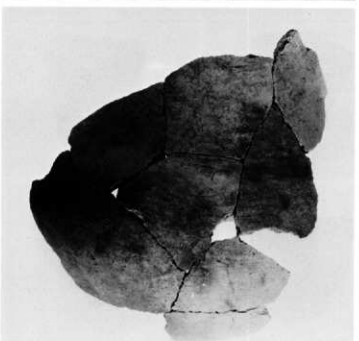
SK−159、175、177出土土器（1…SK−159、2～6…SK−175、7～9…SK−177）



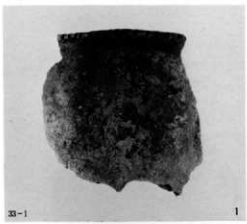


SK－178、188出土土師器（1～3…SK－178、4～10…SK－188）





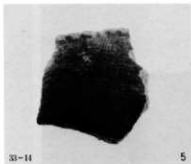
SK－188出土土器


33－1
1

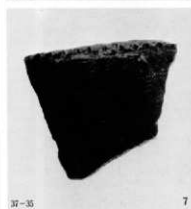
33－35
2

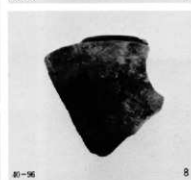
36－17
3

36－18
4

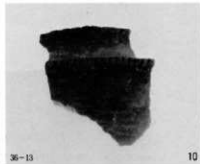

33－14
5

36－19
6


37－35
7


40－56
8

39－71
9


36－13
10

38－37
11

41－114
12

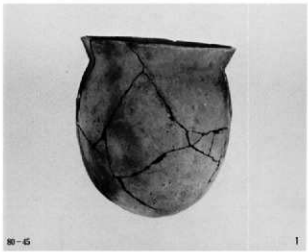
36－2
13

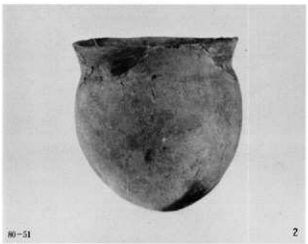
33－34
14

SD－003出土土器

SD－003出土土器

SD－003出土土器


80-45
1

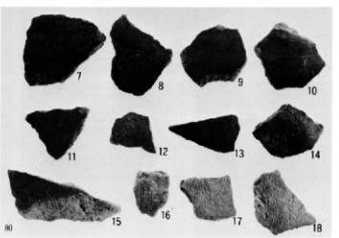

80-51
2

77-29
3

80-54
4

75-8
5

79-36
6


7
8
9
10
11
12
13
14
80
15
16
17
18

SD-221出土土器

SD－221出土土器

84－107
1

84－108
2

84－109
3

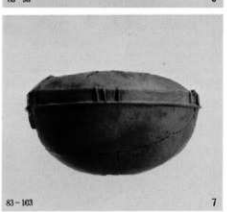
84－111
4

84－114
8

84－113
9

86－159
5

83－96
6


83－163
7

SD－221出土土器

85－119
1

85－120
7

85－125
2

85－127
8

85－131
3

85－122
9

85－128
4

85－129
10

85－132
5

85－137
11

85－124
6

85－133
12

SD－221出土土器

85－147
1

86－148
2

87－162
3

87－171
4

87－160
5

87－167
6

88－173
7

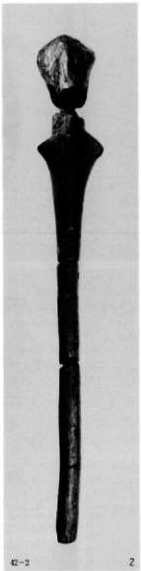
88－182
8

88－178
9

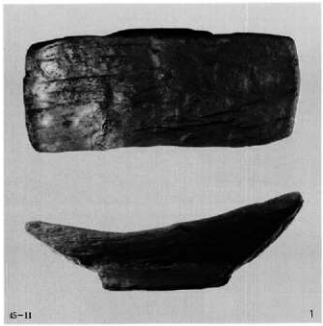
SD－221出土土器

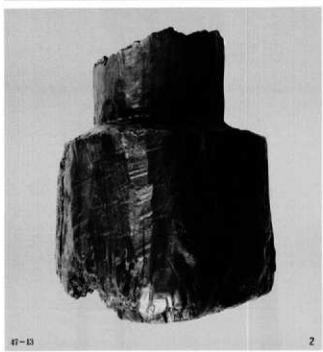
S D－002、221出土土器、土製品（1～8…S D－221、9～13…S D－002）

SD－002、SK－104、SB－222、SC－140、145出土土器（1～6…SD－002、7…SD－104、8…SB－222、9、10…SC－140、11…SC－145）

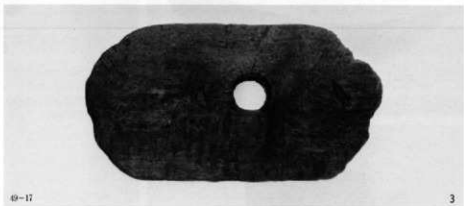


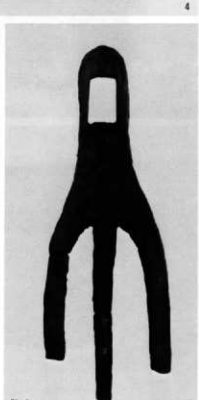
SD－003出土木製品



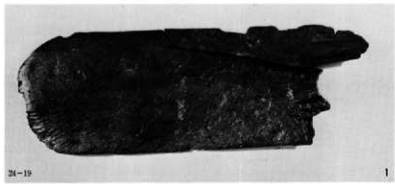


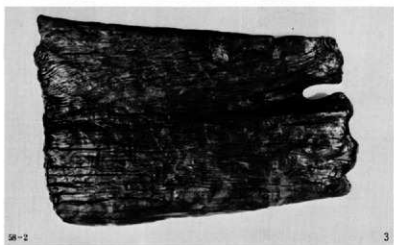
SD－003出土木製品

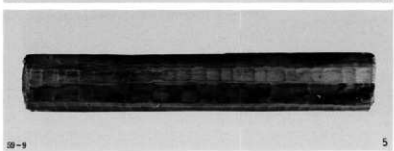




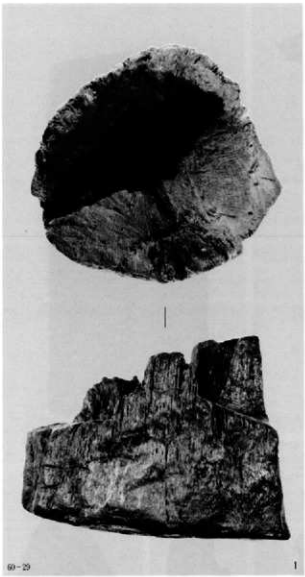
SD－003、104出土木製品（1～7…SD－003、8…SD－104）

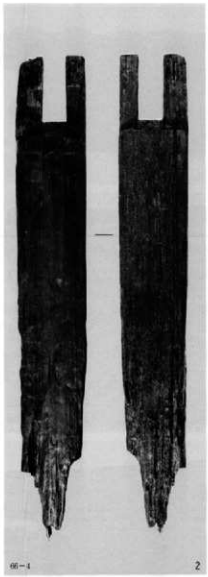


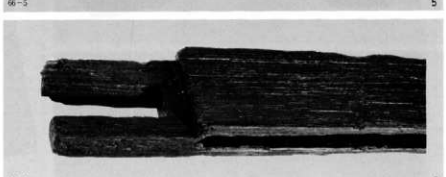




掘立柱建物礎板（1…SD－214、2～8…SB－222－14、225－6、226－1、232、226－4、226－5）







SB－225出土柱、SD－002出土木製品（1…SB－225、2～6…SD－002）

67－7 1

68－8 2

68－9 3

68－11 4

69－13 5

68－10 6

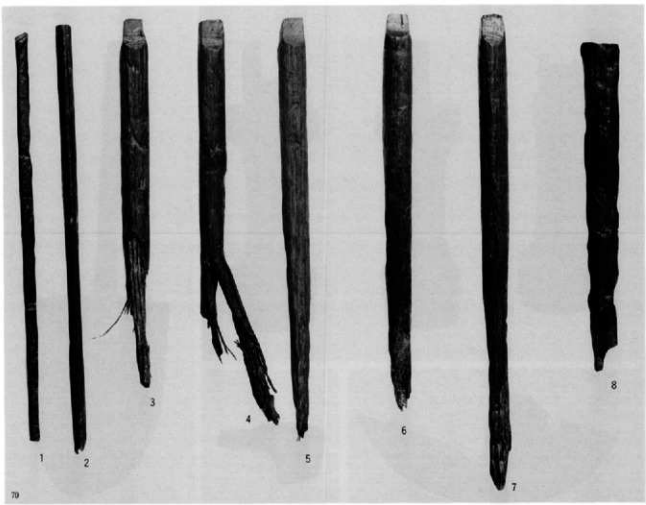
68－12 7

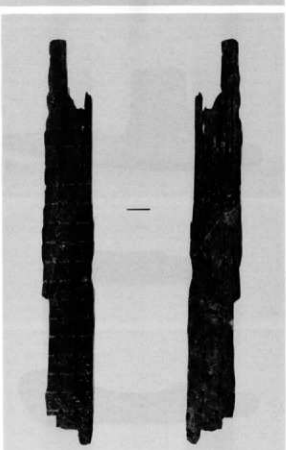
69－15 8

69－14 9

70－16 10

S D－002出土木製品





SD－002、221出土木製品（1～10…SD－002、11…SD－221）

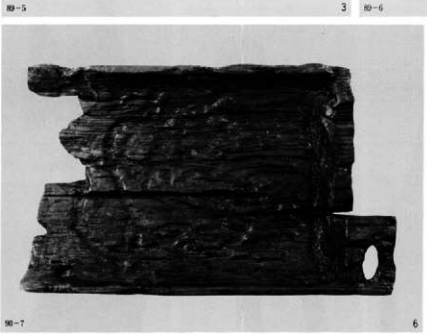
89-2 1

89-3 2

89-6 4

91-11 5

89-5 3


90-7 6

91-10 8

91-9 7

SD-221出土木製品

91－15
1

91－13
4

92－17
7

92－19
9

91－12
2

91－14
5

92－20
10

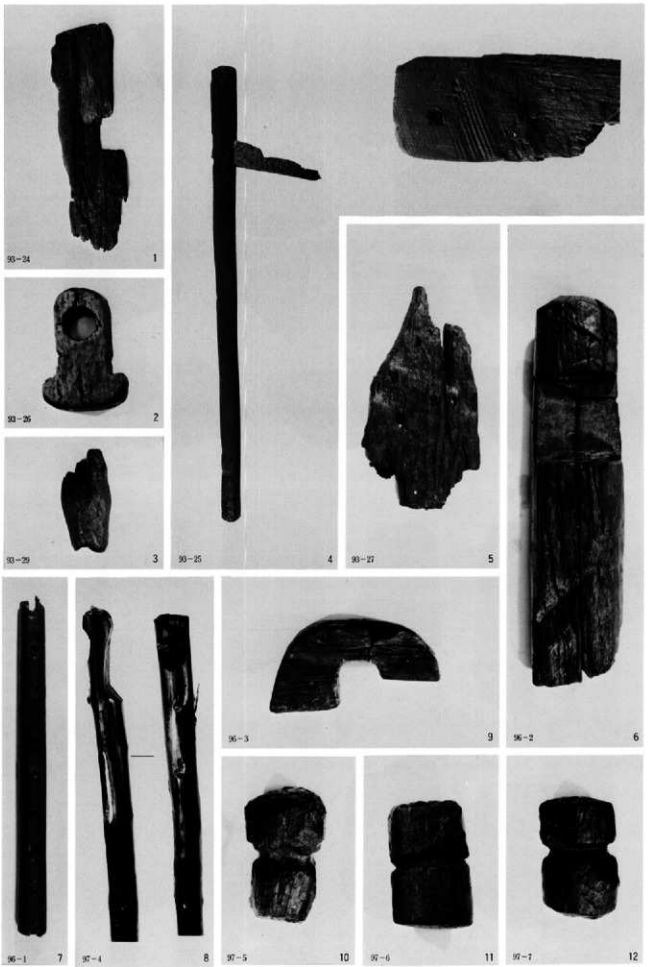
92－22
3

92－18
6

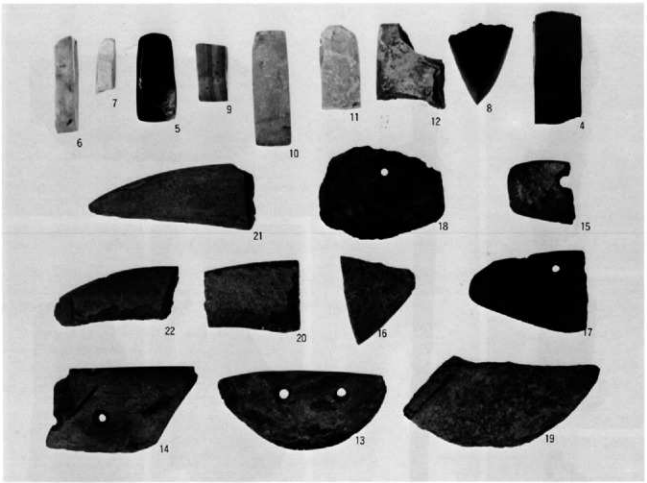
92－23
8

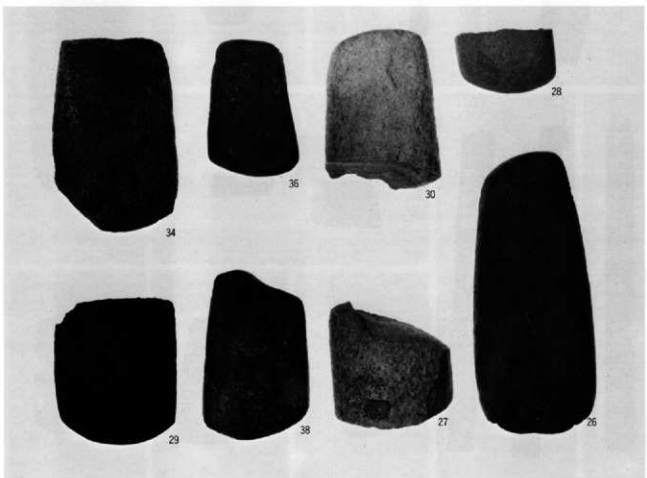
92－21
11

SD－221出土木製品

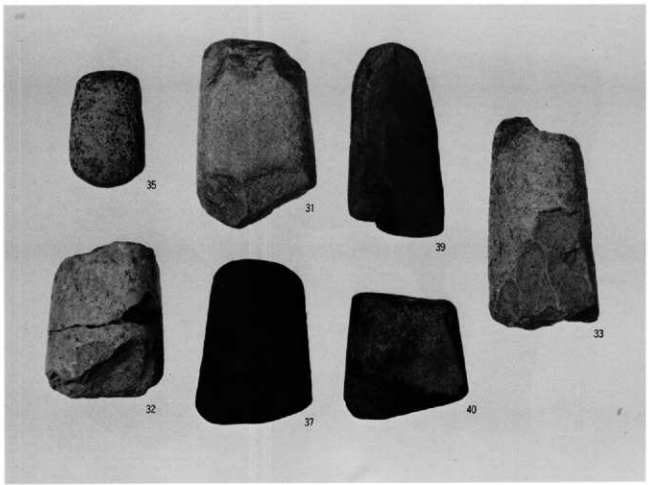


SD−221、SX−101、ピット出土木製品（1～5…SD−221、6～9…SX−01、10~12…ピット）

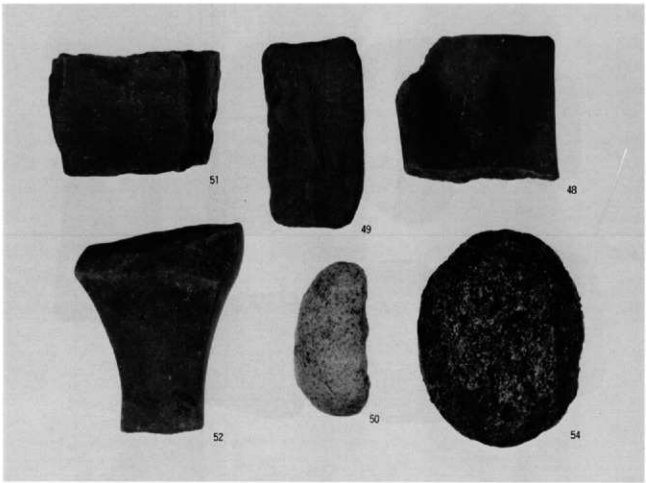


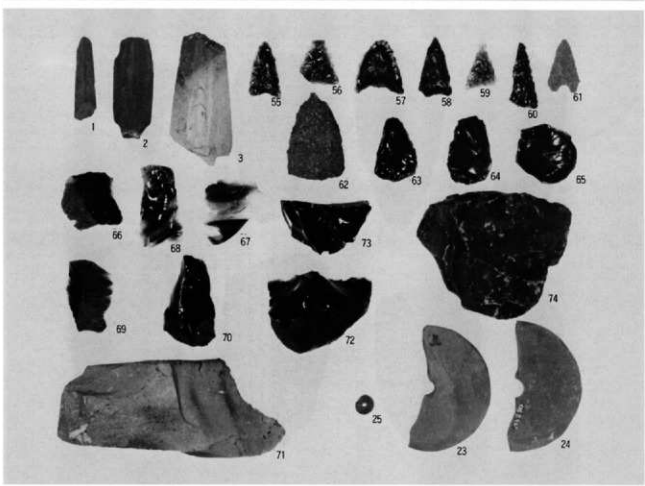


各遺構、及び包含層出土石器（1）



各遺構、及び包含層出土石器（2）





各遺構、及び包含層出土石器（3）

福岡空港西側整備に伴う
埋蔵文化財調査報告
福岡市埋蔵文化財調査報告書第407集

雀居（さざい）遺跡 3

1996年（平成７年）３月31日
発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神１丁目8-1
印刷　赤坂印刷株式会社
福岡市中央区大手門１丁目8-34